

九州自動車道筑紫野 I・C 建設に伴う発掘調査報告

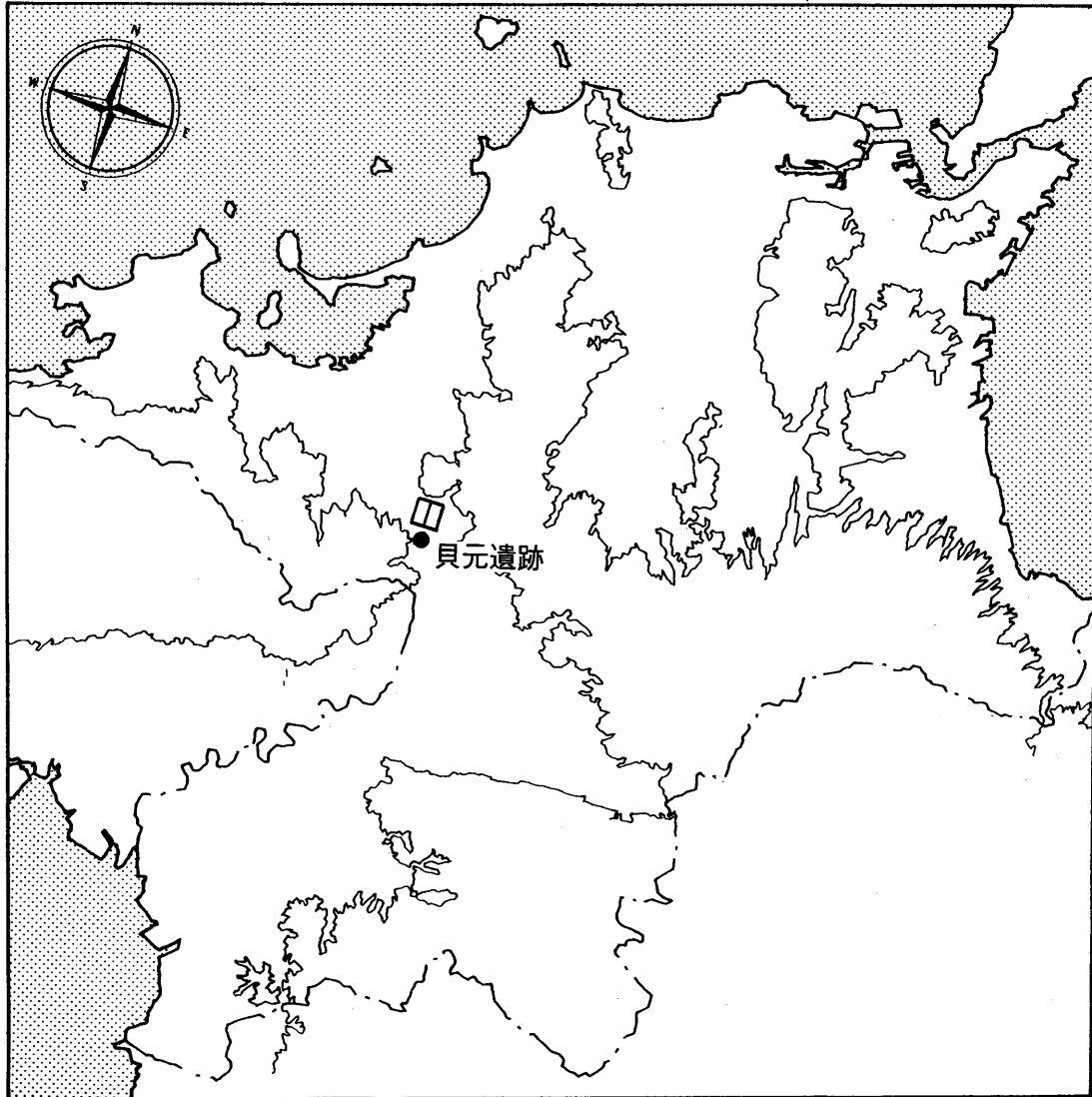
貝 元 遺 跡 1

筑紫野市文化財調査報告書
第 60 集

1999

筑紫野市教育委員会

かいもと いせき
貝元遺跡 1



序

本書は、インターチェンジ建設に伴って筑紫野市教育委員会が平成7・8年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

筑紫野市では、近年中心部の市街地では再開発が活発に、また南部地域では大規模な区画整理事業が進み、一部の自然を残して新しい住宅地が増えております。

このような状況の中で、インターチェンジが建設されました古賀地域は未だ開発の手を逃れ、多くの自然や田園風景を残し、歴史的には大宰府政庁と基肄城を結ぶルート上に位置する重要な拠点であったと推測されておりましたが、何も解明はされていませんでした。

今回の調査によって、弥生時代から奈良時代における先人達の^{そくせき}足跡を窺うことができました。

これらは、古賀地域の歴史を知る上での貴重な資料となり得るものばかりです。

本書は、その報告の一冊目に当たり、今現在、整理作業を継続しておりますが、夥しい量の出土遺物と遺構量に追われ整理・報告が遅れている現状ですが、整理がつき次第逐次報告書を刊行していく予定です。

発掘調査にあたりまして、地元古賀地域の皆様をはじめ、工事関係者各位に深いご理解とご協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

平成12年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が平成7年度から8年度にかけて実施した「筑紫野インターチェンジ建設」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した報告は、平成7年度調査実施したもので、分割して報告するため本書を「貝元遺跡1」とした。
3. 調査に係る一部の遺構実測は、渡邊和子が行い、全体の遺構については国際航業株式会社（現場代理人：島田茂樹）に写真測量を委託した。
4. 本書掲載の遺構の略号は、柵をSA、建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、溝状遺構をSD、土坑をSK、墓をST、性格不明遺構をSX、柱穴をPitとした。
5. 遺構写真は渡邊が撮影し、空中写真は(有)空中写真企画に委託撮影した。
6. 本書掲載の遺物の実測は、一部を渡邊が他は(有)埋蔵文化財サポート（野田典子・福田京子・提圭子・光石逸子・本山千絵・淵野玲子・大塚利香子）に委託した。
7. 遺物写真の撮影についてはフォトハウスOKAに委託した。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 報告書作成に係る製図は、(有)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
10. 挿図中に使用した方位は国土調査法第Ⅱ座標系を基準にしている。
11. 遺物の復元および整理作業には、浅谷芳江・池田晃子・加藤美智子・北野正子・宗和代・鶴浄美・田中紘子・高木保子・松窪美智子・松尾敦子・百田愛子・山内妙子・山内由美が従事した。
12. 本書の執筆・編集は、渡邊が行なった。

目 次

本 文

	頁		頁
1. 調査に至る経過と組織	2・3	(5) 溝状遺構 (SD)	55
2. 周辺の地形と位置	5	(6) 土坑 (SK)	59
3. 調査の概要	5	(7) 貯蔵穴 (SP)	67
(1) 試掘および検出面の遺物	8	(8) 柱穴 (Pit)	70
(2) 石棺墓	9	(9) 性格不明遺構 (SX)	80
(3) 甕棺墓	9	4. 小 結	81
(4) 竪穴住居跡 (SC)	12		

挿 図 (Fig)

Fig. 1 貝元遺跡位置図 (S1/25,000)	1	Fig. 21 SC24・30・33およびSC30カマド実測図 (S1/60・1/30)	27
Fig. 2 貝元遺跡周辺地形図 (S1/5,000)	4	Fig. 22 SC25・26出土遺物実測図 (S1/2・1/ 3・1/4・1/6)	29
Fig. 3 試掘調査出土遺物実測図 (S1/3)	6	Fig. 23 SC27・29～31出土遺物実測図 (S1/3)	30
Fig. 4 検出面出土遺物実測図 (S1/3)	7	Fig. 24 SC35・40実測図 (S1/60)	31
Fig. 5 検出面出土遺物実測図 (S1/2)	8	Fig. 25 SC34～36・39～42出土遺物実測図 (S1/3・2/3・1/4)	32
Fig. 6 1・2号石棺墓実測図 (S1/30)	10	Fig. 26 SC43・47・50およびSC47カマド実測図 (S1/60)	33
Fig. 7 3号石棺墓実測図 (S1/30)	11	Fig. 27 SC49出土遺物実測図 (S1/2)	34
Fig. 8 1～3号甕棺墓実測図 (S1/30)	11	Fig. 28 SC44・45・50出土遺物実測図 (S1/3・1/1)	34
Fig. 9 1～3号甕棺実測図 (S1/4) 【折り込み】		Fig. 29 SC53・54・56実測図 (S1/60)	35
Fig. 10 SC1実測図・カマドおよび遺物実測図 (S1/60・1/30・1/3)	13	Fig. 30 SC51・52・55・59・61～63・65出土遺物 実測図 (S1/3・2/3・1/4)	36
Fig. 11 SC2実測図 (S1/60)	14	Fig. 31 SC53・56出土遺物実測図 (S1/3・1/4)	37
Fig. 12 SC3およびカマド実測図 (S1/60・1 /30)	15	Fig. 32 SC67およびカマド実測図 (S1/60・1/30)	39
Fig. 13 SC3出土遺物実測図 (S1/3・2/3・ 1/6)	16	Fig. 33 SC68およびカマド実測図 (S1/60・1/30)	40
Fig. 14 SC5・9実測図およびSC7・9出土遺 物実測図 (S1/60・1/3)	17	Fig. 34 SC67・68出土遺物実測図 (S1/3)	41
Fig. 15 SC10・12実測図 (S1/60)	18	Fig. 35 SC68出土遺物実測図 (S1/2・1/3・ 1/4)	42
Fig. 16 SC10～12・14出土遺物実測図 (S1/2・1/3)	20	Fig. 36 SC72・81・89およびSC89カマド実測図 (S1/60・1/30)	43
Fig. 17 SC13およびSC12・13カマド実測図 (S1/60・1/30)	21	Fig. 37 SC71・72・77・82・84・87・89出土遺物 実測図 (S1/3)	44
Fig. 18 SC10～14出土遺物実測図 (S1/3)	22		
Fig. 19 SC16・17実測図 (S1/60)	24		
Fig. 20 SC16・17・21・22・24・25出土遺物実測 図 (S1/3・1/4)	26		

	頁		頁
Fig.38 SC93・95およびSC95カマド実測図 (S1/60)	45	Fig.54 SK15出土遺物実測図 (S1/3)	61
Fig.39 SC84・85・87・88・93・95出土遺物実測 図 (S1/2・1/3)	46	Fig.55 SK15・17出土遺物実測図 (S1/2)	61
Fig.40 SC97・103実測図 (S1/60)	47	Fig.56 SK25出土遺物実測図 (S1/4)	62
Fig.41 SC96・97・100・103出土遺物実測図 (S1/3)	48	Fig.57 SK4・17・29・31出土遺物実測図 (S1/2・1/3)	62
Fig.42 SC107実測図およびSC105・107・108出 土遺物実測図 (S1/60・1/3・2/3)	49	Fig.58 SK29・33・37・42・43実測図および SK29・37・42出土遺物実測図 (S1/60・1/3)	63
Fig.43 SC109・110・112・113・117出土遺物実 測図 (S1/3・2/3)	50	Fig.59 SK37・42出土遺物実測図 (S1/3)	64
Fig.44 SC117出土遺物実測図 (S1/4)	51	Fig.60 SP1実測図 (S1/60)	65
Fig.45 SC122・123・126・129・133出土遺物実 測図 (S1/1・1/3)	52	Fig.61 SP1出土遺物実測図 (S1/2・1/3・1/4)	66
Fig.46 SC135実測図およびSC135・136出土遺物 実測図 (S1/60・1/3)	53	Fig.62 SP4出土遺物実測図 (S1/2)	67
Fig.47 SD1・4・15・16出土遺物実測図 (S1/3)	55	Fig.63 Pit出土遺物実測図 (S1/3)	68
Fig.48 SD18出土遺物実測図 (S1/3)	56	Fig.64 Pit出土遺物実測図 (S1/3・1/4)	69
Fig.49 SD23出土遺物実測図 (S1/3)	57	Fig.65 Pit出土遺物実測図 (S1/2)	71
Fig.50 SK1～5・7実測図 (S1/50)	58	Fig.66 Pit出土遺物実測図 (S1/2・1/3)	72
Fig.51 SK4・5出土遺物実測図 (S1/3)	59	Fig.67 Pit出土遺物実測図 (S2/3・1/3)	74
Fig.52 SK9・12出土遺物実測図 (S1/3)	59	Fig.68 Pit出土遺物実測図 (S1/2・1/3・ 2/3・1/4)	75
Fig.53 SK8・10・14～16・18・25・26実測図 (S1/60)	60	Fig.69 Pit出土遺物実測図 (S1/3)	76
		Fig.70 SX1・2・4・6・7実測図 (S1/60)	78
		Fig.71 SX4・5・7・8・11出土遺物実測図 (S1/3)	79
		Fig.72 SX10・11実測図 (S1/60)	80

図 版 (PL)

PL. 1 全景	PL. 9 SC83, SC87, SC93, SC96, SC97
PL. 2 1～3号石棺墓・1～3号甕棺墓	PL.10 SC101, SC102, SC103, SC108
PL. 3 SC2・3, SC4, SC5, SC9, SC16, SC17	PL.11 SC25カマド, 試掘トレンチに切られたカマ ド, カマド遺物近景, 遺物除去後支脚
PL. 4 SC20, SC21, SC24, SC28, SC31	PL.12 SC105, SC135, SP1, SX1
PL. 5 SC30, SC33, SC35	PL.13 SK1, SK2, SK3, SK4, SK8, SK12
PL. 6 SC36, SC38, SC40, SC43, SC50	PL.14 Pit823, Pit1763, Pit1764, Pit1865
PL. 7 SC49, SC53, SC53遺物, SC54, SC55・56, SC57	PL.15 出土遺物
PL. 8 SC67, SC67床面遺物, SC68, SC71, SC72, SC76	

PL.16 出土遺物
PL.17 出土遺物
PL.18 出土遺物
PL.19 出土遺物
PL.20 出土遺物
PL.21 出土遺物
PL.22 出土遺物
PL.23 出土遺物

PL.24 出土遺物
PL.25 出土遺物
PL.26 出土遺物
PL.27 出土遺物
PL.28 出土遺物
PL.29 出土遺物
PL.30 出土遺物
PL.31 出土遺物

付 図

貝元遺跡遺構配置図－1 (S1/200)

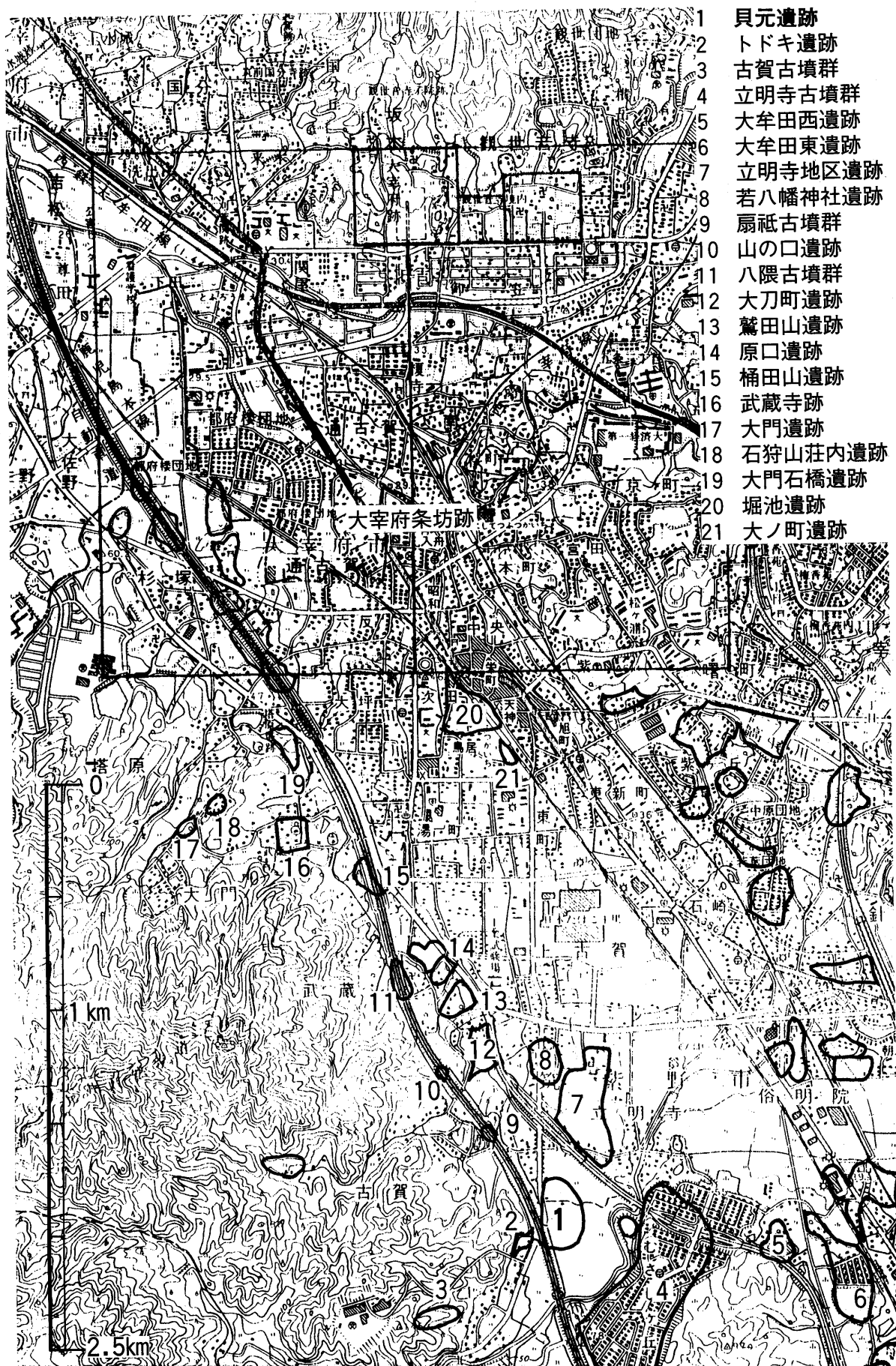


Fig. 1 貝元遺跡位置図 (S1/25,000)

1. 調査に至る経過と組織

筑紫野市では、インターチェンジを新たに建設し地元振興策とする計画を策定、平成7年度に建設予定地が決定された。これを受けて市教育委員会では、路線内の遺跡所在地を確認するとともに用地買収の済んだ県道取付部の1ヶ所の試掘調査を平成7年5月15日に実施した。

この試掘調査の結果を踏まえて、平成7年5月29日に市インターチェンジ対策室・JH福岡管理局・JH久留米管理事務所・福岡県土地開発公社・県教育庁文化課・福岡教育事務所・市教育委員会社会教育課とで、建設予定地内文化財調査に伴う、最初の調整会議が開かれた。調整会議の中で平成8年度中に工事完了、平成9年に共用開始予定の工事工程表が提出されたが、5月15日の試掘調査の経過報告では、インターチェンジループ部分に遺跡が広がるものと予測されたため、さらに試掘・確認調査を実施した後に具体的協議を行なう事で協議終了。

同年6月12～14日まで、福岡県教育庁福岡管理事務所職員の立会のもとに試掘調査を再開した。

試掘調査の結果、ループ予定地全面に遺跡が広がる事が確認された。市教育委員会内部では、調査体制を検討した結果、市教育委員会単独では工期内に調査を完了できないと判断し、福岡県文化課・福岡教育事務所と対策を相談、6月29日から調査体制・調査期間・調査費について協議をかさねたが、市教委の試掘の所見の違いが、県教委・市教委の発掘調査の進行に大きく影響してくるとは、協議時点では予想もできなかった。

7月には、県・市ともに1パート体制で調査を開始、調査期間を1年確保するなどの具体案をもって、JH福岡管理局・JH久留米管理事務所・福岡県文化課・福岡教育事務所・市インターチェンジ対策室・市教育委員会で再度協議を行なった。この結果、市教委では同年12月より他の事業の調整のつく担当者が調査を開始、県文化課では翌8年1月より調査を開始することと、調査期間は平成8年度完了ということで合議にいたった。

前述した様に、市教委の試掘誤認により県文化課が遺構希少地部を含め約12,200㎡、市教委が遺構密集地の9,000㎡を調査することとなったが、試掘結果の所見の違いが調査の進行を妨げた。

ループ以外の建設予定地については、工事工程と調整を図りながら市教委のインター担当者で試掘調査を実施し協議を行なった。平成7年当初の試掘担当者の予測の中では、ループ以外の予定地の中に12ヶ所もの試掘予定地があり、平成8年度に発掘調査と併行して確認調査を実施するのは、かなり厳しい状況であったが、幸いな事に11ヶ所では遺跡は確認されなかった。

しかしながら平成8年5月に実施した、インター取付部の県道予定地の試掘調査では、予定地内総面積3,700㎡のうち2,800㎡に及ぶ範囲に遺跡が所在することが確認されたため、ただちに市インター対策室、JH久留米管理事務所と具体的協議を行なったが、これ以上の期間の延長は無理で平成8年度中に本調査完了ならば、工事工程にも遅延はないとの判断をされた。これを受けて市教委で対応を検討した結果、現状のままの体制で、ループ部分の工程との調整を図りながら完了することで合議にいたった。再三述べた様に、ループ部分の試掘の所見が大きく違うため、発掘調査は遅々として進まず、県道取付部の現地における発掘調査はあけて平成9年1月から実施し、その間部分的にループ部の調査を実施したりと、市教委の調査に参加した作業員の方々には、かなり無理な作業内容を強いる事となった。

また県文化課の調査も試掘調査の所見のくい違いにより、期間の延長、調査費の追加などが検討

され、市教委と協議がなされたが、市教委の判断としてはインター建設は第3セクターとしての建設であり、これ以上の要求は無理と考え合議にいたらず市教委の担当者は県文化課の反発を受ける結果となったが、最終的には県および市ともに平成9年3月31日で調査完了させた。

平成9年度から報告書作成を開始したが、遺物・遺構量が多く、かなり手間どった。このため比較的遺物の少ない、県道取付部トドキ遺跡Ⅱの報告書を平成10年度に行ない、平成11年度以降に調査工程に合わせ3分割で報告書を刊行する事とした。

本書は、平成7年12月から調査を行なった部分のみを収録し、調査区の南側より事実報告を順次刊行、第3冊目の報告の中で貝元遺跡のまとめを収録する予定である。

発掘調査の組織

総 括	教 育 長	永 淵 正敏
	教 育 部 長	永 田 晋一
	社会教育課課長	岡 部 隆充
庶 務	文化財担当係長	森 実 秀美 (平成7年度)
	課長補佐兼文化財担当係長	古 賀 幸信 (平成8年度～)
	臨時職員	中 富 貴代美
	〃	柴 田 数子
事前審査	主 査	長 野 卓司 (平成8～9年度)
事前審査	技 師	草 場 啓一 (～平成7年度)
	〃	渡 邊 和子 (平成8年度～)
発掘調査	技 師	渡 邊 和子
整理報告	〃	渡 邊 和子

発掘調査作業員

青柳千津子 浅谷芳江 天本加代子 池田晃子 池見敏子 石原武夫 市川美智子 市川冷子
井本みつえ 上原良子 内田智子 大島幸子 太田倫子 岡部康子 荻本陽子 鬼木公平 加藤
隆明 加藤美智子 川尻宮子 久保キン子 久保田和美 古賀公子 古賀千都子 小林悦子 小
林えみ子 佐子山早苗 白水嘉子 高木保子 高田春江 多田フジ子 田中喜代子 田中直美
田中初子 田中紘子 田中泰彦 津下昭一 鶴 仁 砥綿郁子 中川キヨ子 永田スエ子 永田芳
子 長谷川玲子 平嶋琢巳 藤本愛子 松尾亘 松尾千代子 松窪美智子 宮原美恵子 百田愛
子 安永豊香 八尋英一 八尋ツネミ 山内由美 山口ミノル 山下吾老 山下多恵子 吉田チ
ズ子 吉田トシエ

発掘調査補助員

八木健一郎 (現穎田町教育委員会)

室内整理作業員

浅谷優子 浅谷芳江 天本加代子 池田晃子 石田花子 一坊寺ふじ美 上原良子 荻本陽子
加藤美智子 北野正子 小林えみ子 白水嘉子 宗和代 田中紘子 高木保子 鶴浄美 浜田敏
子 松窪美智子 松尾敦子 百田愛子 山内妙子 山内由美 吉田トシエ

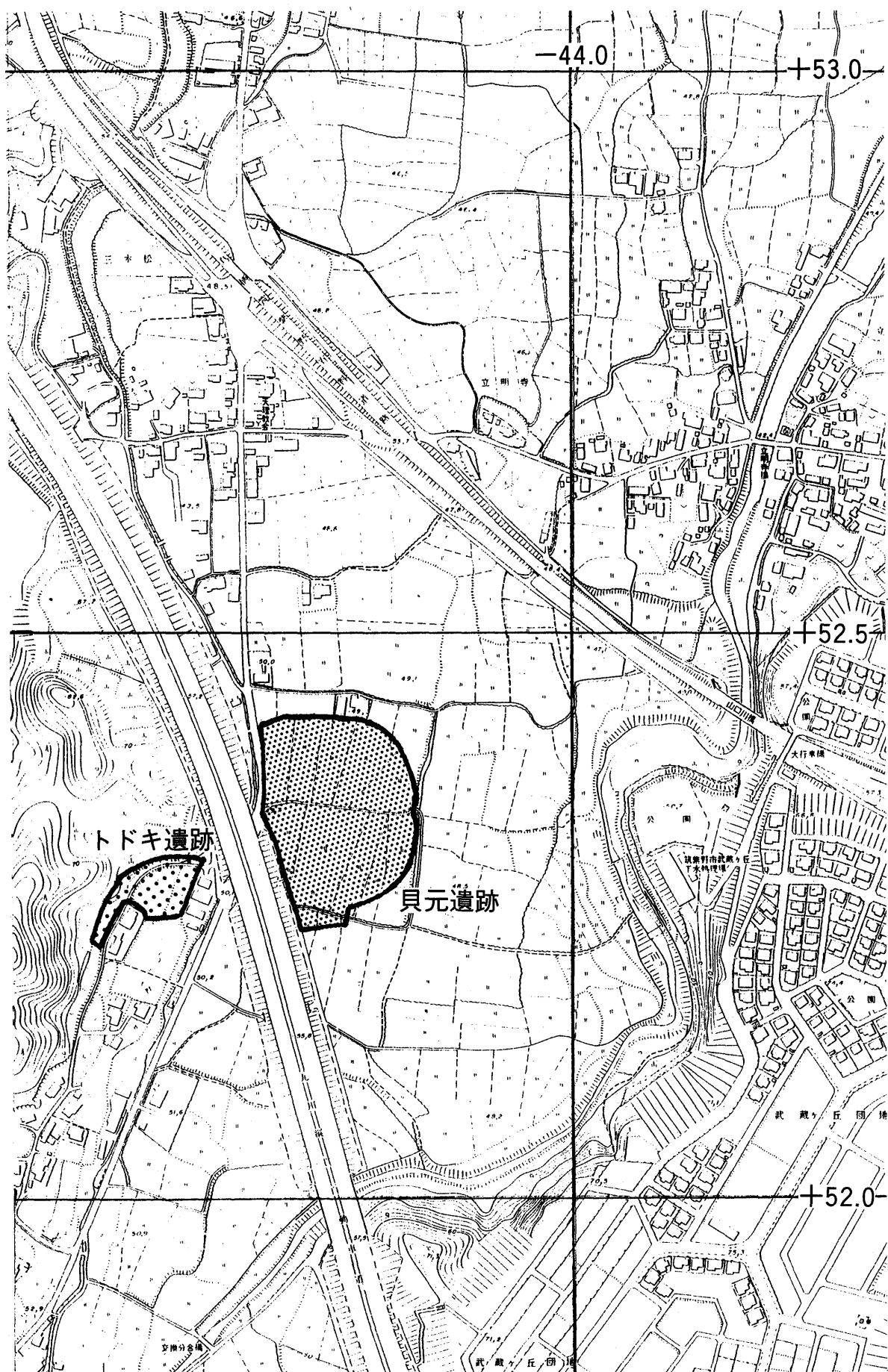


Fig. 2 貝元遺跡周辺地形図 (S1/5,000)

2. 周辺の地形と位置

貝元遺跡は、筑紫野市街地より南南東3 kmに位置する。周辺の丘陵地は昭和40年代以降、福岡都市圏の拡大に伴ない、住宅や団地の建設が進み都市化が進みつつあるが、低地部分に現在でも水田が広がり、農業地帯特有の広々とした景観を残している地域でもある。

周辺域の地形は、西側に背振山塊から派生した山地、北東側には三郡山塊から派生した山地がせまる。この背振山塊から派生した山地の間を山口川が走り、上流付近では河成段丘を形成しながら下流平野部へと流れる。また平野部へ向かう下流部でも数段の段丘面を形成して、さらに東流し宝満川と合流して筑後川から有明海へと流れる。

市域の中央部には、二日市低地帯があり、市街化もここを中心として広がりをみせる。

遺跡は、二日市低地帯の南端部と山口川が山麓部から平野部に広がる所に接して位置し、段丘上でも最も山裾部に占地する。

周辺の遺跡の概観は、先の報告書で述べられているので、ここでは省略する。

3. 調査の概要

試掘調査の結果、ループ部分、約21,200㎡に遺跡が存在することが確認された。そのうちの北半分と南半分のうち東端部分の12,000㎡を県文化課が、残りの9,000㎡を市教育委員会が担当することとなった。この配分は、試掘時の所見で県文化課担当区域が遺構希薄地であるということで振分をしたが、試掘時のデータを検討した時に耕作土直下より遺構が切りこんでいる部分があると認識できたため県との協議の中で再々進言してきたが受けいれられず、調査の進行途中でやっと理解をえられた。調査は工事工程に合わせて、調査区を三分割し平成7年12月より行なった。

市調査区の基本層序は、第1層目に20～30cm程度の耕作土、第2層に10～15cmの床土、第3層に淡黒褐色粘質土が20～30cm堆積、第4層目ににぶい黄橙色の砂質土（地山）と大きく捉えられる。

試掘時に Fig. 3・4 に掲載の遺物が出土しているが、程んどが完形品であったり、ローリングを受けてなかったりと、とても包含層から出土の土器と考えられず、剝土時に地山まで一気に下げず再度、試掘トレンチの壁の清掃ならびに再検討を行なって、遺物包含層として考えられていた堆積は遺構の埋土であり、地山が確認できないのは遺構の重複のためであると確信できた。

調査区の西南部には耕作土直下に砂礫層がすぐ検出されて、遺構の存在しない所も認められる。この礫層は、前述の河岸段丘形成時のものである。

当初の剝土は以上のことを考慮しながら行なったが、調査過程で、床土と考えられていたものも本来の床土と整地層の残りにあることに気がつき、8年度の調査からは、さらに上面で剝土をとめる事とした。この剝土については県の担当者より、嘘を掘っていると云われたが県・市の境界にある県の遺構No建物20の柱穴が市側で上面より検出されている事からも明白となった。

さらに調査を完了させる事で追われ、現地で確認できなかったが図面が完成するに従って、上面から検出した Pit の中に東西および南北に列をなす Pit 群が確認されて、出土した遺物・検出状況を再検討したが、時期の判定や遺構の性格づけに、まだ結論をだせないでいる。これに関しては最終的な報告書の刊行までに考えたい。

今回の報告書作成は、遺物や遺構の掲載に余裕をもたせたものにしてしまったが、レイアウト等

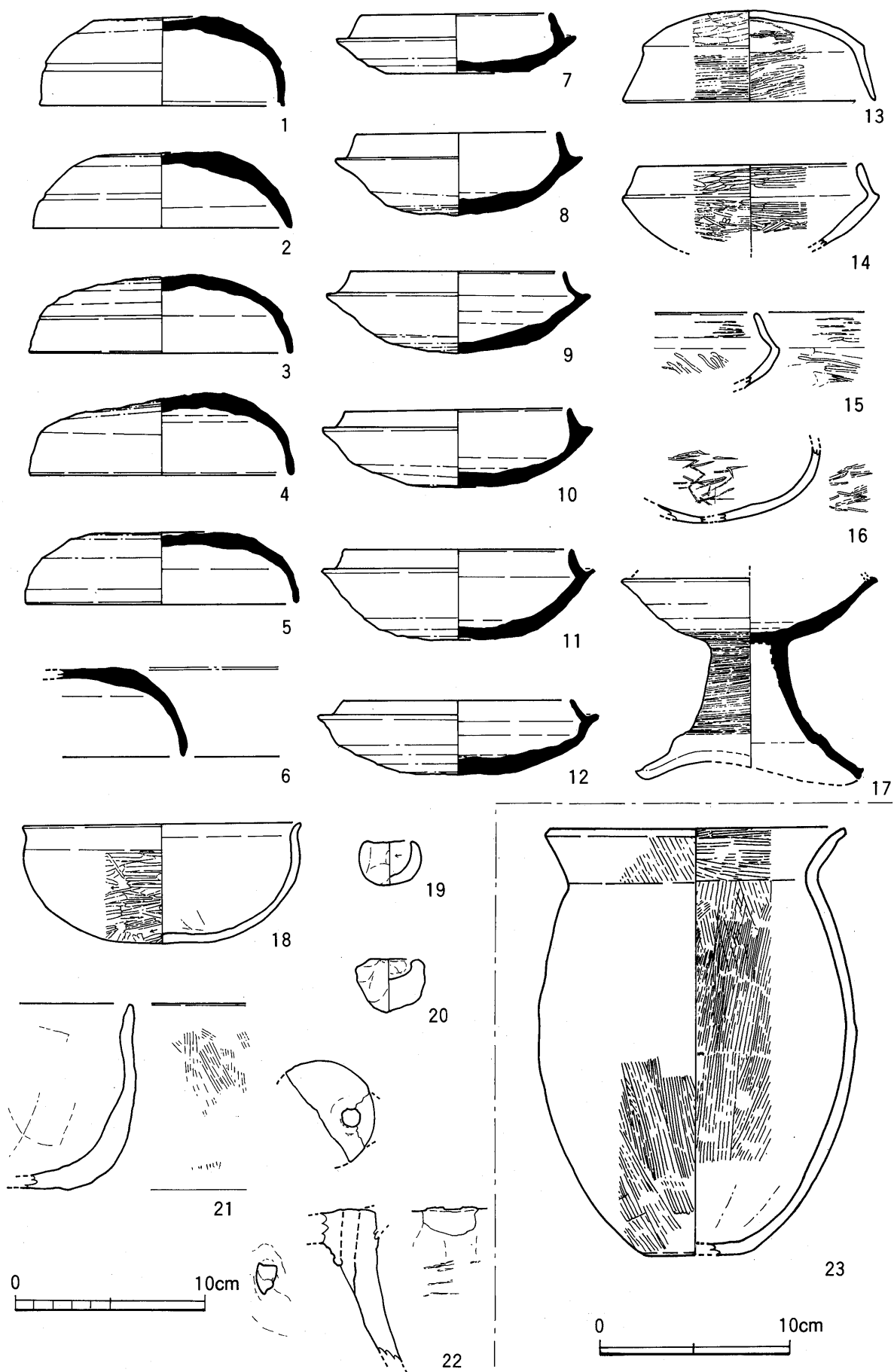


Fig. 3 試掘調査出土遺物実測図 (S1/3)

が完了した後で、3分冊の報告書予算しか確保できない事となったため、第2分冊以降は、できる限りの遺物を掲載し、第3分冊目にて、まとめを書く事とするためトータル的には非常にアンバランスになる事を事前の了承としたい。

今回掲載分の遺構は以下のとおりである。

竪穴住居跡 (SC)	138軒
土坑 (SK)	48基
甕棺	3基
石棺墓	3基
溝状遺構 (SD)	24条
河跡 (自然流路)	1条
柱穴	2122

遺構・遺物についても極力掲載するようにしたが、膨大な量であるため、図面掲載分については簡便にし、掲載できなかったものに重点をおくようにした。

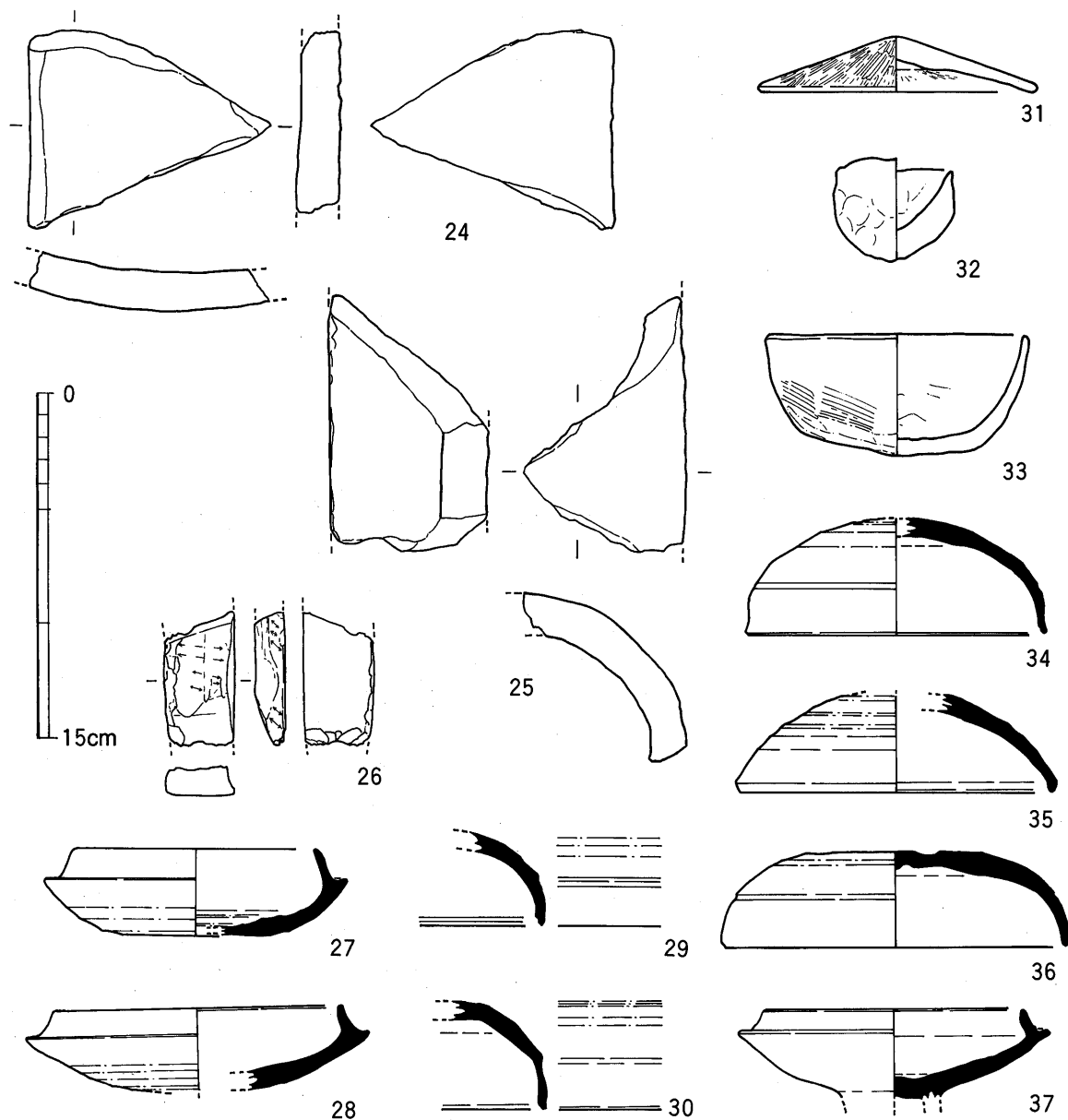


Fig. 4 検出面出土遺物実測図 (S1/3)

(1) 試掘および検出面の遺物 (Fig. 3～5, PL.15・16)

1～15・17・21～23・27までがSC17・44・45・52・79・117・118のいずれかの遺構に伴っていた遺物で、試掘トレンチの現況からして1～4・8～11・13・14・17・23が、SC17・117・118・52・44の遺物として、さらに特定できる。また19・20は、県SC234・236・239・240・244・248・257・431、溝33のいずれかにか伴うものと考えられる。26はSX 8付近で表採された扁平片刃石斧片でローリングが著しく、本来の大きさは不明。片刃石斧として機能しなくなったものを砥石として使用した特長をもつ。28～37は7年の調査区内の遺構検出時に出土したもので明確に遺構を特定できないものを掲載した。28は復元口径12.6cm、残存高3.65cmの坏身で、焼成は普通、色調は内外ともに灰白色(N 7)をなす。29・30・34～36は蓋。34、復元口径12.95cm、残存高5.1cmを測り、内天井部に同心円のタタキ痕を残す。35は復元口径13.6cm、残存高4.2cm内外ともに灰色(N 4)を呈し、焼成良好となる。36は34と同様に同心円のタタキ痕を内天井に残し、復元口径14.9cm、器高4.15cmを測る。31の蓋は復元口径12.1cm、器高2.4cmで、胎土に細砂粒・ウンモを含み、焼成良好なもので、外面に赤彩を遺す。37は高坏の坏で、復元口径11.3cm、残存高3.95cm、少量の細砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通である。全体の調整はヨコナデが主だが、部分的にケズリ後ヨコナデ。

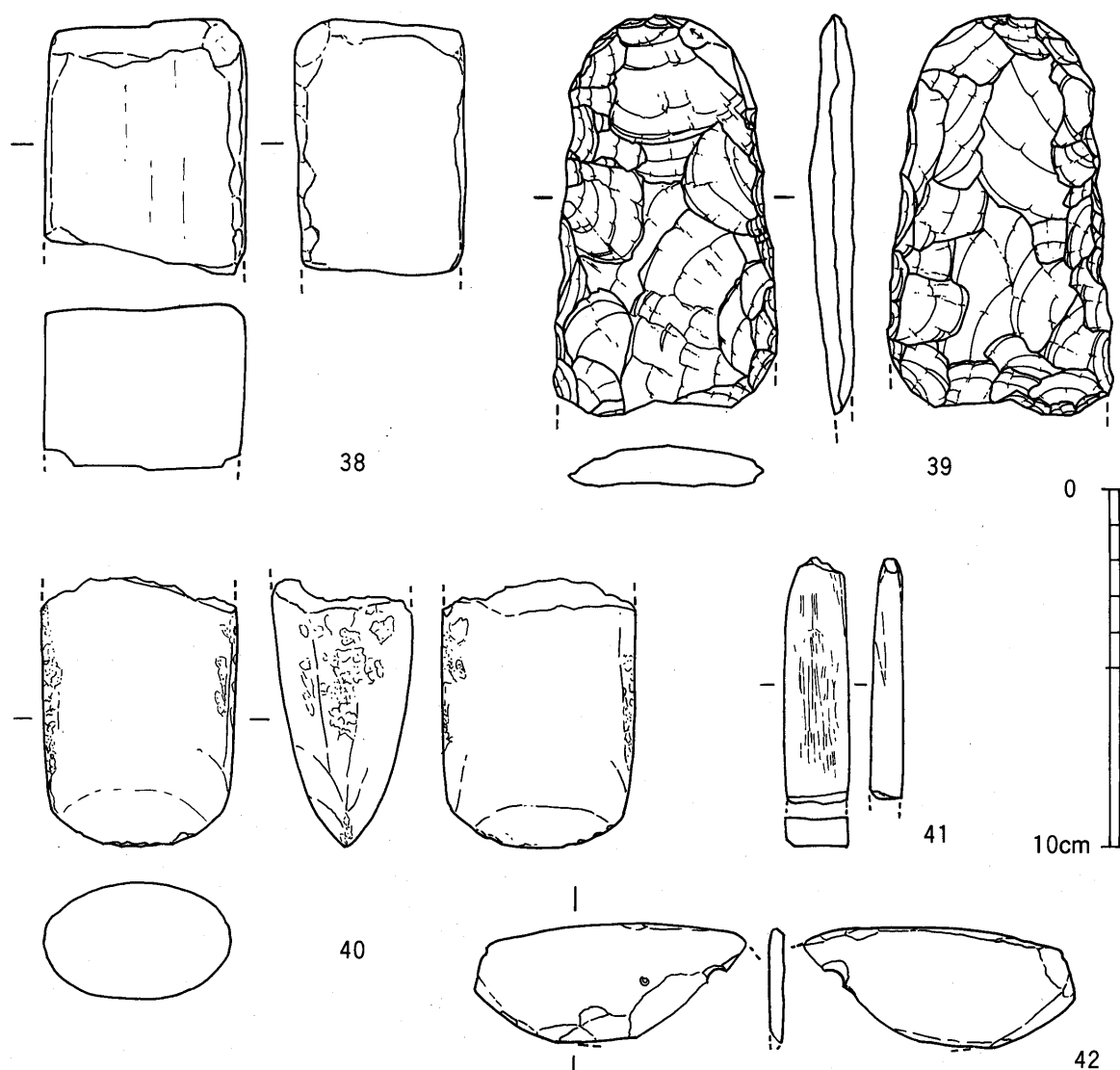


Fig. 5 検出面出土遺物実測図 (S1/2)

(2) 石棺墓 (Fig. 6・7, PL. 2)

平成7年度調査分では3基の石棺墓を検出した。1・2号は、調査区の南西部、市道取付部から検出された。3号は全体の調査区の西側中央部付近で検出。

1号石棺墓 (Fig. 6, PL. 2)

石棺の平面形は、西南小口部分が25cm、北東小口部分が27cmと僅かに西南部が広い。使用された石材は両小口部分にやや厚みのある板状の花崗岩を、側壁にはやはり厚みのある花崗岩の転石を用いている。石棺の内面・外面・床面には赤色顔料は使用された痕跡はない。内法は長さ65cm、幅22～27cmを測る小形の石棺墓である。石棺掘方は長さ110cm、幅75cm前後の隅丸長方形を呈し、石材に応じた大きさと深さの穴を床面周辺に掘っていて、石材を安定させるための根石は使用されていない。

2号石棺墓 (Fig. 6, PL. 2)

1号に近接して検出。石棺の平面形は東小口部分が29cm、西側小口部分が20cmと東側が広がっている。両小口部分には1号と同様、やや厚みのある板状の花崗岩を各々一石ずつ使用している。側壁部分は北西側がやや板状の転石を、南東側が厚みのある転石を各々二石ずつ用いている。

石棺掘方は長さ145cm、幅70cm前後の不整長方形を呈す。東側小口部分のみコーナーが隅丸となっていて、石材に応じた大きさと深さを床面周辺に掘っているが、石材を安定させるための根石は使用されていない。また、石棺内面および外面・床面には赤色顔料は使用された痕跡は認められず、内法は長さ93cm、幅22～28cmを測る。

3号石棺墓 (Fig. 7, PL. 2)

1・2号石棺墓とは離れた位置で検出。今回の報告分では北西隅にある。西側小口部と南側壁部の石材が抜かれている。床面を観察すると棺内と床面は攪乱を受けていず、耕作のため邪魔になったため石が抜かれたものと思われる。北側壁部には厚みのある板状の石を二石使用し、南側壁部には同様な石材を二ないし三石用いた可能性をもつ。現存する東側小口部の石材は先細りの柱状を呈したものを使用している。石材はすべて花崗岩である。

石棺掘方は長さ160cm、幅80cmの長方形を呈していたと思われる。現状では南側壁部付近に歪みが認められるが、これは石材抜きとりの際に破壊を受けたものであろう。

石材埋置は、床面周辺に石材に応じた大きさと深さの穴を掘っていて、これも石材を安定させるための根石の使用はない。石棺内面か床面に赤色顔料が使用されていたのか、埋土に僅かだが赤色顔料を含んだ土が確認できたが、現況では詳細は不明である。

(3) 甕棺墓 (Fig. 8・9, PL. 2)

1号甕棺墓は、上甕に口径33.7cm、高さ18cm、底径10.5cmを測る鉢を使用した合せ口甕棺墓で、主軸はN-37°-E。墓壙は現状では楕円形を呈す。調査開始の際に本来の墓壙は若干削平されている。甕棺の埋置も緩やかである。下甕は口径32.5cm、底径7.35cm、器高34.75cmを測る。焼成は普通で、胎土には0.5～2mmの砂粒と雲母片が含まれる。甕自体は土圧のため若干の歪みがある。

2号甕棺墓は、覆口式の甕棺。上甕は底径9.2cm、現在高28cm、口縁部から胴部中位付近を打ち欠いて使用。胎土には1mm程の砂粒を含み、焼成は普通である。色調は外面明赤褐色(5YR5/8)、暗褐色(10YR3/3)、内面は浅黄橙色(10YR8/3)、橙色(5YR6/6)をなす。調整は外面にハケ目が施されている。現存部には黒斑も遺る。内面はナデ調整を施すが、底面に工具痕を残している。穿孔がなされているが、穿孔部付近の内外面にはススが付着している。下甕は底径9.2cm、

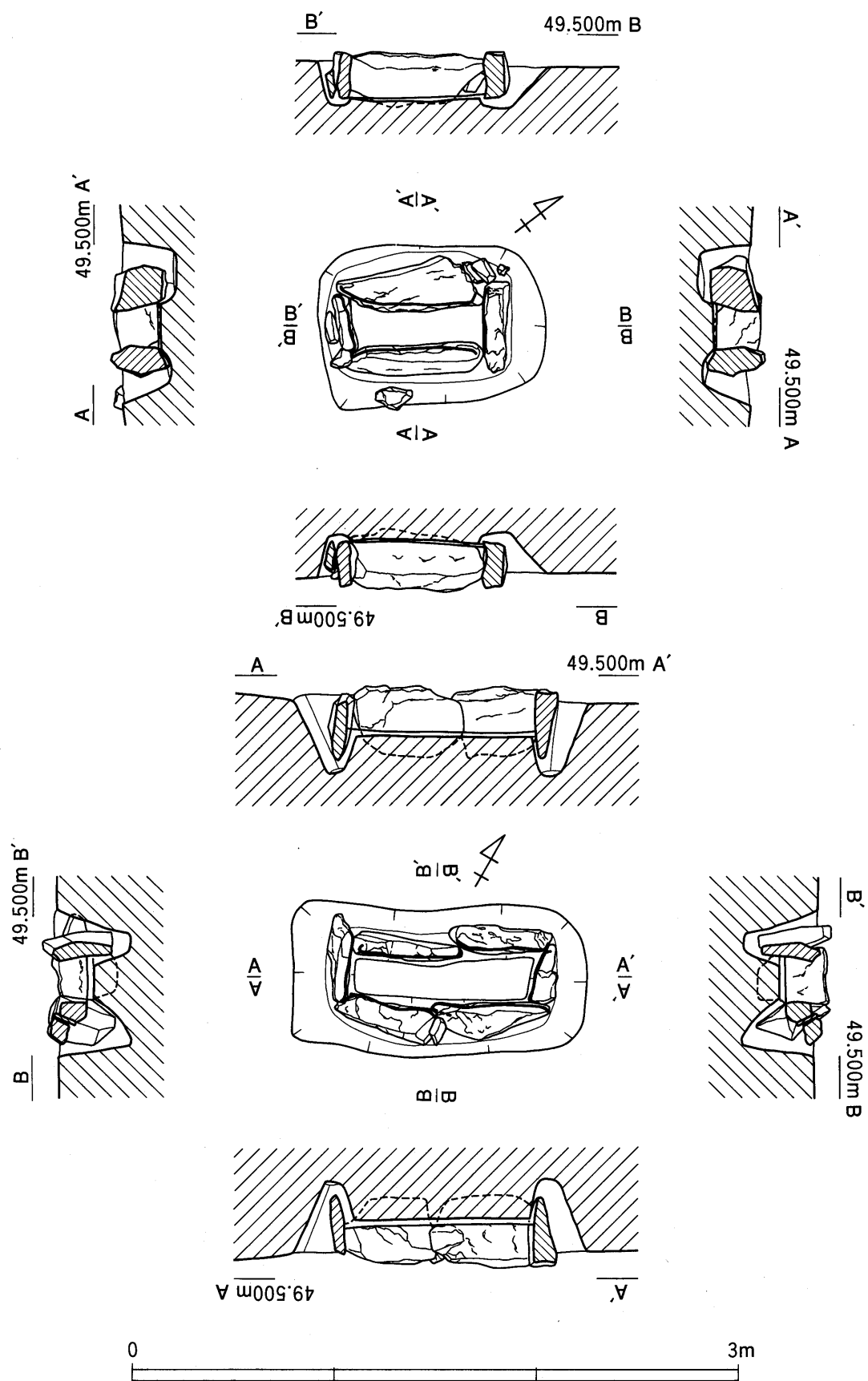


Fig. 6 1 · 2 号石棺墓实测图 (S1/30)

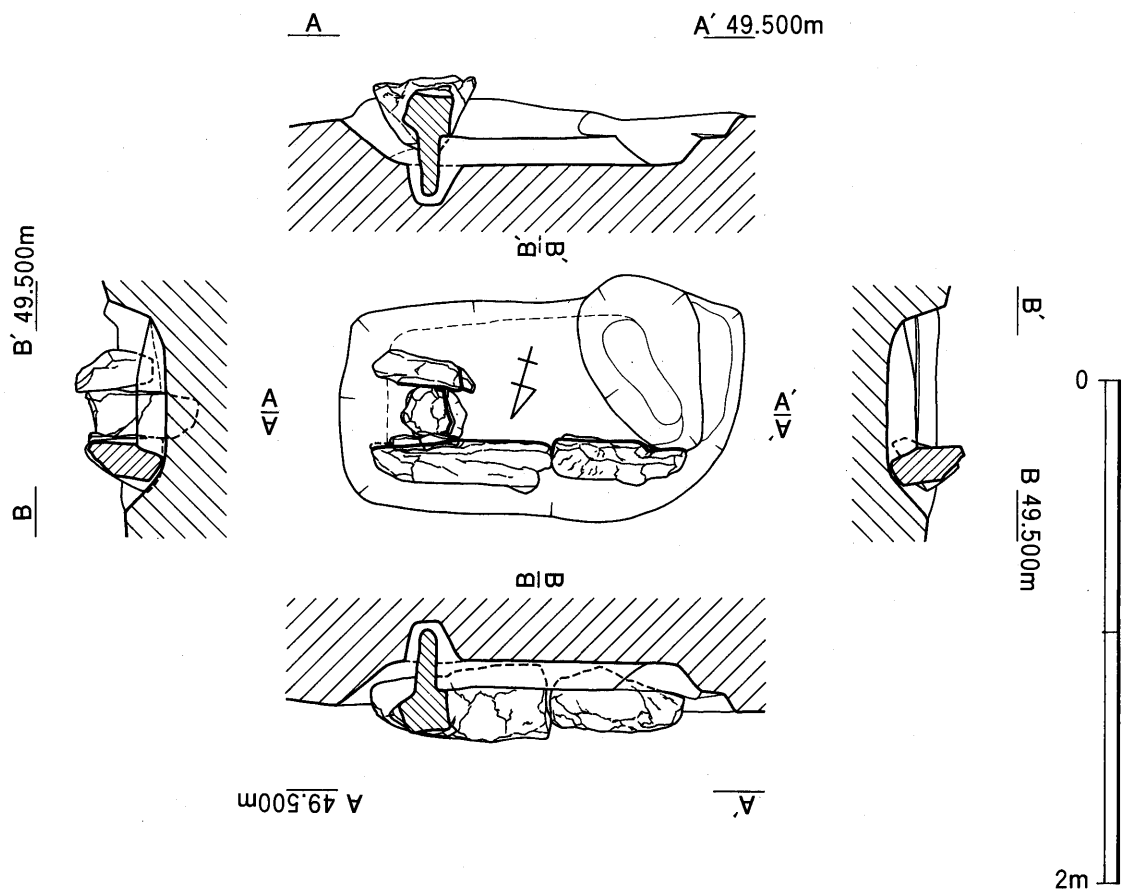


Fig. 7 3号石棺墓実測図 (S1/30)

器高53cm、口径40.5cm、胴部最大径40.5cmを測る。内外面の色調は灰褐色（7.5YR 6 / 1）、（7.5YR 3 / 2）、を呈し、胎土には1～2mmの砂粒を含んで焼成は普通である。調整は外面ハケメを施し、部分的に黒斑・ススが認められる。口縁部直下に一条の突帯を巡らせる。内面は、ナデによる調整がなされていて、部分的にススの付着が認められる。

3号甕棺墓はSC27・109に切られ、SC28を切る。残存部は下甕のみ。鉢を使用して復元底径6.2cm、残存高25.05cm、胎土に1mm程の砂粒を含んで焼成は普通である。外面にぶい黄橙色（10YR 6 / 4）、内面、灰黄褐色（10YR 5 / 2）の色調を呈す。外面の調整はハケメ後ナデを施す。内面ハケメにより調整を施している。内外面に黒斑が認められる。

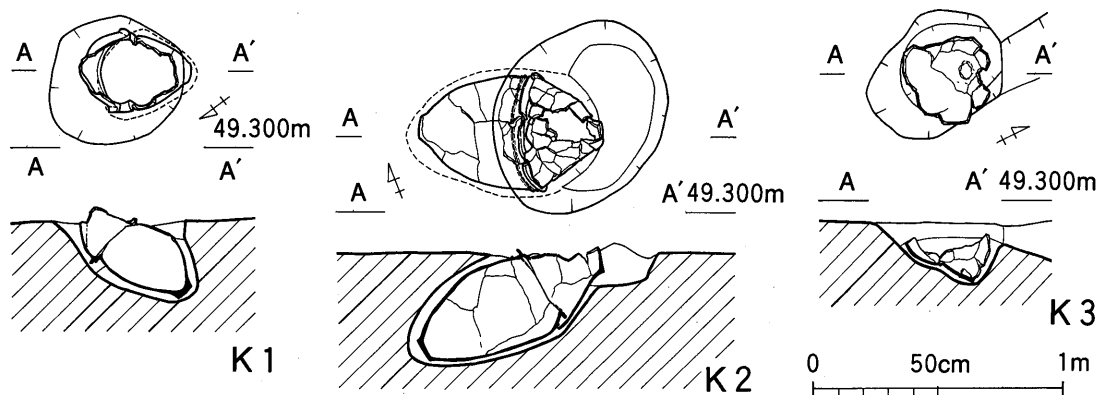
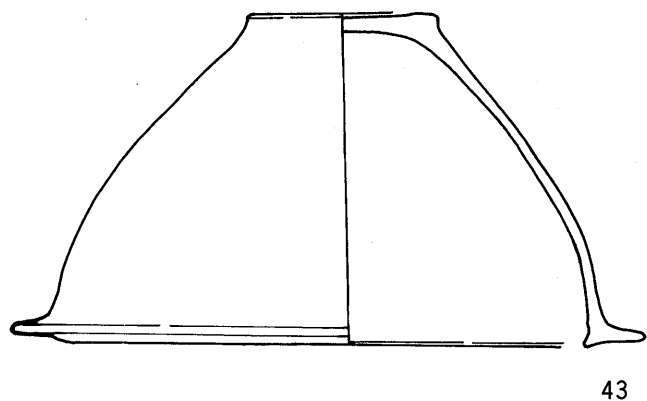
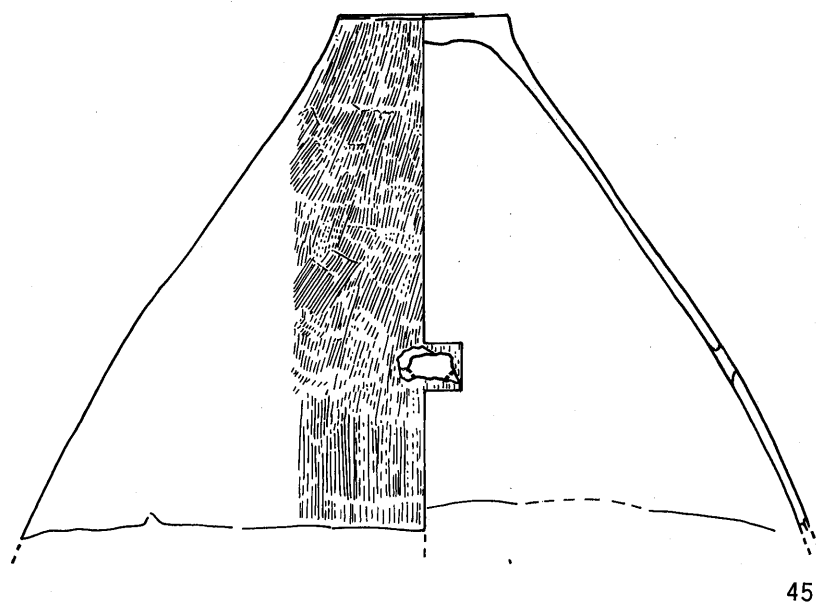


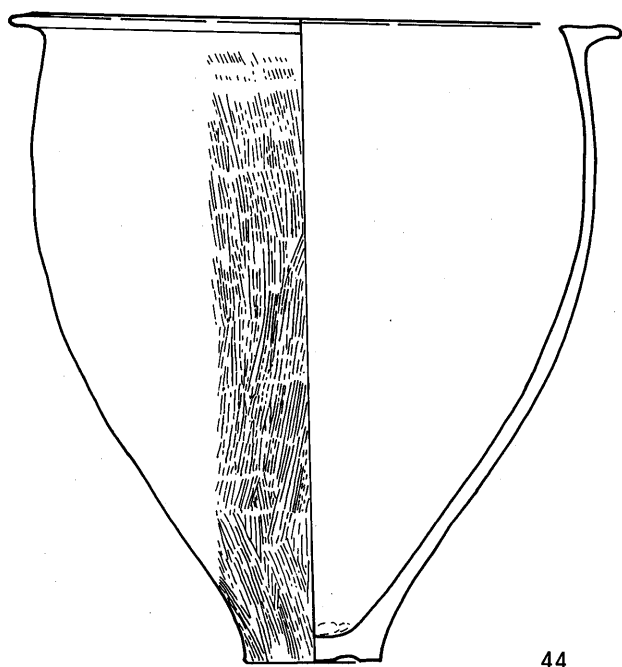
Fig. 8 1～3号甕棺墓実測図 (S1/30)



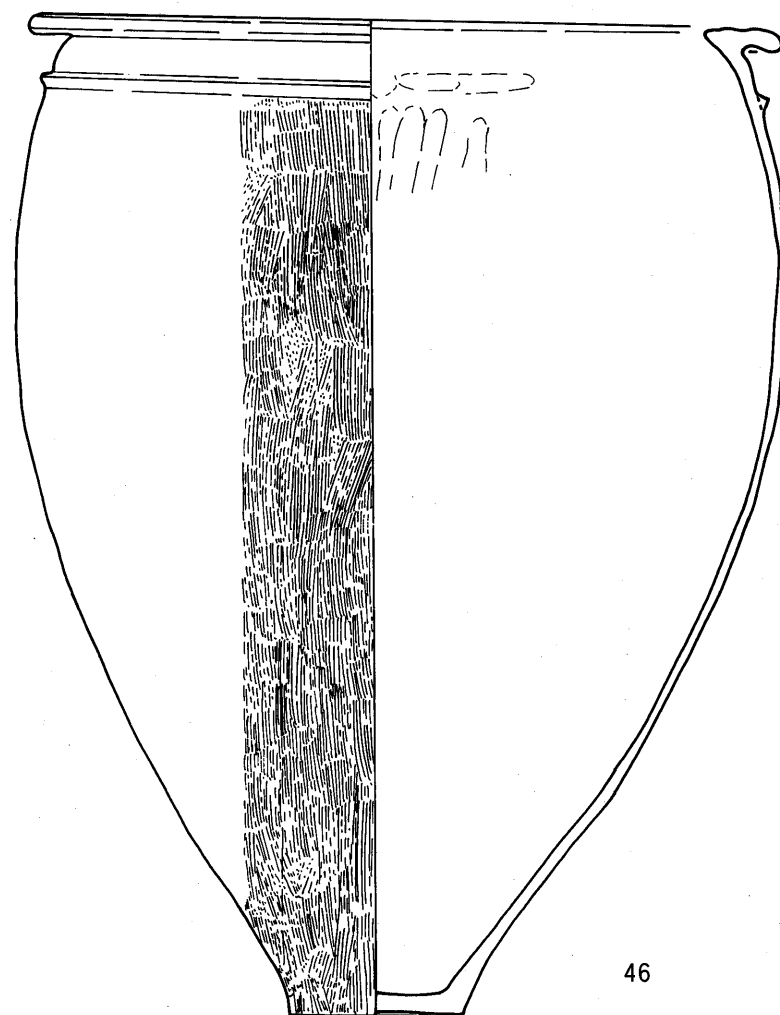
43



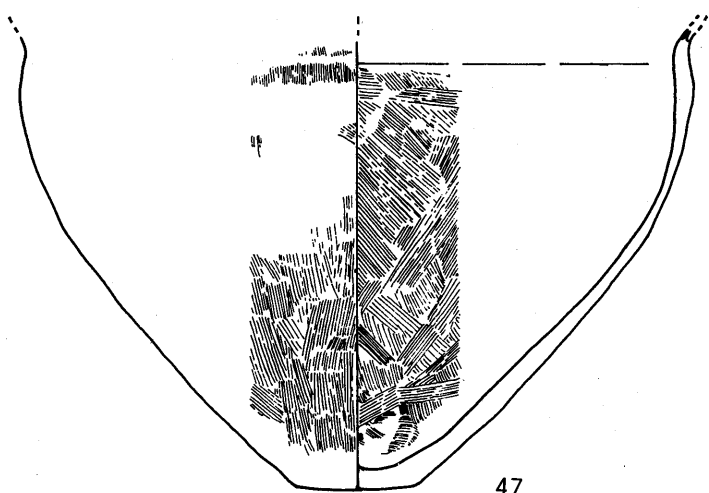
45



44



46



47

0

50cm

Fig. 9 1~3号甕棺実測図 (S1/4)

(4) 竪穴住居跡 (SC)

SC 1 (Fig.10) 壁の立ち上り 5 cm 前後と遣りが悪い。南壁の中央部にカマドをもち、SC 5・6 を切る。すづまりの方形を呈し、主柱穴は 4 本と考えられる。

SC 2 (Fig.11, PL. 3) 形状はすづまりの長方形を呈す。遺存状況は悪く、SC 3 に切られる。

SC 3 (Fig.12・13, PL. 3) SC 2・8 を切る。カマドは東壁の北側コーナー近くにある。壁の残りは 5 cm 前後で、やはり残りは悪い。長方形の形状を呈し、主柱穴は 4 本となる。

SC 4 (PL. 3) SC 1 に切られ、SK39 を切る。不整長方形のプランを呈し、主柱穴は 4 本。

SC 5 (Fig.14, PL. 3) 不整長方形を呈し、SC 1 に切られ、SC 6 を切る。主柱穴は 2 本。

SC 6 SC 1・5 に切られる。このため北西・北側の全容は不明。

SC 7 (Fig.14) 残りが悪く、プラン検出のみ。小型の不整長方形を呈す。

SC 8 SC 2・3 に切られる。西側も大半が他の遺構に切られるため詳細は不明である。

SC 9 (Fig.14, PL. 3) SC69・SK15・25 に切られ、SC16・SK40 を切る。

SC10 (Fig.15・16・18) 長方形のプランを呈し、主柱穴 2 本。SC11 を切って、SD 3 に切られる。

SC11 (Fig.16・18) SC10 に切られ、調査区外へ延びるため、詳細は不明。

SC12 (Fig.15・16・17・18) カマドの位置する西壁と北・南壁の一部が残る。カマドは西壁の中心部にあり上述の住居よりは僅かに残りが良い。出土遺物はカマドからのみ。

SC13 (Fig.17・18) 西半部分が未調査区へと続く。カマドは北東壁にあって中心よりやや北に位置。残存部から推測してコーナー部に主柱をもつ可能性があり、SC14 を切っている。

SC14 (Fig.16・18) SC13・24 に切られ、不整長方形を呈す。南東壁側にカマド状のものがあつたが、明確に捉えきれなかった。主柱穴は 4 本柱の可能性をもつ。

SC15 大半が未調査区へ続く。全容は不明。SC120 を切る。

SC16 (Fig.19・20, PL. 3) 南側部分を SC 9 に切られる。正方形のプランを呈し、主柱穴は 4 本柱の可能性をもつ。壁の立ち上りも 15 cm 前後と他の住居跡に比べ、やや残りはよい。

SC17 (Fig.19・20, PL. 3) 試掘トレンチに西南部を大きく切られる。不整長方形を呈する可能性をもち、主柱穴は 2 本となる。SC117・118 を切る。

SC18 SC23・24 に切られるため、北側の詳細は不明。SK18 を切っている。

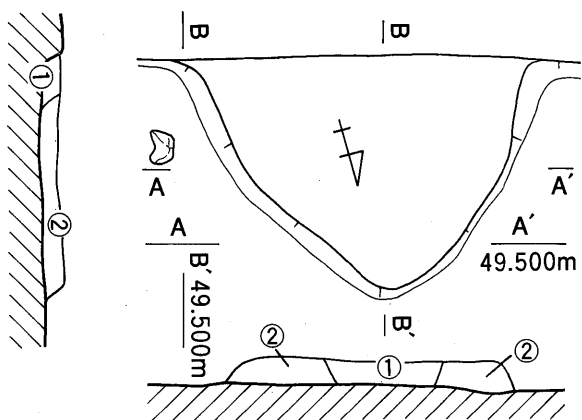
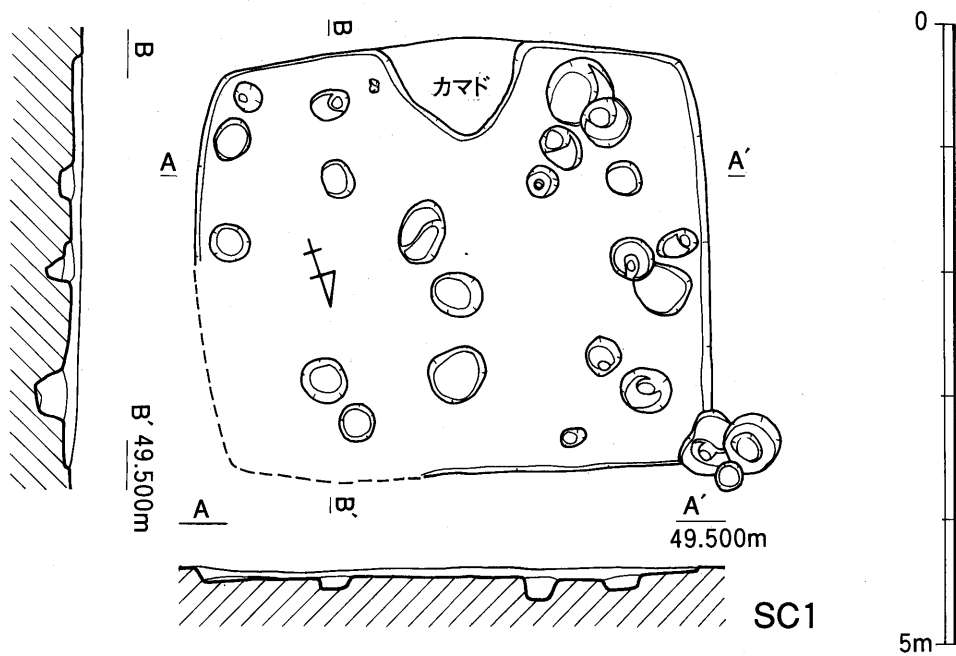
SC19 SC58 を切る。住居跡の大半が未調査区へ続くため全容は不明。

SC20 (PL. 4) SC112・115 を切る。不整方形なプランを呈し、壁の残りの 5 cm 前後と悪い。

SC21 (Fig. 20) SC20 に近接して位置する。東南コーナー部に焼土等が僅かに検出されたが、概要で述べたように、剥土しすぎたため、SC21 の上にあつた遺構のものの可能性が考えられる。特に SC20 から SC27 付近は、試掘の所見どおり剥土しているため、遺構面をかなり削平してしまって、基盤の砂礫層が多く見受けられるが、この周辺は遺構の空白地帯ではなかったことは記述しておく。

SC22 (Fig. 20) 調査区の南西部に位置し、不整方形を呈する小型の住居跡。SD 5・SC39 を切る。主柱穴は 4 本柱。壁の遺存状況は比較的よく、10～15 cm 前後の高さを測る。

SC23 SC24・68 を切って SD 7 に切られる。壁の残りは全体的に悪く 3～5 cm 前後を測り、北西コーナー付近は遺存しない。形状は不整長方形を呈し、主柱穴は壁近くに 4 本の可能性をもつ。出土遺物はない。床面は、貼り床状のものは認められないが、部分的に踏みしまりの汚れが確認されている。



- ① 灰白色砂質土 (7.5YR8/1)
混り焼土
- ② 灰白色粘質土 (7.5YR8/1)
混り焼土

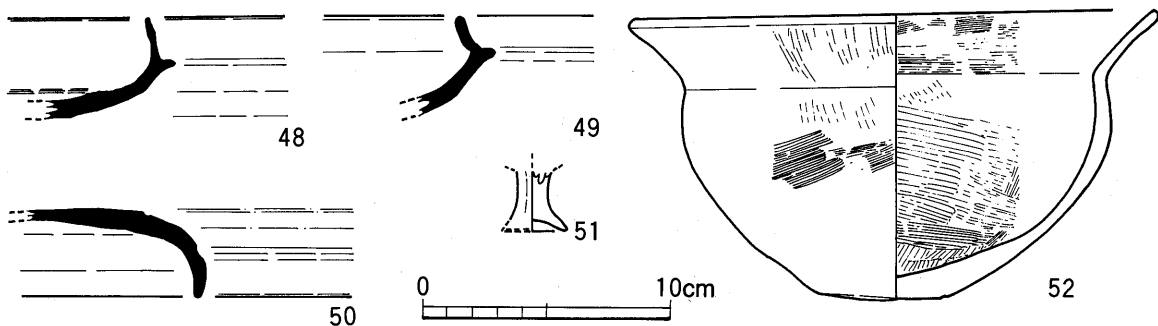


Fig.10 SC1 実測図・カマドおよび遺物実測図 (S1/60・1/30・1/3)

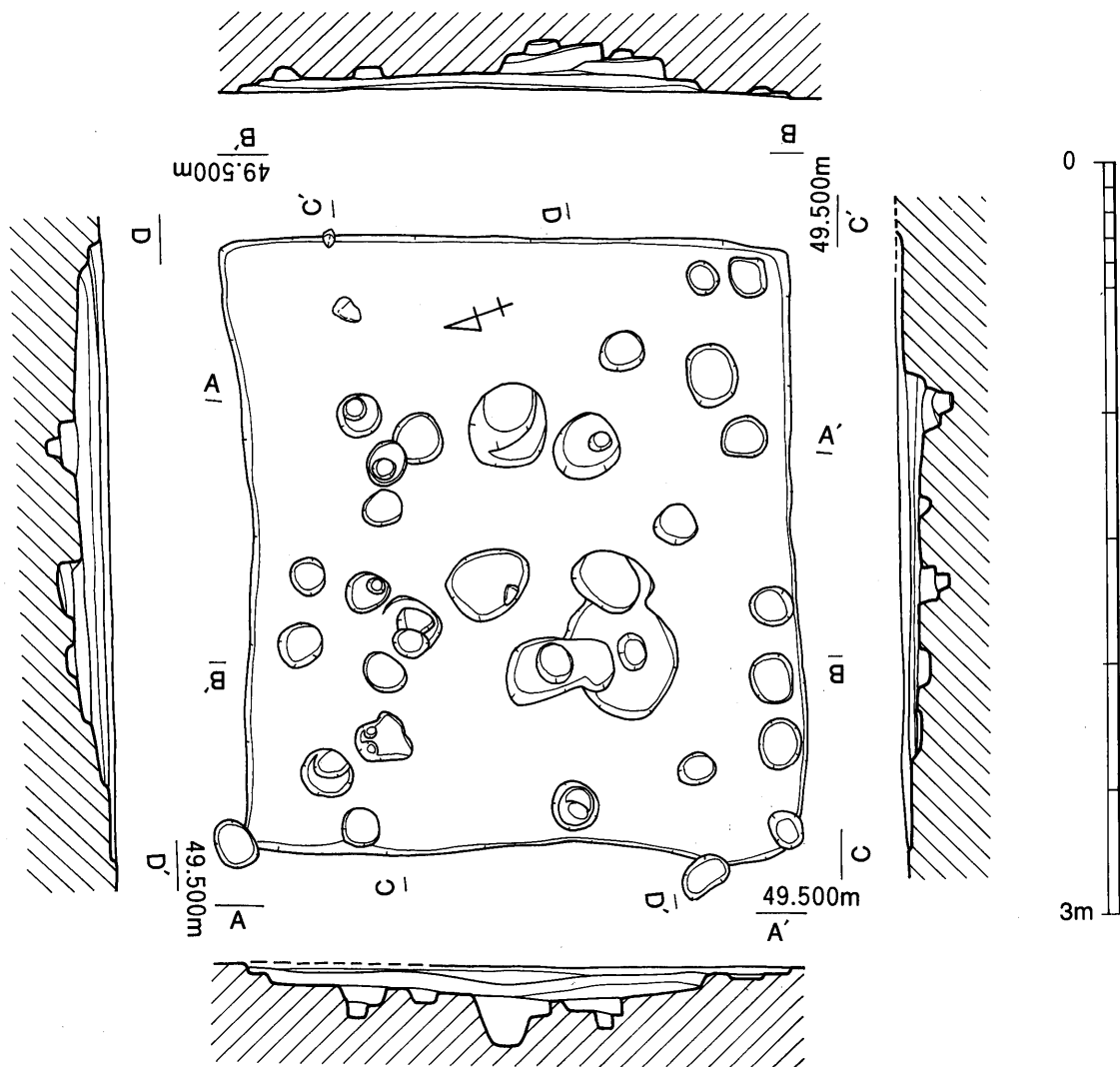


Fig.11 SC2 実測図 (S1/60)

SC24 (Fig.20・21, PL. 4) SC23に切られ、SK14・SC18を切る。カマドは南壁側の面によった位置にあって、主柱は2本と考えられる。プランは長方形の形状を呈す。

SC25 (Fig. 20・22) SC65・SK20・21を切ってSC9・69に切られる。切られている範囲が広いので、詳細な全容は不明。カマドの基底面近くが遺存していた北西側の壁に位置していたと思われる。主柱は4本柱の可能性を持つ。

SC26 (Fig. 22) SC9・16に切られ、SC65を切る。カマドは南東側のほぼ中心部に位置する。北～北東コーナー付近の全容が不明であるが、長方形の形状を呈していたと思われる。主柱穴は2本。出土遺物は、埋土中から出土したものが多い。

SC27 (Fig. 23) 不整な長方形プランを呈し、SC28・109を切る。壁の遺存も悪く、3～9cm前後である。主柱は2本で、短軸の壁より50～60cm内側に設定。これは短軸のほぼ中心線に位置する。床面は遺構の重複のためか、貼り床・踏みしまりなど明確に捉えられなかった。図示した出土遺物はPit出土のものが多く、SC27の直接時期を示すとは考え難い。

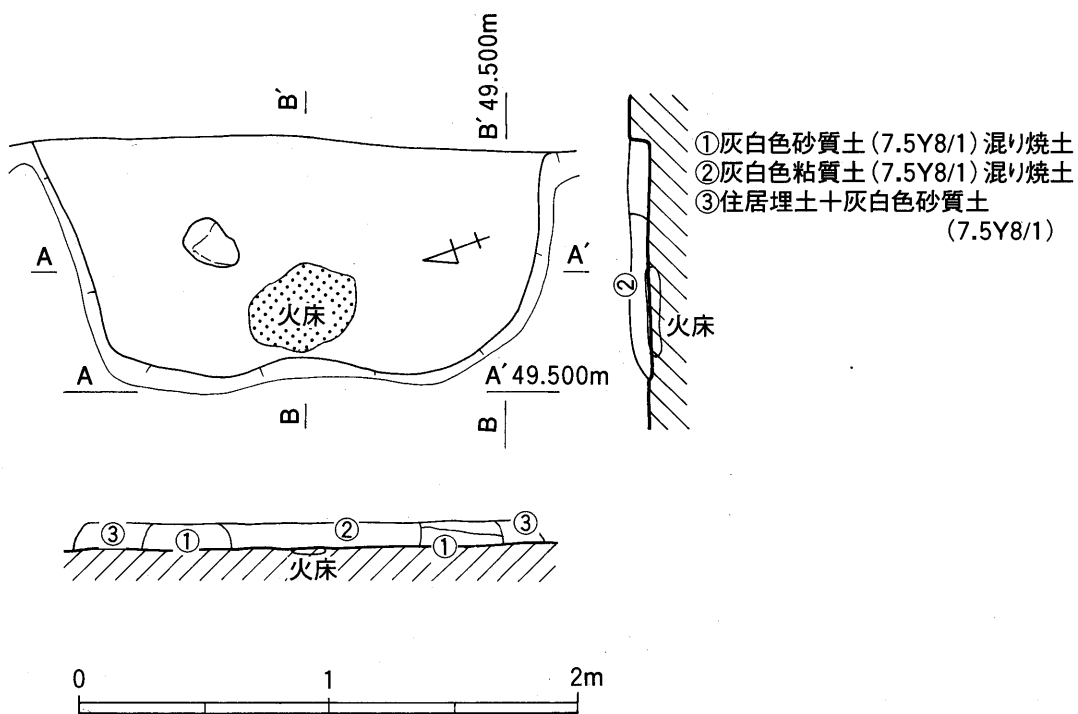
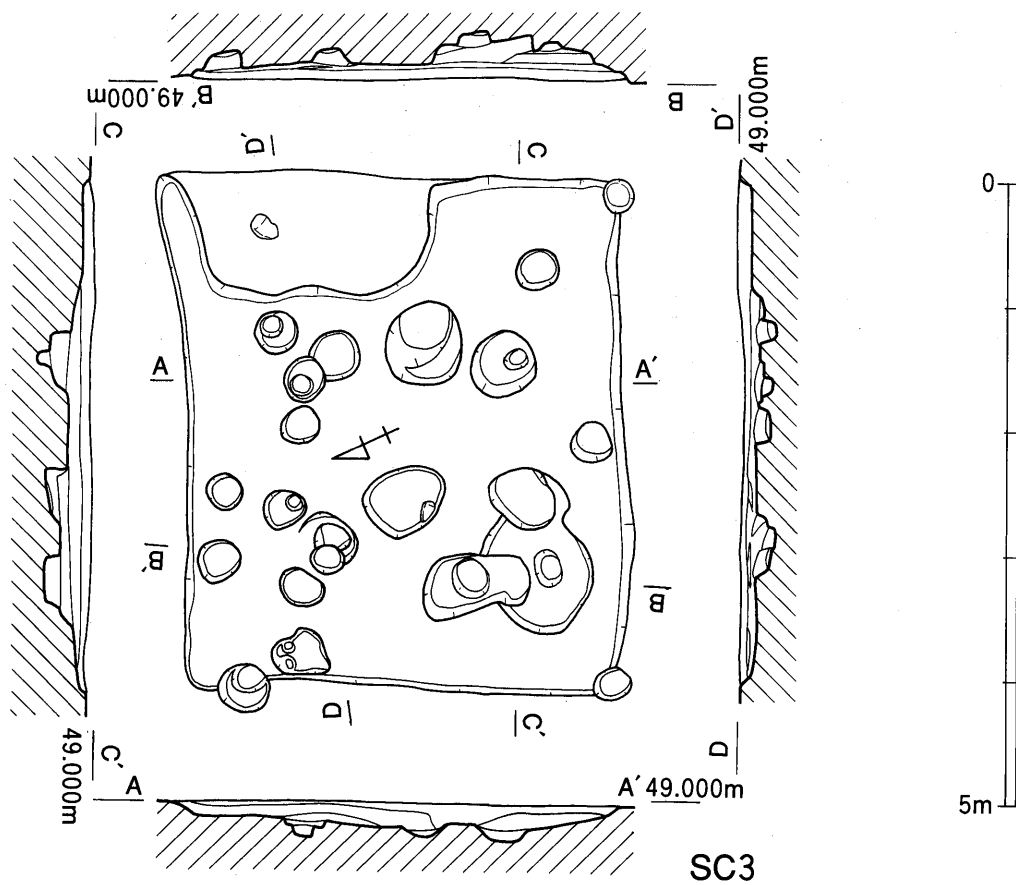


Fig.12 SC3 およびカマド実測図 (S1/60・1/30)

SC28 (PL. 4) SC27・109・甕棺 3・攪乱に切られる。
遺存状況は極めて悪く、壁の立ちあがりも 5 cm 前後である。

遺物は、出土していないが切り合いの状況から弥生時代中期以前のものと考えられる。直径 5 m 前後を測る円形住居跡で、炉の確認はできなかった。主柱穴は周壁より内側 70 cm 前後を巡る 9 本柱の可能性をもつ。

SC29 SC35と SD 9 に切れ、やや隅丸長方形のプランを呈し、主柱は 2 本柱の可能性をもつ。床面には貼り床状のものは認められず、炉も確認できない。出土遺物は Fig. 23-136・139 が図示できたが、埋土内と主柱にならない Pit からの出土。

SC30 (Fig. 21, PL. 5) やや不整な長方形の形状を呈す。遺存状況は極めて悪い。カマドは短軸北壁の中心部に位置する。カマドも遺りが悪く、基底面近くだけが検出された。焼土と炭化物しかなく、一見するとカマドとは考え難い。カマド中心付近に Pit が検出されたが、支柱が抜きとられた時の痕跡である可能性をもつ。主柱は 4 本柱と考えられるが現況では、3 本しか検出できなかった。遺物は北西コーナー付近の床面から Fig. 23-140 の砥石が出土しただけである。

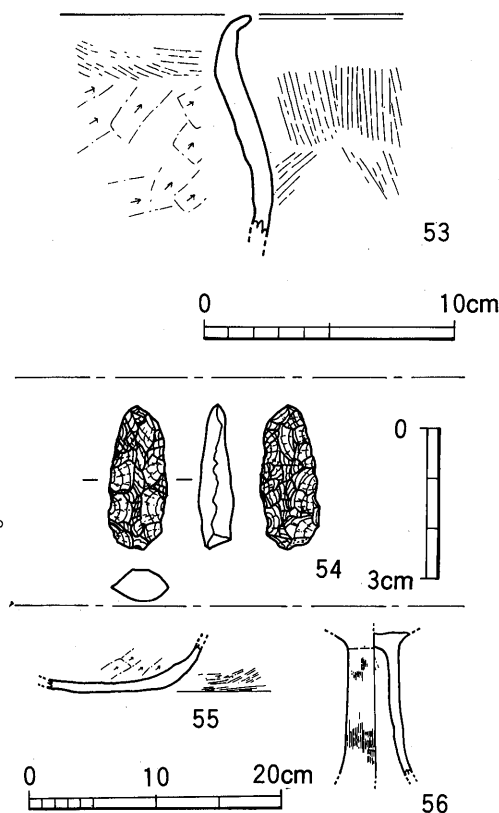


Fig.13 SC3 出土遺物実測図 (S1/3・2/3・1/6)

SC31 (PL. 4) 不整形のプランを呈し、SC72を切る。カマドや炉の痕跡は確認できなかった。また床面には貼り床もなく、部分的に踏みしまりが確認できた。遺物は多く出土したが図示できたのは Fig. 25-141 だけである。この遺物も埋土中からのもので SC31 の時期確定の資料とは言い難い。SC31 の西側付近は剥土しすぎているので、他の遺構の重複があったかも知れない。

SC32 SC27に切れ、SC109を切る。非常に小型の不整形を呈す。SK として扱った方が良くとも考えられたが、床面が周辺の住居跡と同様なあり方をすることから住居跡とした。

SC33 (Fig. 21, PL. 5) SC49・109を切る。SC32と同様に小型の方形プランを呈す。遺存状況は非常に悪く、壁も 5 cm 前後の立ち上りしかない。床面には踏みしまりによる汚れが確認できるが、炉やカマドはない。主柱は 2 本柱と考えられる。

SC34 SC76・SD10に切られる。僅かにすづまりする方形のプランを呈する。これも壁の残りは悪く、5 cm 前後を測る。主柱は 2 本と考えられる。床面には貼り床はなく、カマドや炉跡も認められない。出土遺物は少なく、Fig. 25-142・143 だけが図示できた。

SC35 (Fig. 24, PL. 5) SC53に切れ、SC29を切る。西壁側が SC53に切れ、詳細は不明だが、小型の長方形のプランを呈していたと思われる。床面には踏みしまりの汚れが確認できるが、炉跡やカマドはない。壁の残りも他に比べ良く 10 cm 前後を測る。遺物は Fig. 25-145 を図示。ほかにもローリングを受けた弥生時代の細片が多く、SC35に伴うものとは考え難い。

SC36 (Fig. 25, PL. 6) SD 5・11に切れ、SC37・110を切る。東・西のコーナー部が溝で切られて明確でないが、形状は不整形を呈していたと思われる。壁の残りも 7~10 cm 程で比較的良好。遺構の中心部付近が、他の部分より踏みしまっている。しかし、炉やカマドの痕跡は確認できなかった。遺物の出土は少なく、Pit から出土した Fig. 25-146・147 だけを図示。

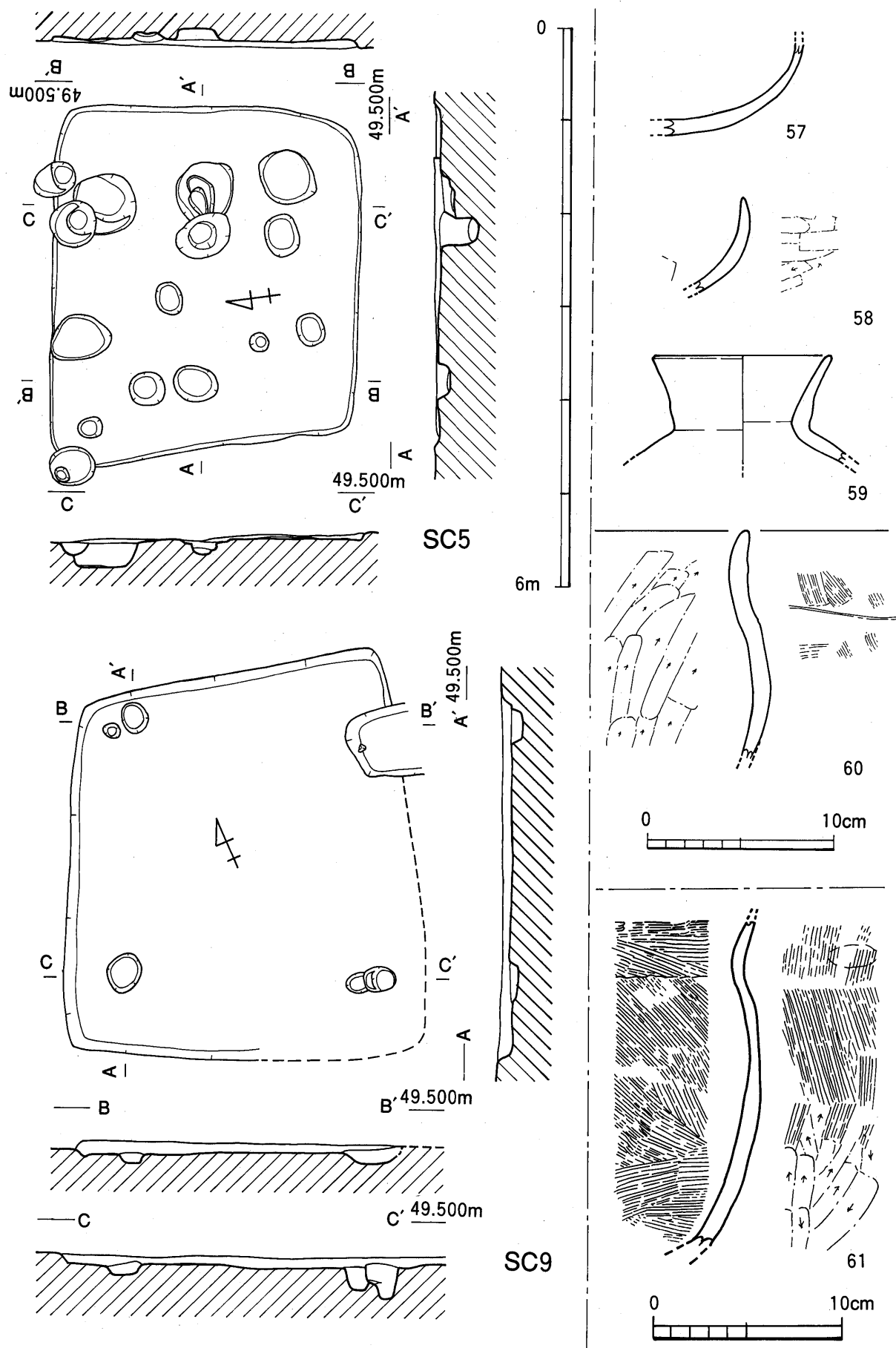


Fig.14 SC 5・9 実測図および SC 7・9 出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

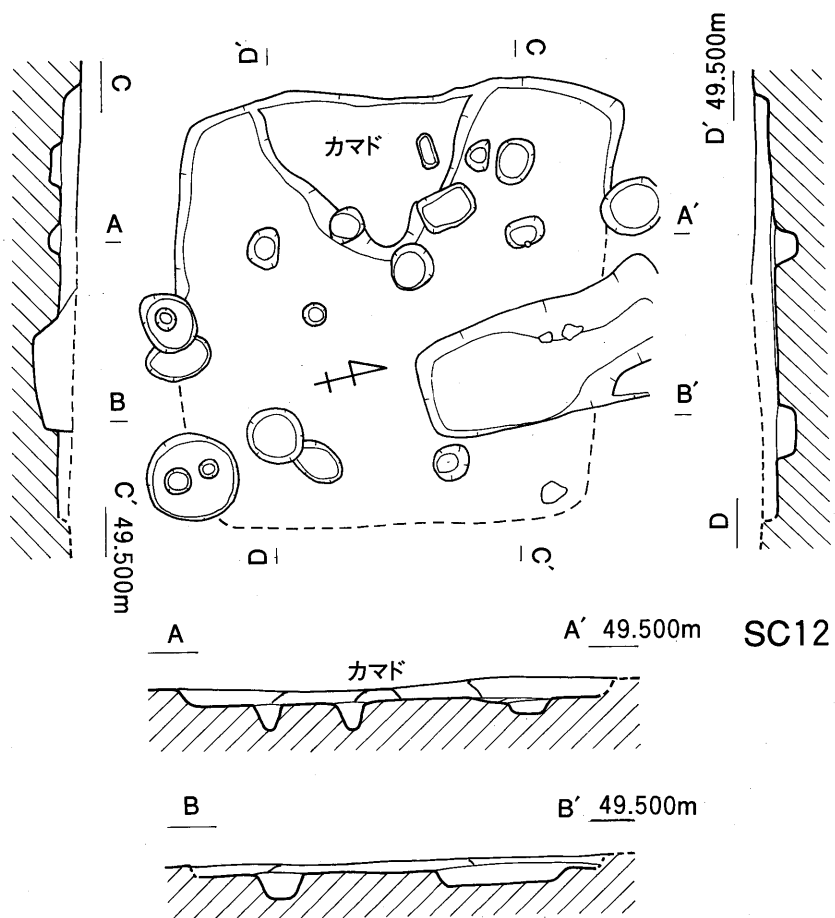
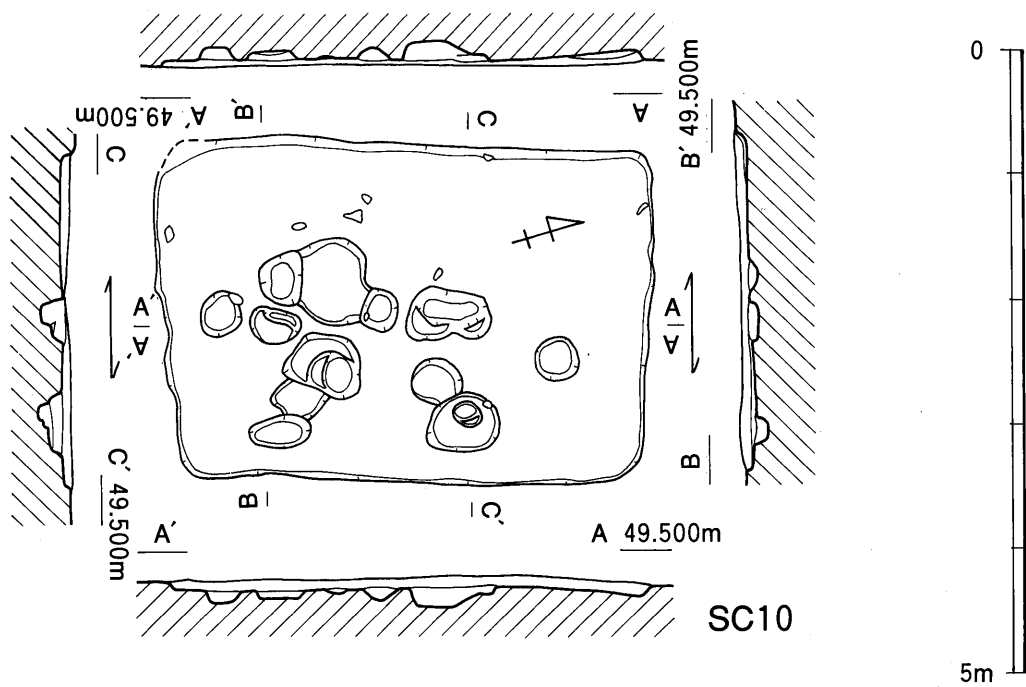


Fig.15 SC10・12実測図 (S 1 /60)

SC37 SC36とSD11に大きく切られ、北西側と南側の壁の一部の詳細は不明だが、遺存部分から方形のプランが推定される。主柱はコーナー部に近い4本柱を想定。床面には、カマド・炉の痕跡は認められないが、踏みしまりによる汚れが部分的にみられる。

SC38 (PL. 6) SC49とSK12を切る。すづまりの方形に近いプランを呈し、壁の遺存状況も5～8cm程度である。出土遺物は少ない。床面は、地山がすぐに認識できる部分と明確に捉えられない部分があったため、サブトレンチをいれて確認し判断した。カマドや炉跡は認められないが、踏みしめによる汚れは全体的に認められる。

SC39 調査区南側で検出。SC22に切られる。小型の不整長方形を呈し、土坑としてもよかったが床面の状況から住居跡とした。床面中央部の地山は最終的には周辺より低くなるが、踏みしまりによる硬化が顕著である。壁は遺存の良い方で30cm前後を測り、遺跡全体から見ても残りは良い方である。しかし主柱穴は不明。遺物はFig.25-148～152が出土した。

SC40 (Fig.24・25, PL. 6) ややすづまりの不整方形を呈し、壁の残りが割に良く深さ30cm前後を測る。壁は斜めに立ちあがり、床面にはカマドや炉の痕跡は認められない。また貼り床や踏みしまりによる汚れなども確認できなかった。主柱は短軸にあたる東・西壁のほぼ中心にあたる柱穴を想定したが、非常に浅い。このことから遺構検出直下に床面にあたるものが存在していたのを見過して、遺構の基底面まで掘り下げた可能性は否定できない。

SC41 SD10に切られる。台形状の歪んだプランを呈す。壁の深さは20cm前後を測り、壁は斜めに立ちあがる。床面には炉やカマドは検出されなかった。南東側の長軸の壁のほぼ中央部に土坑を検出。この住居跡に伴う屋内土坑かとも考えたが、住居跡の壁の途中から掘りこまれていたことと、掘り下げ時の埋土の状況から、この住居跡とは別のものと考えられる。遺物はFig.25-154～160・164などが出土している。160は主柱にならない他のPitからの出土で住居跡のものとは考え難い。床面の状況は、検出時より非常に硬くしまったものであった。これはこの遺構周辺の本来の基盤層の有り方に起因するものかも知れないが、時間的な制約のためさらに深く追求することはできなかった。主柱は両短軸のほぼ中央部に位置するPitを2本想定した。

SC42 SC11に切られ、半分以上は未調査区へと延びる。現況からは4本柱の可能性をもち、不整な長方形あるいは方形プランとも考えられるが推定の域を出ない。遺存する床面部分は、踏みしめによる硬化および汚れが認められる。カマドや炉跡も不明。出土遺物は少なくFig.25-161～163で埋土中のものであり、住居跡の時期決定にはならない。

SC43 (Fig.26, PL. 6) SD10を切る。若干歪んだ不整方形のプランを呈す。西側の壁の中央部に屋内土坑をもつ。壁は深さ7cm前後と遺存状況は良くない。床面の状況は踏みしまりによる汚れが中央付近に顕著である。しかし炉跡は確認できなかった。壁も5cm前後の深さで遺存状況は良いとはいえない。主柱穴は屋内土坑を中心として4本の柱を想定した。遺物はあまり多く出土せず時期決定できるものはない。

SC44 試掘トレンチによって南西コーナーとカマドの本体部は削平。現存するカマド付近の焼土と灰白色(2.5Y8/1)層は、カマド前庭部に堆積したものである。カマドは西壁の中心よりやや南側によった位置に構築されていたと考えられる。壁の深さ5cm前後を測り、遺存状況は良くない。主柱穴は、四隅のコーナー部に近いPitで4本柱と思われる。遺物はFig.28-166～171で、166については出土状況から別の遺構のものと考えておきたい。

SC45 全体の1/4程を試掘トレンチで削平。甕棺墓1・2号に切られる。隅丸長方形のプランを呈していた可能性をもち、支柱穴は2本と想定できるが、南側がトレンチによって削平のため推定の域を出ないが、甕棺墓との切り合い関係や同時期の遺構からすると妥当だと思われる。床面には、さほどの踏みしまりはないが、中央付近に若干の汚れが認められる。壁は10cm前後を測り、遺存の良い方にはいる。遺物は少なく、図示できたのはFig.28-172だけである。

SC46 SC47に切られ、遺構の大半は未調査区へと延びる。東側のコーナー部と北壁の一部しかなく全容の詳細は不明。遺存部分の壁の深さも7cm前後を測る。床面には踏みしめによる汚れが僅かに確認できた。出土遺物は少なく図示できるものもない。

SC47 (Fig.26) SC46を切る。遺構の半分以上が未調査区へと続く。カマドは西壁に構築されている。北壁側の遺存状況から一辺が4.7m前後の方形プランも推定されるが、カマドが若干北側によっている事も考慮するとあるいは長方形かも知れない。これも出土遺物で図示できるものはない。カマド立ち割りの精査で、SC46・47の未調査区の土層観察を行ったところ、現状剝土面より15cm程度上層部分から遺構の掘りこみがあることは追認できた。現状の剝土は試掘データに基づいて始め、剝土途中で気づいたため、部分的に下げ過ぎていたと考えていた事と一致する。しかしながらSC47のカマドを上面で検出するのは容易ではない。調査区全般に云える事だが、カマド部分に、しっかり白色粘土を使用しているのは少ない。しかもカマド本体がガチガチに焼きしまっている場合は別にしても、僅かな熱変化に止まるカマドも少なくなく、カマドと認識するまでかなり躊躇するものが多かった。平成7年度調査分には後者のカマドをもつ住居跡が多かった事をここで記述しておきたい。SC47の現況のカマドからは規模、支柱・火床など明確にできなかった。

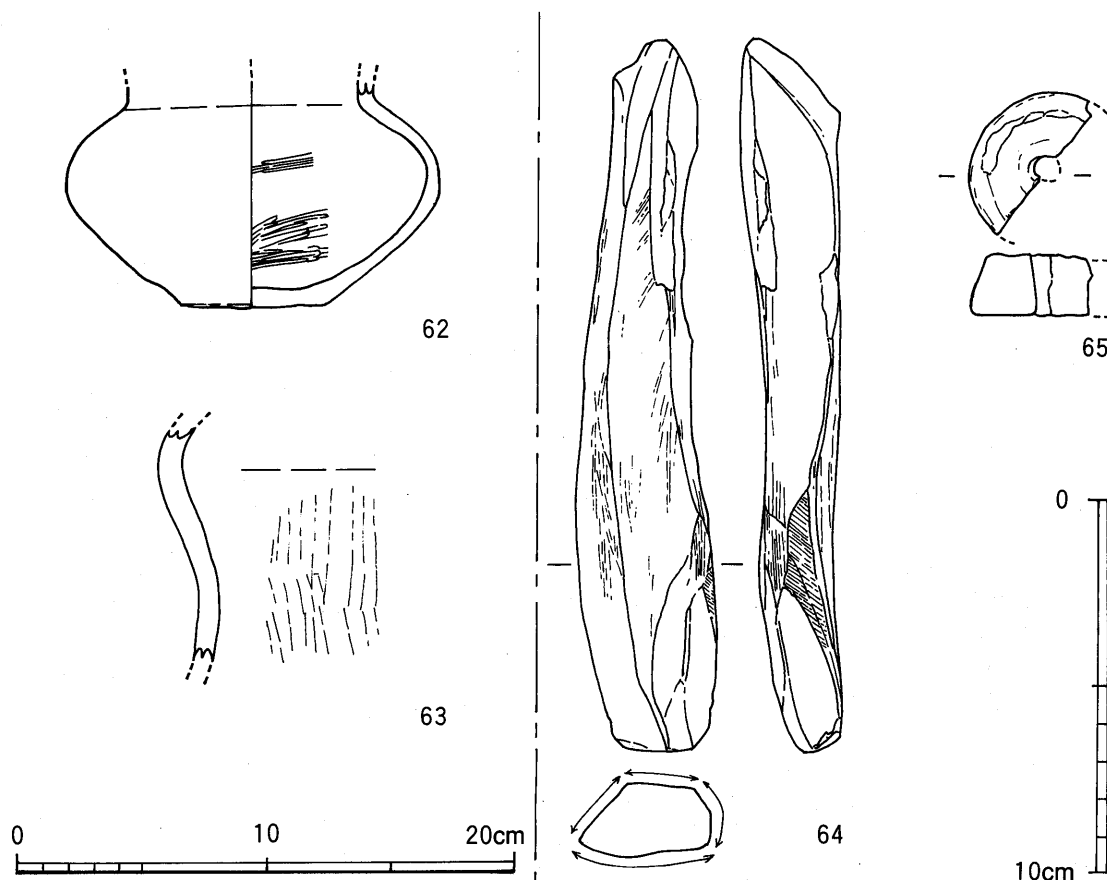


Fig.16 SC10~12・14出土遺物実測図 (S1/2・1/3)

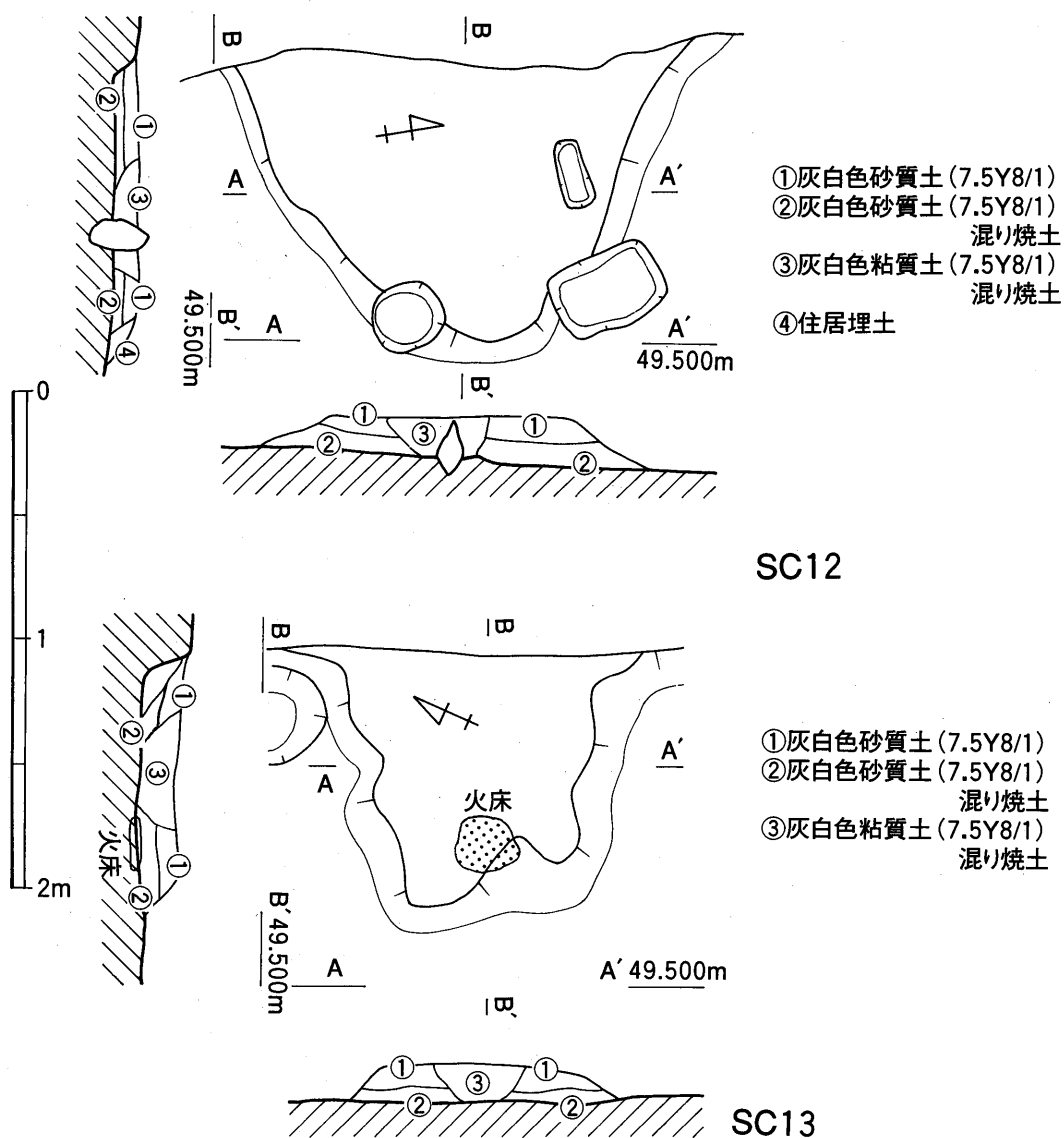
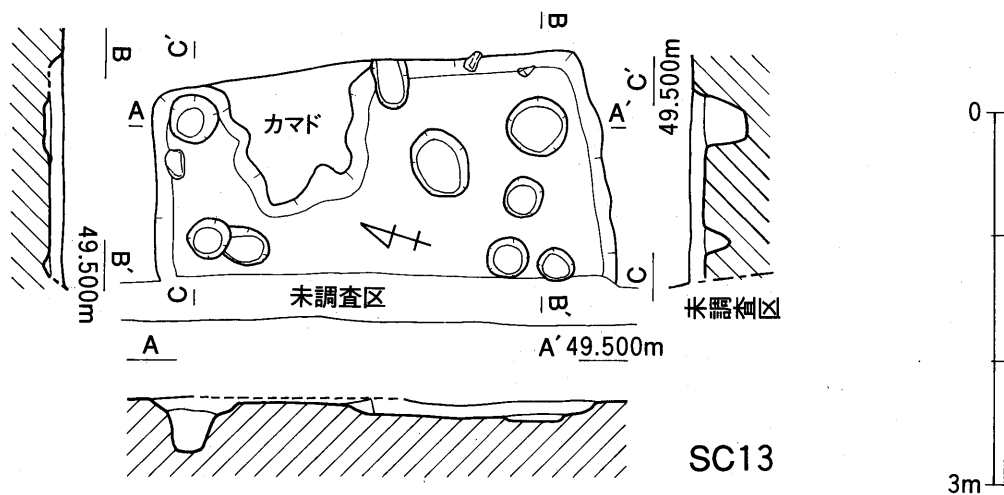


Fig.17 SC13およびSC12・13カマド実測図 (S1/60・1/30)

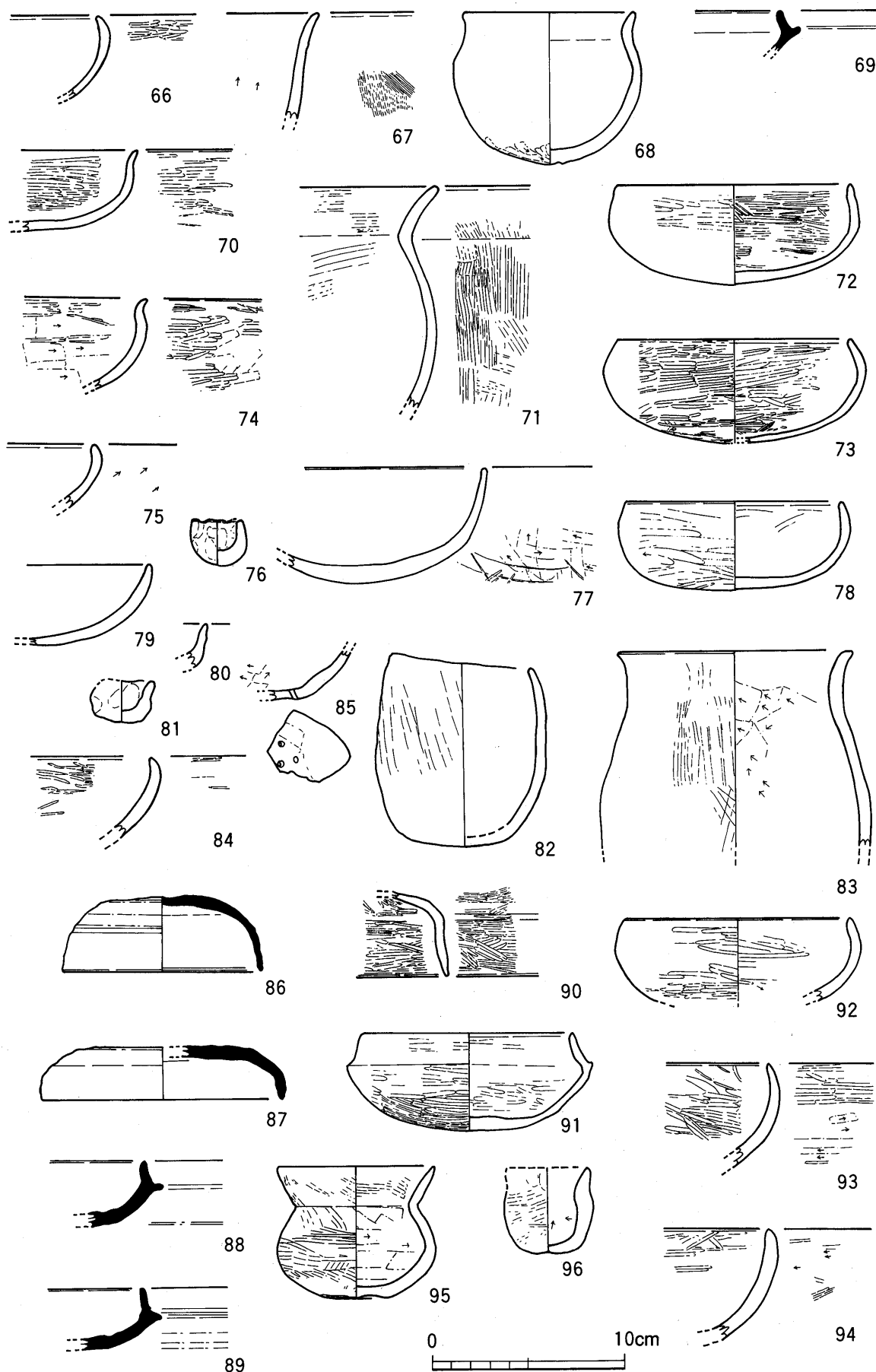


Fig.18 SC10~14出土遺物実測図 (S1/3)

SC48 SC36・37に切られて全容は不明。検出できた北東側のコーナー・壁から推定するならば一辺2 m前後で、壁の深さ10cm前後を測る方形もしくは長方形のプランを呈していたと考えられる。主柱穴は、他の遺構に切られているため不明。出土遺物は図示できるものはなかった。

SC49 (PL. 7) SC33に南東コーナー部分を切られて、SC80を切る。一辺3 m前後の不整な方形プランを呈し、壁は20cm前後の深さを測る。床面は西側部分が壁から80cm前後の幅で東側や中央部より僅かに高くなって段がつき、高低差は5 cm程度。この高い方で一度床面が確認できた。掘り下げたのは住居跡の基底面と考えられ、低い方の地山は若干水分を含んで弱い。踏みしまりの状況は確認できる。図示できる遺物は Fig. 27-165だけである。

SC50 (Fig. 26, PL. 6) SC76・107を切る。一辺2.4 m前後の不整方形のプランを呈する。床面には炉跡やカマドなどはなく、壁の深さ10cm前後を測る。西側コーナー付近に踏みしめによる汚れが顕著である。遺物の出土は少なく図示できたのは Fig. 28-173で時期決定の明確な資料とは考え難い。

SC51 SC44・60・79に切られ、全容は不明である。検出できた西壁部分の深さは、15cm程度を測り、遺存部分にはカマドや炉跡などは検出されなかった。形状は周辺の遺構から一辺4 m前後の長方形もしくは方形プランが推定されよう。遺物は Fig. 30-174が図示できた。

SC52 (Fig. 30) 試掘トレンチに切られ、全容不明。カマド袖部がTLの壁面に検出されていた。遺存の良いカマドで、袖部は灰白色(10Y 8/1)で熱変化はかなりのもので、使用頻度は高い。支脚には長さ25cmの柱状の石を用いている。土器が支脚の上にあったと考えられるが、住居跡が埋っていく過程の土圧によって支脚の長さの半分位沈みこんで検出。支脚の前面に10×15cm程の火床があって、中心部は3 cm程の厚みとなっていた。支脚両脇にも土器が据えられていたと考えられる。

SC53 (Fig. 29, PL. 7) SC35・73・74を切る。検出されたプランは2.8m×3 m前後のすづまりの長方形を呈し、東壁側から0.7~1 mで深さ10cm程度の段がつき床面は二段となっている。これは形状的にはSC49と同一かとも考えられたが、深い方の西壁側の床面に Fig. 31-207が出土した事を考えると低い方を床面として良いと思われる。2.2m×3 mの長方形プランの土坑の上に浅い住居跡が作られた可能性も考えられるが、検出時には埋土の違いは認められなかったことから、一応段をもつ住居跡と考えておきたい。遺物は Fig. 31-198~207が出土している。

SC54 (Fig. 29, PL. 7) SC45に隣接し、SC62を切る。形状は2.4 m前後×3 m前後のすづまりの方形プランを呈し、壁も5 cm前後を測る深さしかない。床面にはカマドや炉跡も検出されない。しかし床面の中央部付近は踏みしまりと汚れが顕著である。遺物は少なく、図示できるものもなかった。主柱は両短軸のほぼ中心にある Pit が想定でき、2 本柱としておきたい。

SC55 (PL. 7) SC56に切られ、SC71・77を切る。一辺2.5 m前後の不整方形プランを呈す小型の住居跡と考えられる。遺存する床面は深さ12cm前後で、踏みしまりによる汚れとやや硬化した部分を確認。床面のほぼ中心部にあたる所に焼土および若干の炭が検出された。これは簡易の炉跡と考えて良いと思われる。時期決定となりうる遺物の出土はなかった。

SC56 (Fig. 29, PL. 7) SC55を切る。一辺が2 m前後の方形プラン。小型のため土坑かとも考えられたが、床面の踏みしまり状態などから小型の住居跡とした。壁の深さは10cm程度で、北西コーナー付近の床面は黄色の地山となる。床面は踏みしめによる汚れが確認。主柱穴は床面の中央部に位置する2本を想定した。出土遺物は Fig. 31-208~210である。

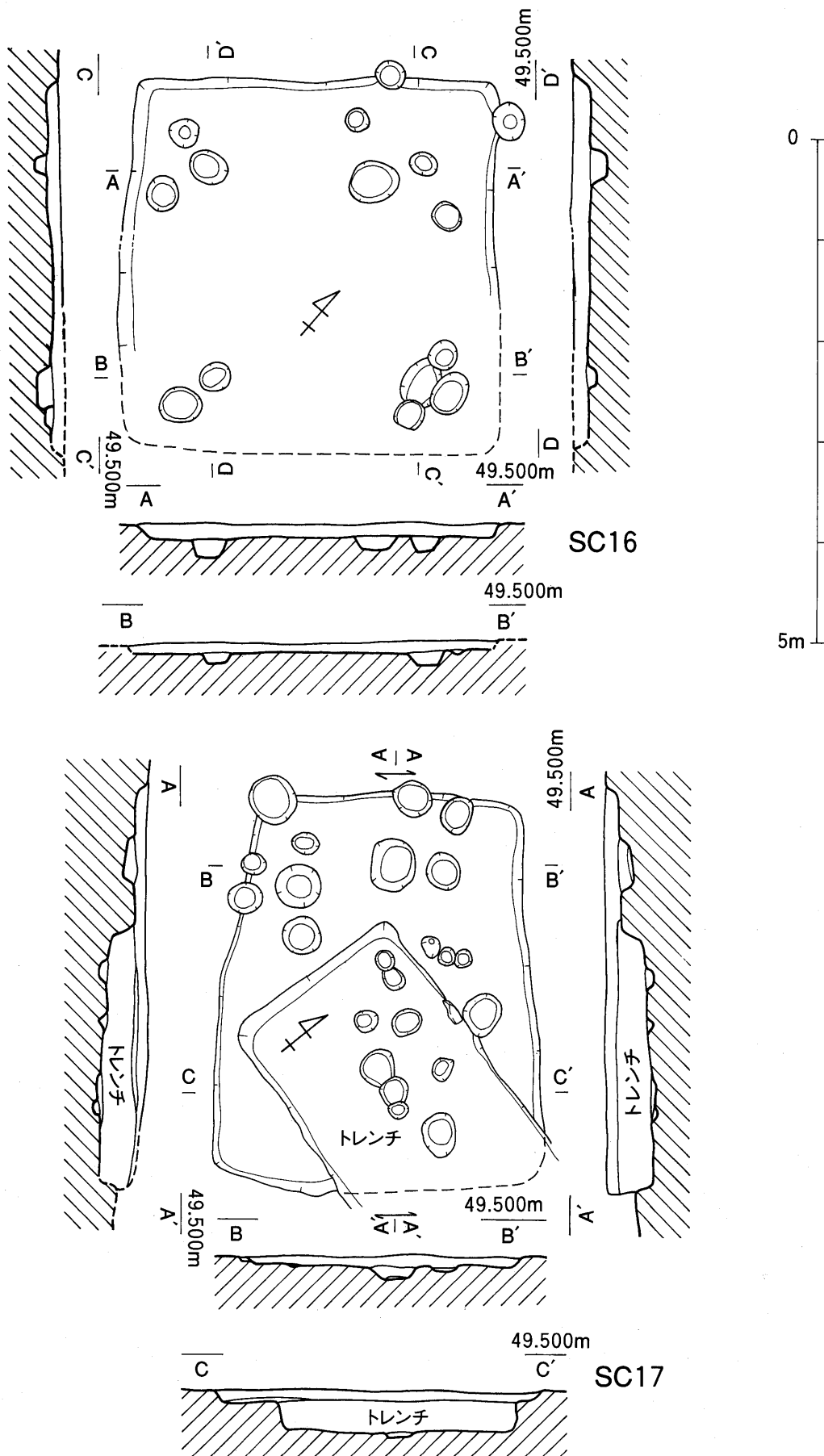


Fig.19 SC16・17実測図 (S1/60)

SC57 (PL. 7) SC55・56・68に切られる。壁の深さ5cm前後で、遺存は悪い。遺存部から推定すると直径4m前後の円形住居跡と考えられる。主柱穴は周縁壁より0.7m前後内側に推定すると6本柱であったと思われる。出土遺物で図示できるものはなかった。

SC58 SC19に切られ、全体の1/4程が未調査区へと続く。短軸1.7m前後、長軸2.7m前後の小型の長方形プランを呈す。壁の深さ15cmは前後と良い方である。床面には炉跡・カマドは検出されず踏みしめも、さほど顕著ではない。主柱は短軸の中心に位置する2本柱が考えられる。遺物は図示できるものはなかった。

SC59 SC120に切られ、1/3程度は未調査区へと続く。形状は不整長方形を呈すと思われる。壁の深さは5cm前後で遺存は悪い。床面には炉跡やカマドは検出できず、踏みしめも顕著でない。遺物はFig.30-190・191で埋土中からのものである。

SC60 一辺が2.5m前後の不整方形を呈す小型の住居跡と思われる。SC51・61・79に切られる。床面の深さは5cm前後で遺存は悪い。しかし踏みしめによる汚れが確認された。遺物は時期決定できるものは出土しなかった。

SC61 SC60・79を切る。短軸3m前後、長軸4.3m前後の長方形を呈す。床面には、炉跡やカマドは検出されなかった。床面は深さ5cm前後と浅く、床面の踏みしめは顕著である。

SC62 SC54に切られる。短軸3.6m前後、長軸4m前後のややすづまりの長方形の形状を呈す住居跡。西壁側の立ちあがり、遺存が非常に悪く、踏みしめの硬化や汚れがなければ、住居跡の境界を見落としがちであった。カマドは長軸にあたる南壁に構築されるが、中心より若干東へ寄って位置する。SC54に切られているためカマドの遺りは悪く、僅かな焼土塊によって確認できるだけである。遺物はFig.30-193・197だけが図示できた。

SC63 長軸2.2m、短軸1.2m前後を測る。小型の長方形を呈し、土坑としてもよかったが、周辺の遺構状況などから住居跡として取り扱った。床面は深さ15cm前後を測り、平坦面をなす炉跡やカマドの検出はないが、若干の踏みしめりが部分的に確認された。主柱は不明。遺物はFig.30-194・195が出土している。

SC65 SC26に切られ、SK20を切る。短軸1.5m前後、長軸2m前後を測る不整長方形の形状を呈すると考えられる。これも小型であるが住居跡として扱った。現存の床面には、炉やカマドは、やはり確認できない。しかし、床面には僅かだが踏みしめりが認められる。図示できる遺物はFig.30-196だけである。

SC66 SC9・16に切られる。プランは台形状となって整っていない。これも壁の残りは悪く、踏みしめによる汚れによって床面の手掛りがつかめた状況である。特にSK3の周辺の踏みしめは顕著である。遺存部には、カマドは検出できなかったが遺構の中心付近に熱変化の部分が確認されたが、Pitに切られているため規模などは不明である。出土した遺物の中には図示できるものは、なかった。

SC67 (Fig.32, PL. 8) 北西コーナー部を試掘TLで切られる。一辺が4.5m前後のほぼ方形プランを呈する住居跡。壁の遺存は良い方で、カマドの位置する西壁側と北壁側は20cm前後、東壁および南壁側でも15cmを測る。南壁側の2本の主柱穴周辺は貼り床、踏みしめりが顕著で、現状図化の後、床面を掘り下げた所、南西壁から南コーナー部分にかけてを狭小な範囲ではあるが、拡張している事が明確となった。カマドは西壁のほぼ中心（つまり拡張前のプランの中心）に構築。カ

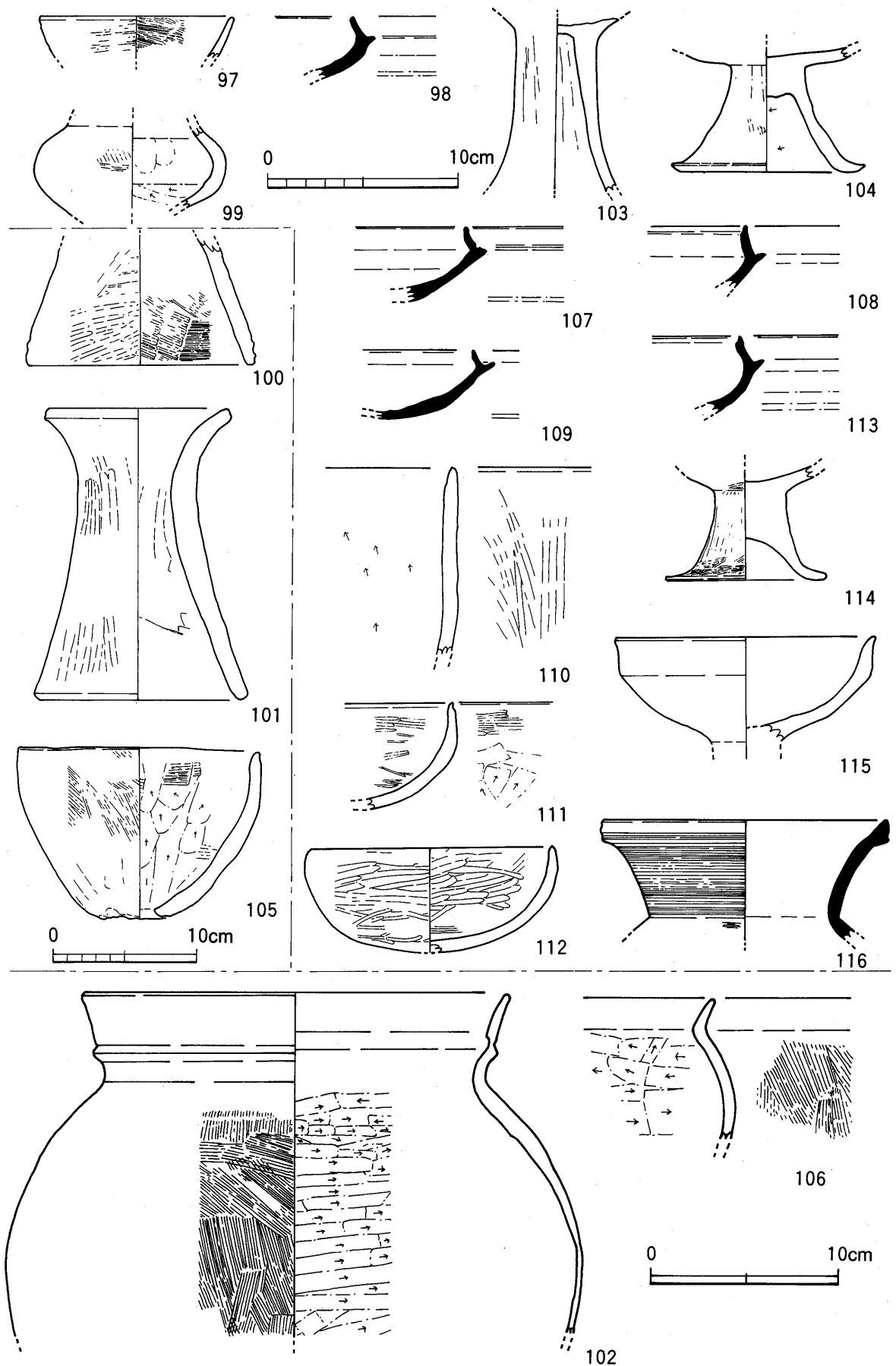


Fig.20 SC16・17・21・22・24・25出土遺物実測図 (S1/3・1/4)

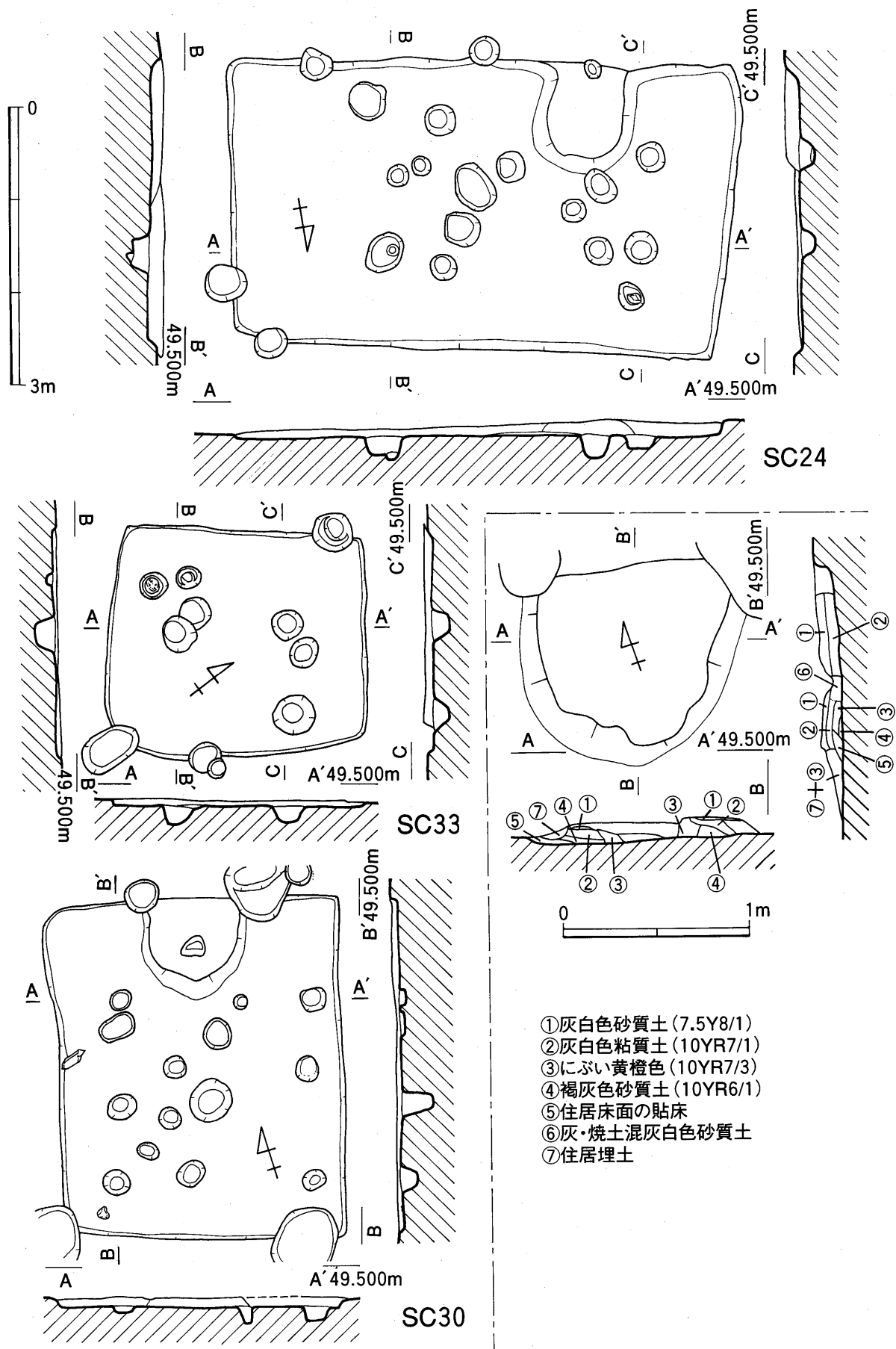


Fig.21 SC24・30・33およびSC30カマド実測図 (S1/60・1/30)

マドは検出時に本体の観察結果、遺存状況はあまり良くないと判断。袖部には粘土は使用されていないが、基底面の5cm上部から遺存する範囲は、熱変によりガチガチの灰白色砂が堆積してかなりの使用頻度があったものと推測できる。前庭部には炭・灰混りのPitが存在するも支脚は抜かれていて検出できなかった。カマド北側の床面にはFig.34-213の土器があり、その近くの埋土内から214が出土した。212は主柱穴にならないPitからのもので前者をこの住居跡の時期判定の資料としたい。なお住居跡はSP1を切っている。

SC68 (Fig.33, PL. 8) SC23に切られ、SC57・69を切る。一辺4.9m×5.1mのほぼ方形のプランを呈す。床面には全般的に貼り床があって主柱穴と考えられるPitの周辺部は、踏みしまりも顕著である。検出された床面を掘り下げて、住居跡基底面の精査をすると西北側から北壁側が拡張され、それに伴って柱穴も移設されている事が分った。壁の立ちあがりには西壁側が21cm、南・東壁側が15cm前後、北壁が10cm前後となる。これは剥土時に北側周辺を若干下げすぎた事に起因するが、SC67・68ともに今回の調査区の中では遺存は良好な方だと云える。カマドは、検出時の所見観察によれば、良好な遺存状況とは云えず、立ち割の土層観察によって構造を知る事とした。カマドは西壁側の若干南によって位置する。カマド上面にはPitがあって、あたかもカマドに伴うものと誤解するが、カマドとして残した部分は、SC67よりもガチガチの灰白色土が10cm前後覆っていた。このカマドにも支脚はなく、抜きとられていた。袖部には粘土は使用されていなかったが、天井部付近には若干の粘土が使用されていたのか、支脚抜きとり穴には灰に混じって粘土も僅かに確認された。カマドは床面上に袖の基底面となる土層を5cm平坦に置き、その上に積み土を重ねて袖を築いている。遺物はFig.34-215, Fig.35-216~242と図示できるものが多いが、時期が大きく2つに分類される。カマドからは239・240・241である。もしかすると6世紀初めに使用された住居跡が後に再利用された可能性も考えられる。

SC69 SC68・SK15に切られ、SC9・25を切る。南壁・北西壁の一部だけが遺存。3.4m前後×3.8m前後のやや寸づまりの長方形のプランが想定される。壁の立ちあがりには、カマド付近が12cm前後を測るが、北壁側は2cm前後と残りが悪い。カマド前面の床は踏みしめによる汚れが顕著である。カマドは南壁の中心より僅かに西によって構築されている。カマド自体の遺存状況も悪い。袖部・天井部には粘土は使用されていず、現存部分には灰混りの焼土と僅かに熱変化した灰白色の層が堆積してただけである。これにも支脚は遺存せず、抜きとりが行われていた。主柱穴は各コーナー近くに位置するPitを想定。遺物は図示できるものは出土していない。

SC71 (PL. 8) SC55に切られ、SC77・78・84を切る。一辺が3.5m前後の不整形のプランを呈す。床面にはカマドはないが中心付近に炉跡と思われる焼土が確認された。床面の中心付近が踏みしめによる汚れが目立つ。壁の立ち上がりは12cm前後と割に良い方である。Fig.37-244が出土遺物の中で図示できたものである。

SC72 (Fig.36, PL. 8) SC31に切られ、SK16を切る。隅丸長方形のプランを呈し、小型の住居跡と考える。一辺2.2m前後×3.1m前後を測る。主柱穴は短軸のほぼ中心にあるPitを想定し、2本柱とした。床面上には炉跡・カマドは検出されなかった。主柱穴の間、床面の中心付近にあたる所は踏みしめによる汚れと硬化が顕著となる。出土遺物は多い方ではないが図示できるものは少ない。Fig.37-249・250だけが図示できたが、住居跡の時期決定の資料には、やや不足している感じは否めない。

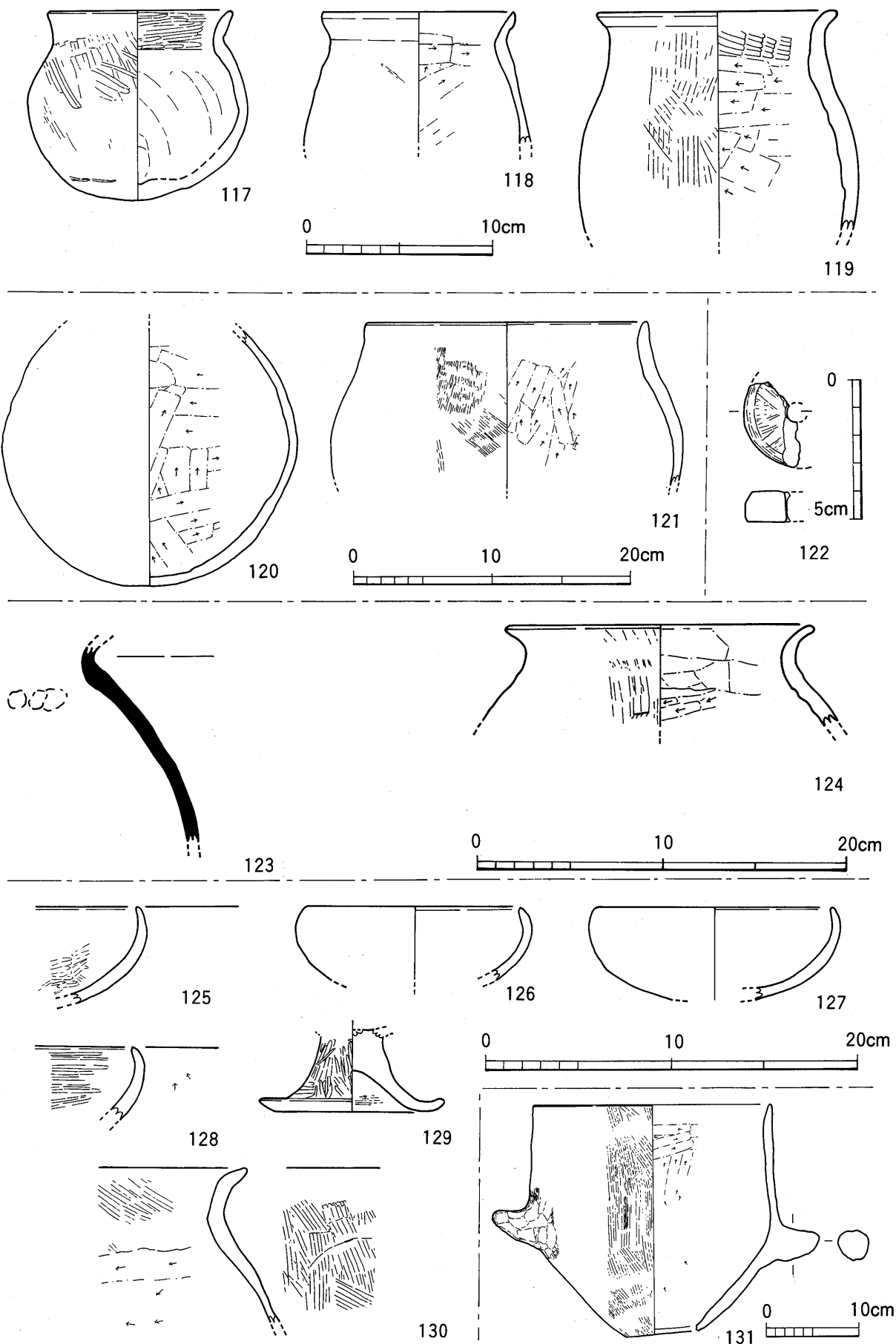


Fig.22 SC25・26出土遺物実測図 (S1/2・1/3・1/4・1/6)

SC73 SC47・53に切られ、SC74を切る。東側のコーナー部と東壁、西壁の一部を残している。壁の立ち上がりは7 cm前後を測る。短軸2 m前後、長軸3.5m前後の小型の長方形の形状を呈すと考えられる。床面上には、炉跡・カマドなどは検出されない。踏みしまりによる硬化や汚れもさほど見受けられない。遺物は図示できるものはなかった。

SC74 SC53・73に切られる。北壁の一部と北東コーナー部しか残っていないため、全容を述べるには無理がある。しかしながら、周辺の遺構検出状況から一辺4 m前後の寸づまりの長方形が推定される。主柱穴も4本柱の可能性が考えられる。

SC75 調査区の南端、市道建設予定地に位置する。SD13に切られる。一辺2.2m前後の方形のプランを呈し、床面には炉跡・カマドは検出できなかった。床面上は踏みしまりによる硬化や汚れは、さほど見受けられない。壁の立ち上がりは6 cm前後と浅い。SC75の周辺には、多くの Pit が検出されたが、建物跡としてまとまるものはなかった。

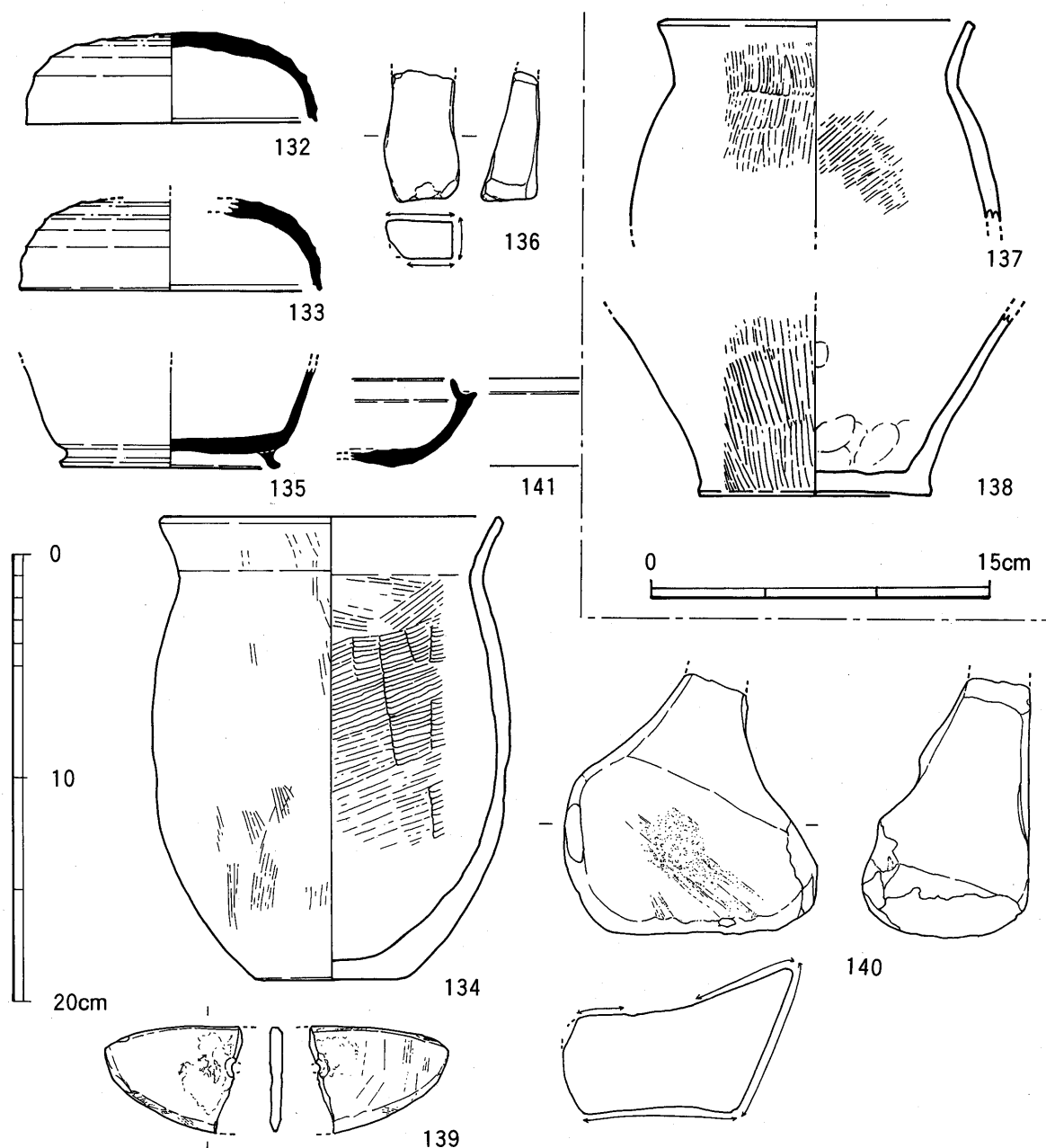


Fig.23 SC27・29～31出土遺物実測図 (S1/3)

SC76 (PL. 8) SC50に切られ、SC34・107を切っている。短軸1.8m前後、長軸2.1m前後の小型の不整長方形プランを呈す。主柱穴は短軸のほぼ中心に位置するPitを考え、2本柱としておきたい。また床面の中心部付近に踏みしめによる硬化と汚れが確認できる範囲がある。図示できる出土遺物はなかった。

SC77 SC55・56・71に切られる。北壁と東壁の一部を残す。明確になるのは一部のみだが、一辺が3.4m前後の方形もしくはすづまりの長方形プランを想定。主柱穴は、コーナー付近に位置するPitを考え、一応4本柱としておきたい。床面にはカマドはなく、北東の柱穴付近に炉跡と思われる焼土があったが、きわめて狭小の範囲であったことと熱変化もさほど強くはなかった。図示できた遺物は、Fig.37-248だけである。

SC78 SC71・84に切られ、南東コーナー付近を遺すだけで詳細な全容はつかめない。南東コーナー付近の壁の立ちあがり12cm前後の深さを測る。床面には、踏みしまり・貼り床は認められない。SC71と重複する部分が、踏みしめによる汚れが顕著であったことから、遺構の中心となる部分は、SC71の北東壁の中心付近であったと推定される。主柱は現状では2本のみ確定できたが、他は不明。重複している部分が多く明確にならない。

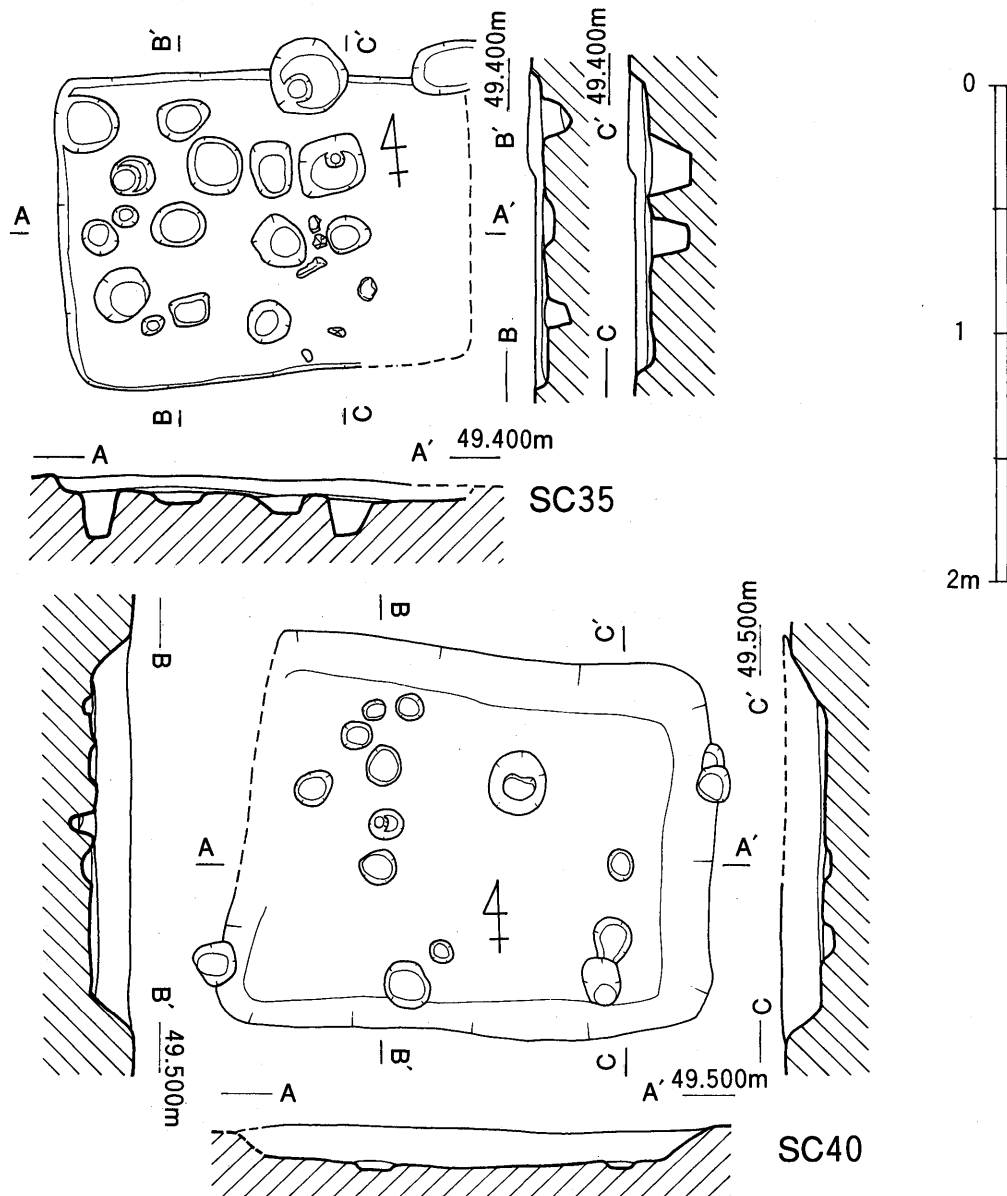


Fig.24 SC35・40実測図 (S1/60)

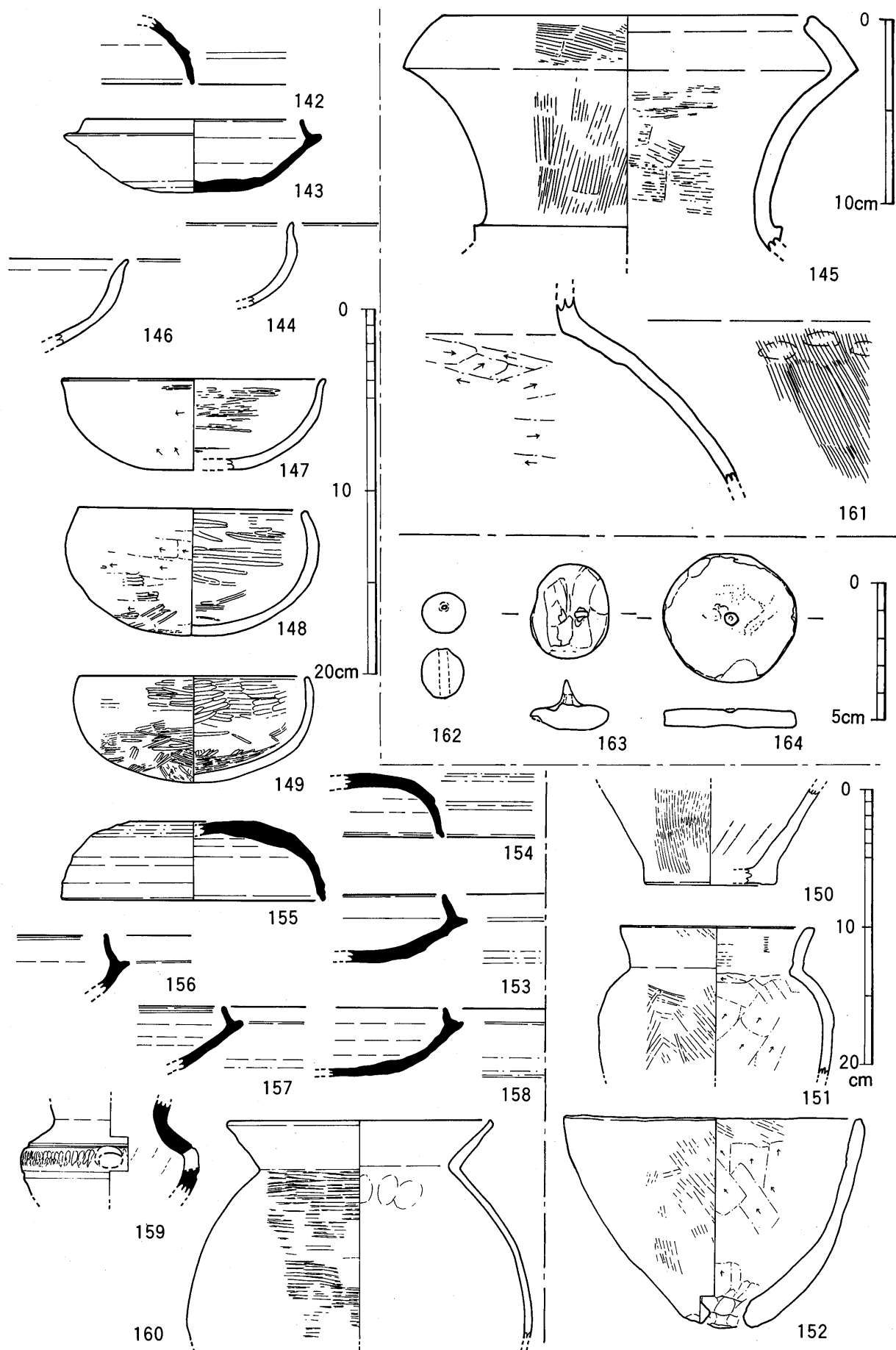


Fig.25 SC34~36・39~42出土遺物実測図 (S1/3・2/3・1/4)

SC79 SC51・60・130を切って、SC44・61に切られる。壁の立ち上がりも全体的に残りは悪く5cm前後しかない。カマドは東壁のほぼ中心に構築されている。遺存は良好でなく床面から10cm程度が検出された。カマドの中心と考えられる所に長さ30cm、幅10cm前後の直方体の花崗岩の石が露呈している。これは支脚に使用さ

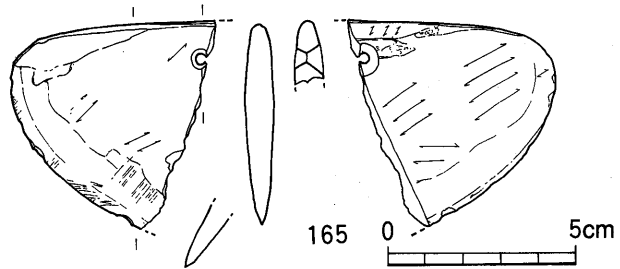


Fig.27 SC49出土遺物実測図 (S1/2)

れた石の可能性をもつ。しかし石自体は、強度の熱変化はしておらず、脆くもない。カマドとして残した土層の表面は、極度ではないが熱変化した灰白色粘土混りの砂質土で覆われているが、移植ゴテなど刃がたたない程、固くはなく、天井部や袖部であったものが破壊されて前庭部付近にまで堆積していた。カマドの中心部には支脚抜きとりの跡が確認された。袖部の基底面から7cm前後の高さで土を積んで、さらにその上に粘土混りの砂質土を積んでいったものと考えられる。カマド内部と前庭部には3cm程度の炭・灰焼土などが堆積している。このことから考えると、カマドの使用頻度は低かったと思われる。また前庭部・本体部の基底面にはPitは設けられていない。また袖部や焚口部に石は使用されていない。床面には貼り床などはなく、カマド前庭部付近、床面の中心部と考えられる所が踏みしまりによる汚れなど顕著であった。北西側の床面は、SC130と重複するため床面を容易に検出することができず手間どった。主柱穴は、床面の中心付近に位置するPitを想定し4本柱とした。しかし北東側のPitは他のPitに切られているため明確な規模・深さなど不明である。形状は、短軸4m前後、長軸4.5m前後の寸づまりの長方形と考えられる。出土遺物は多いが、図示できるものはない。しかし周辺の遺構の切り合い関係から判別すると時期の明確なSC44に切られているため、7世紀中頃より以前の住居跡であると考えてよいと思われる。この住居跡のカマドにも前述の様に構築の際、多量の粘土が使用されたものではない特長をもっている。

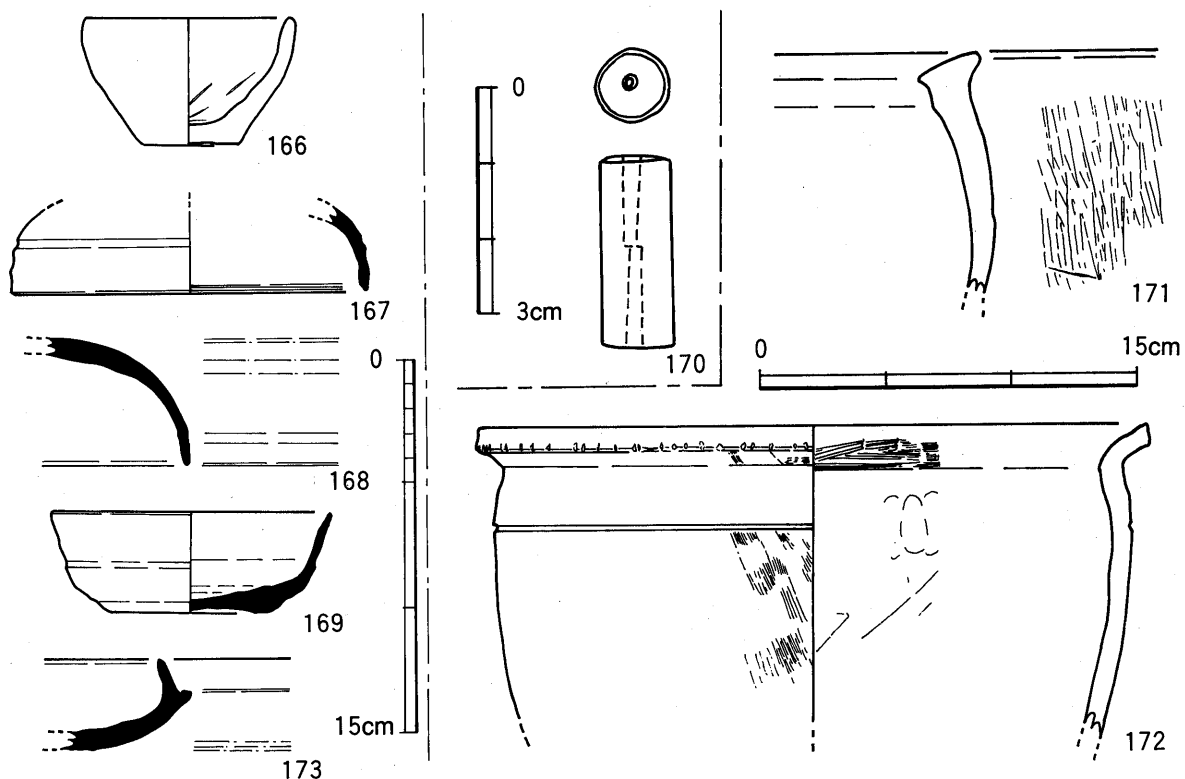


Fig.28 SC44・45・50出土遺物実測図 (S1/3・1/1)

SC80 SC49に1/2程度切られる。遺存する壁は南・東・北壁の一部である。壁の立ち上がりは5cm前後と遺存状況は良くない。現存する状況から推測すると短軸2m前後、長軸2.3m前後の寸づまりの長方形のプランが考えられる。床面にはカマドや炉跡は確認されなかった。支柱は短軸の中心に位置する Pit が想定でき、2本柱と考えておきたい。遺物は時期決定できる資料はなく、切り合いからも判断できない。

SC81 (Fig.36) SC119を切る、不整な寸づまり長方形のプランを呈している。短軸2.2m前後、長軸2.5m前後を測り、深さ10cm前後の立ち上がりをもつ。床面には、カマドや炉跡は検出されない。北・西側の床面には踏みしめによる汚れが僅かに確認できるが、東側の汚れは顕著である。このことは遺構の重複に起因すると考えられる。支柱穴については短軸のほぼ中心部に位置する Pit を想定し、2本柱としておきたい。遺物は少なく、図示できるものもなかった。

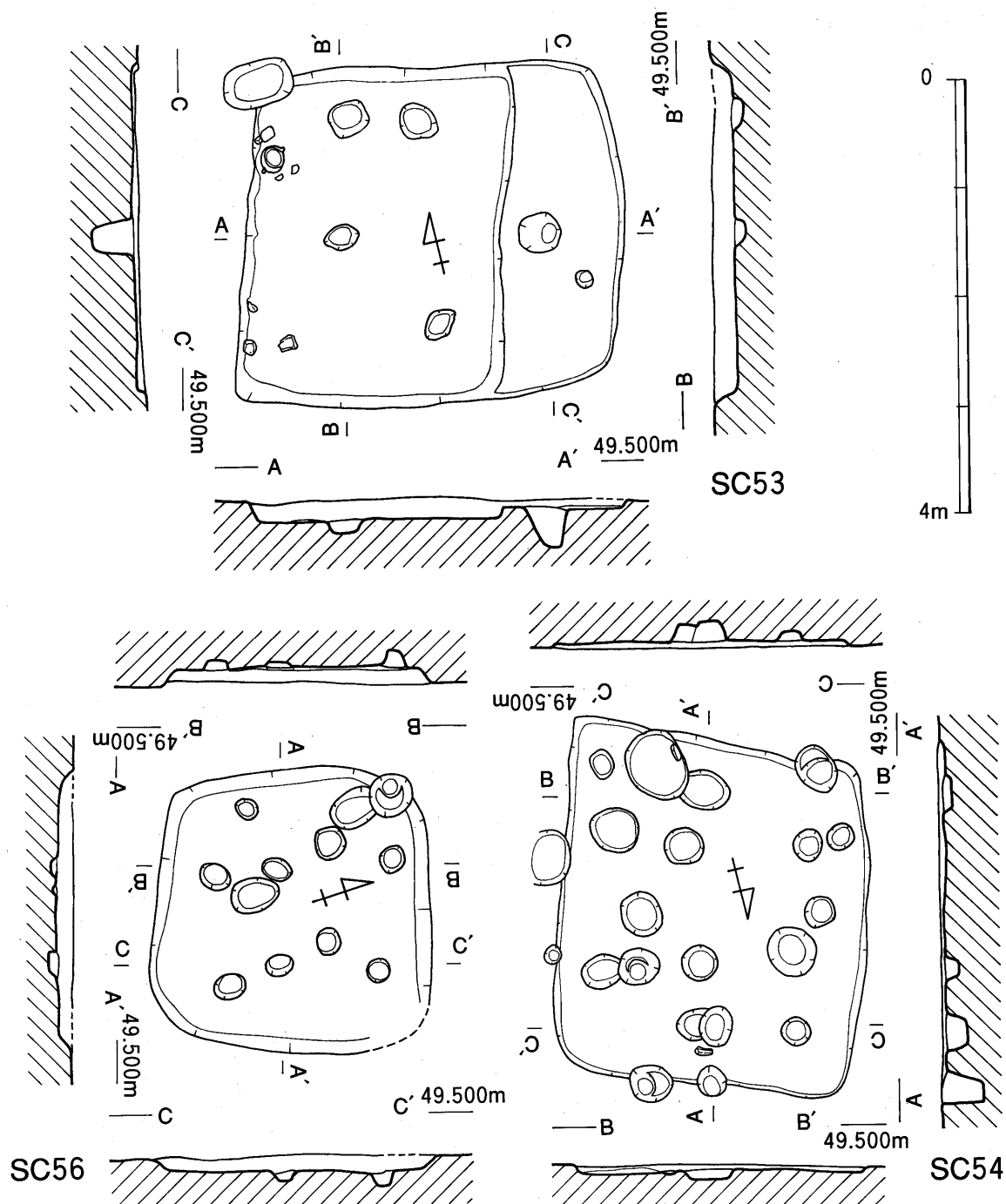


Fig.29 SC53・54・56実測図 (S1/60)

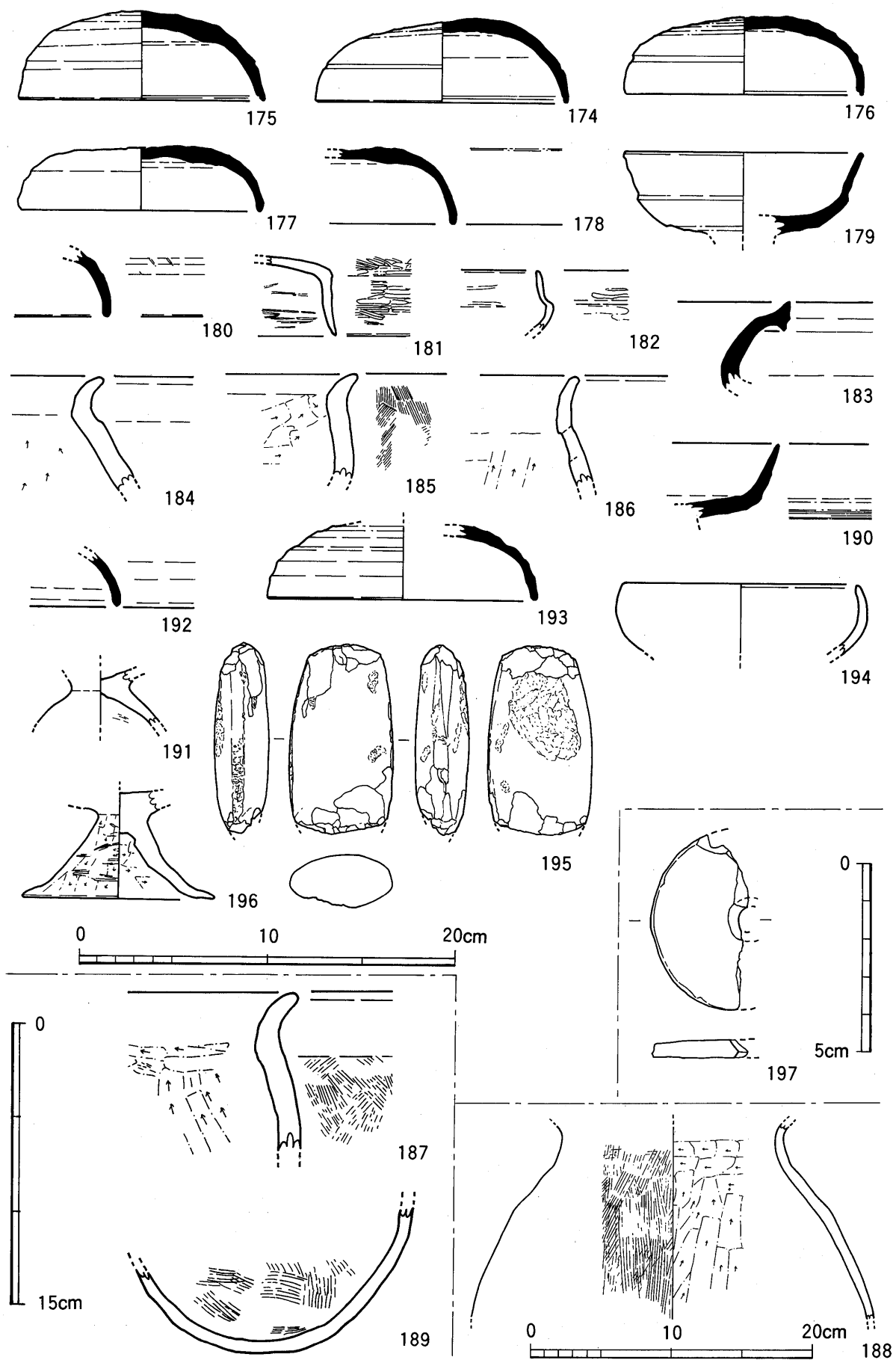


Fig.30 SC51・52・55・59・61～63・65出土遺物実測図 (S1/3・2/3・1/4)

SC82 SC1・131を切る。剝土のしすぎのため、プラン・規模など全容は不明である。SC1の東側に、カマドの残骸だけが検出された。この付近の剝土の事を考慮しても壁の立ち上がりは10cm前後で、元々遺存良好だったとは考え難い。これは次年度の調査時にも云える事で、かなり注意して剝土は上面の層で止めたものの明確なプランを捉える事はできなかった。カマドは北東壁にあったと推定される。カマドの構築は、SC131の床面上を3cm程の粘質性の土で平坦に基底面を積みあげ、その上にさらに砂質土を積んで構築している。現存部は炭混りの焼土塊だけが袖として残る。支脚に使用された石や土器なども検出されなかった。焼土塊を立ち割り後、除去した所、3つのPitが検出されたが、埋土の状況などから、このカマドに付設されたものではないと判断した。Fig.37-247が図示できた遺物で、7世紀後半に位置づけられることからSC82の時期にあてておきたい。

SC83 (PL. 9) SC62に接するように位置する。短軸2.6m前後、長軸4.1mの不整長方形のプランを呈している。壁の深さも13cm前後を測り、割に遣りは良い方である。しかし北西コーナー付近の床面は、遺構の重複による床面検出の困難さから、多少掘り足りなかった可能性はある。カマドは南壁に位置し、中心よりやや東壁によって構築されている。カマド上面の土は、熱変化しておらず、炭混りの焼土だけが残存していた。これも支脚にあたる石や土器などの検出はなく、抜きとりがされていると考えられる。床面は貼り床はないが硬化した面が顕著に見られた。

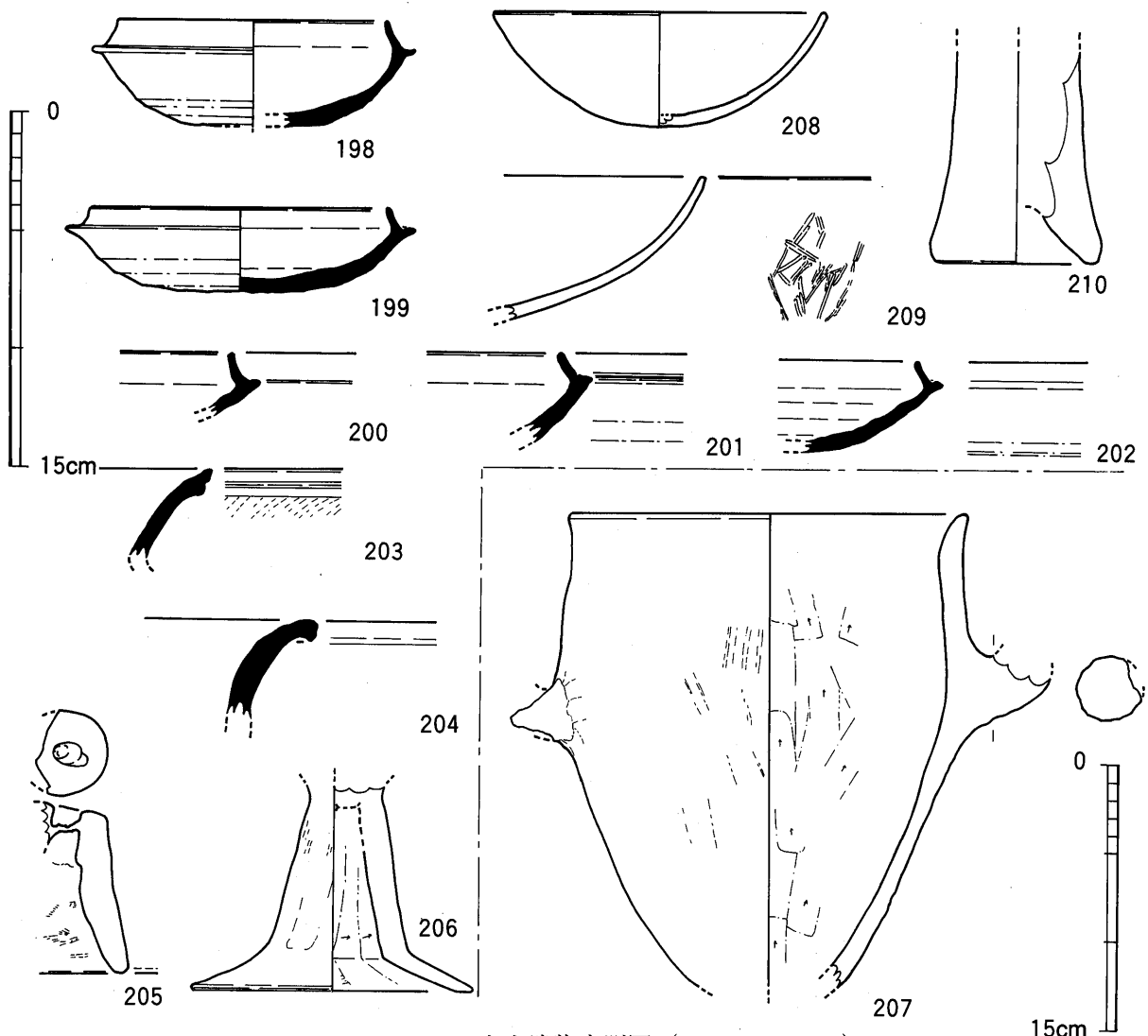


Fig.31 SC53・56出土遺物実測図 (S1/3・1/4)

SC84 SC78を切って、SC71・77に切られる。SC393を切る。遺構の大半を切られているため、北壁2.1+ α m、東壁3.6m、南壁1.2+ α mしか計測できず、規模・形状ともに不明。現存部には炉跡・カマドは検出されない。床面の一部分に硬化面を確認。遺物で図示できたのはFig. 39-261の鉢。色調はにぶい橙色（5YR 7/3）を内外ともに呈す。復元口径16.25cm、器高6.65cmを測るが、全体的に歪みがある。内面をハケメ後ナデ、外面はナデ後部分的にミガキによる調整。

SC85 調査の南東部にあってSC94を切る。一辺2.6m前後の方形プランを呈している。床面には、炉跡・カマドは検出されない。全体的に床面は踏みしめによる汚れが目立つ。南壁側は、地山自体が傾斜をもっているため、壁の立ち上がりは、ごく僅かしかない。東西壁の立ち上がりは10cm前後の深さを測る。主柱穴は、南北壁のほぼ中心部に位置するPitを主柱と考え、2本柱とした。

出土遺物は、全般的に少なく、図示できたのはFig. 39-262だけである。

SC86 南北壁の長さ3.2m、東壁長2.5m、西壁長3.1mと不整形（台形状）のプランを呈し、北壁のほぼ中心部にカマドの残骸が検出された。遺構の歪みは、この周辺も剥土しすぎているため遺構が重複していたのを同時に掘りすぎた可能性はある。しかし検出時に遺構内の埋土に異なる部分があったのか否か、思慮が不足しすぎていたかも知れない。床面の踏みしめによる汚れは、中心付近と南西壁側が顕著であった。SC91・92を切るが、出土遺物で図示できるものはなかった。

SC87 (PL. 9) 調査南東隅で検出。SC89を切って、遺構の1/2以上が調査区外へと続く。北壁側は4.1mの長さで、西壁側は4.1mを測る。カマドが西壁に位置することから、カマドが壁の中心部に構築されていたなら、西壁は5.1m前後となり、4.1m×5.1mの寸づまりの長方形プランを呈していたと推測される。カマドの上層は、灰白色の砂質土が熱変化により、かなり固く焼けていたが、本来の形状を保っているとは考え難かった。カマド内部の支脚に使用された石や土器も抜きとられていて、天井部や袖部であったものが拡がって堆積していた。南北袖の基底面は、若干の灰混りの粘土が使用されて、その上に粘質土を積みあげて構築されていた。しかし南壁のこの基底面より上層は、前述の様に破壊されて袖の規模は明確にならない。また基底面の中心よりやや南より15cm×7cmの楕円形の火床を検出。火床は厚さ5cm程度熱変化し、かなり固かった。床面は、カマドの東側付近に硬化面が確認された。これは重複するSC89に起因するかも知れない。主柱穴は北壁側の2本が確定できるので、カマドを中心とした4本柱を考えておきたい。先に推定した住居跡の規模については、今回の調査区内で西壁側に構築されたカマドをもつ住居跡の大きさに、ほぼ一致する事から妥当であると思われる。遺物はFig. 39-263～267を掲載しているが、SC87に確実に伴うのは266だけで、他はSC89のものと判断してよいと思われる。

SC88 南東端で検出。剥土しすぎているため、全容はつかめない。Fig. 39-268に掲載のふいご羽口が立脚して検出された。残存長10.5cm、内孔径2.4cmを測る羽口で、色調橙色（7.5YR 7/6）と明黄褐色（10YR 7/4）を呈し、焼成は普通で胎土に0.5～2mmの砂粒とウンモを含んでいる。羽口自体は非常に脆く、取りあげも容易ではなかった。羽口の先端付近には若干の鉄滓が付着している。さらには部分的に熱を受け焼けた痕跡が遺存する。体部は工具によるナデ調整によって仕上げられている。羽口が出土したことから周辺の土層の精査・観察を行なったが、土層の中に製鉄炉を示唆する遺構の検出はできなかった。また羽口の立脚する床面も精査したが、火床や鉄滓などは検出されなかった。土層観察の中では、カマドの存在が示唆されたため、この羽口はカマドの支脚として再利用されたものと判断した。

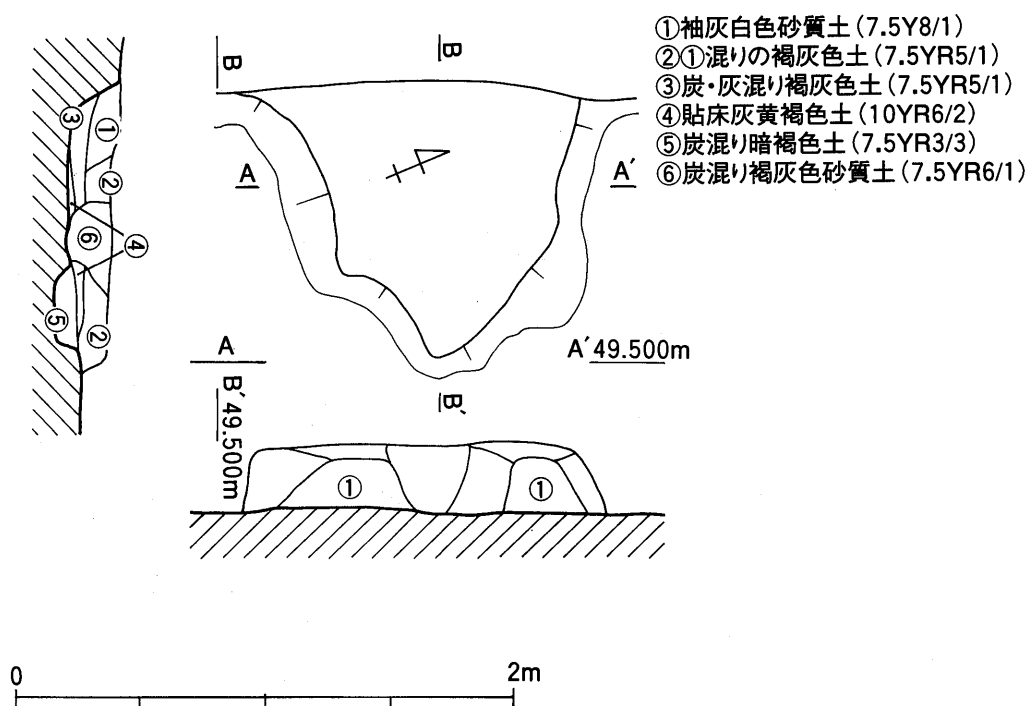
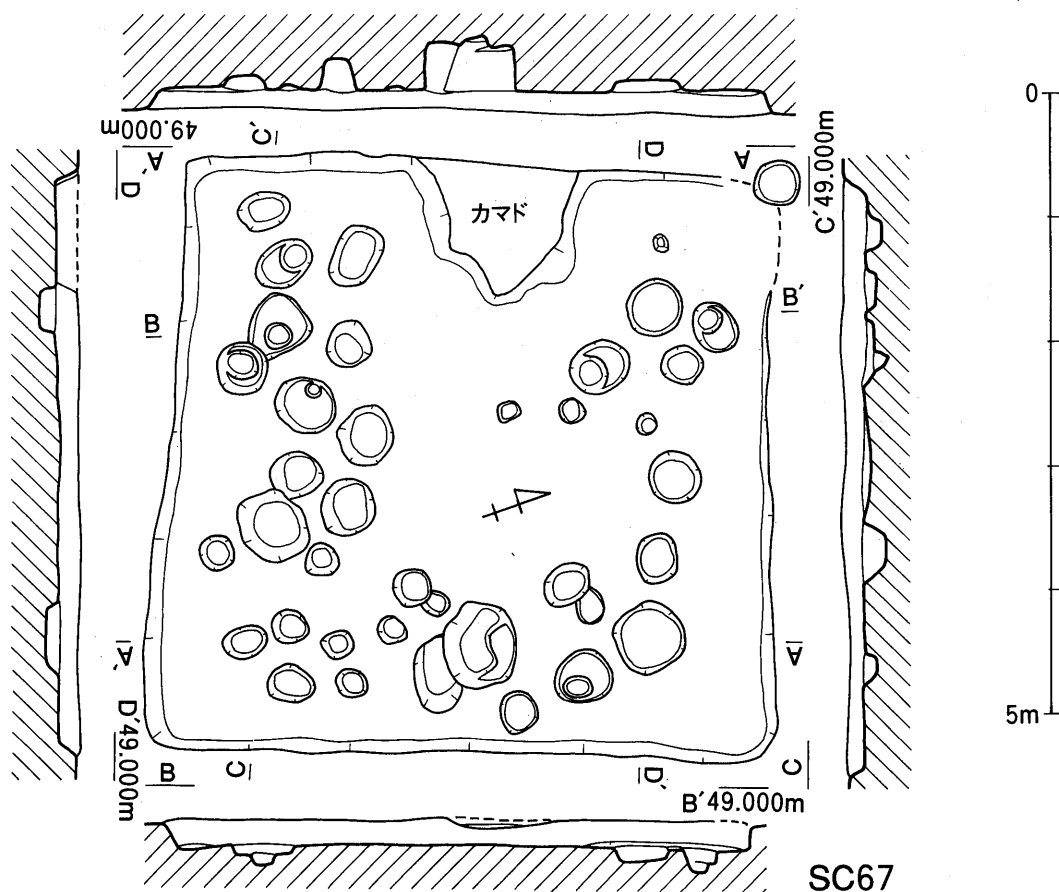


Fig.32 SC67およびカマド実測図 (S1/60・1/30)

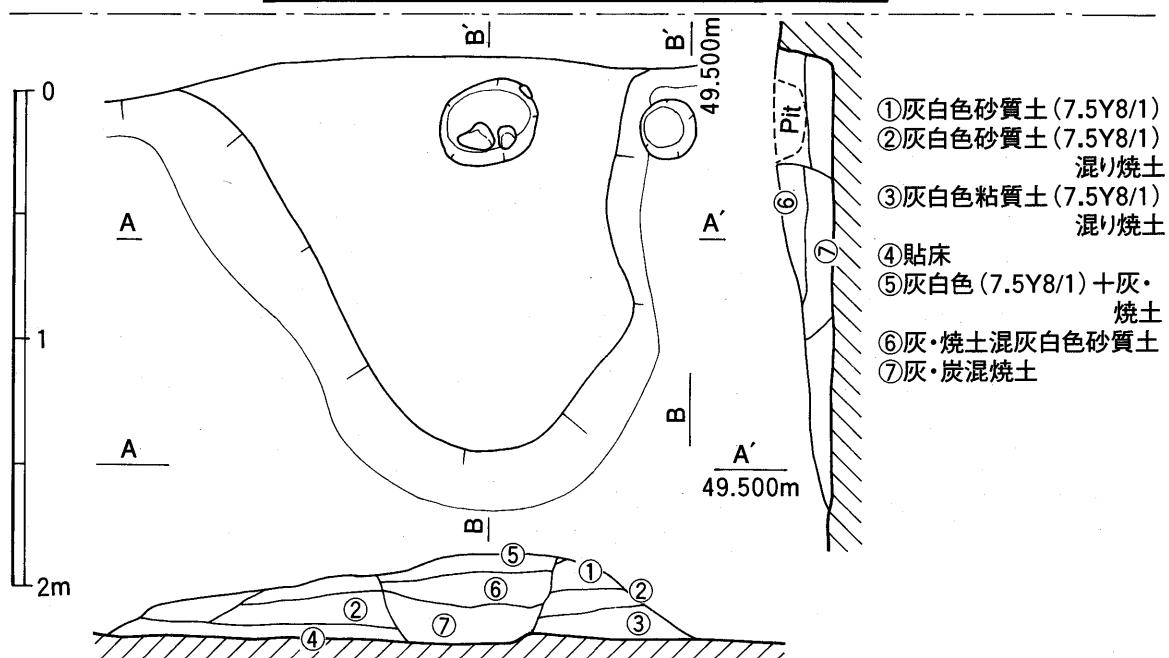
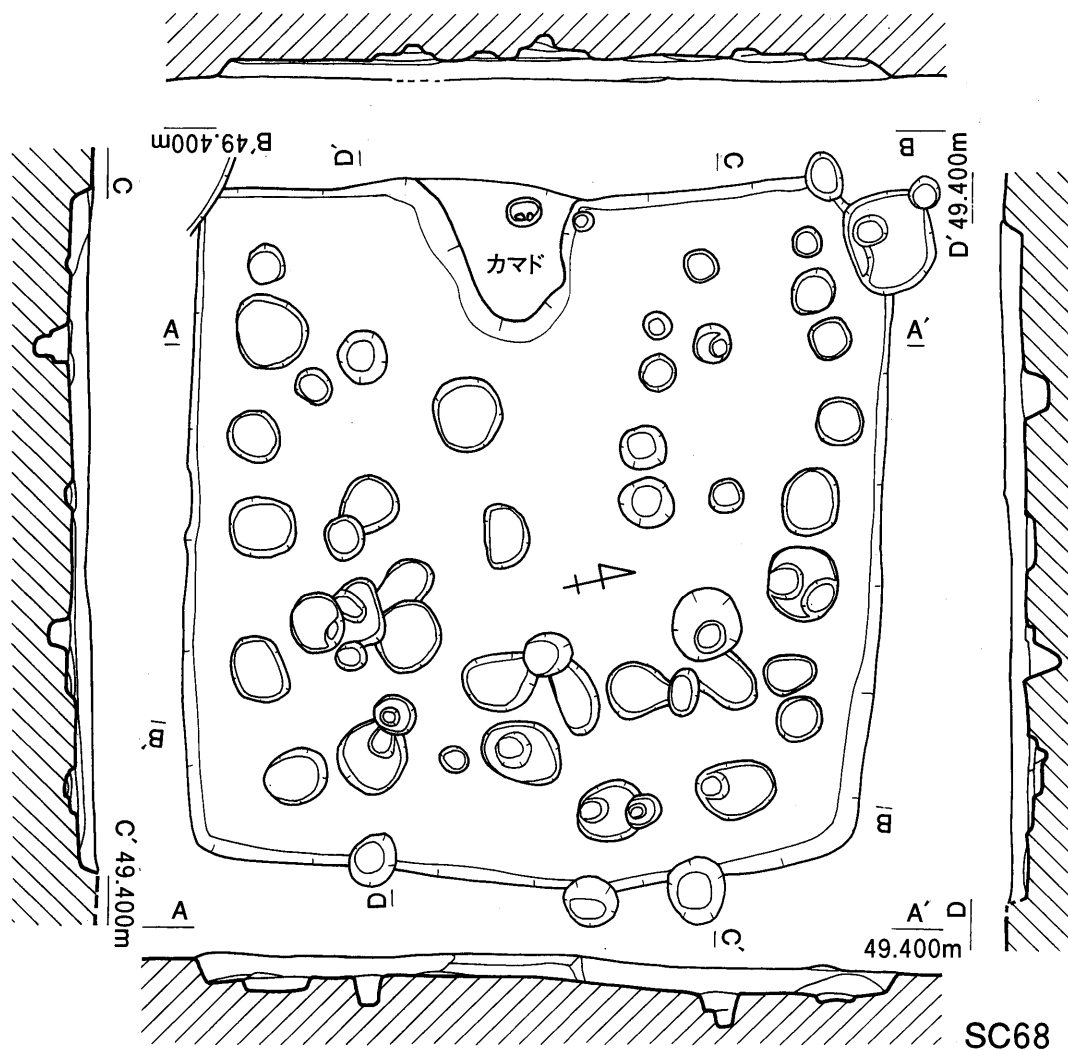


Fig.33 SC68およびカマド実測図 (S1/60・1/30)

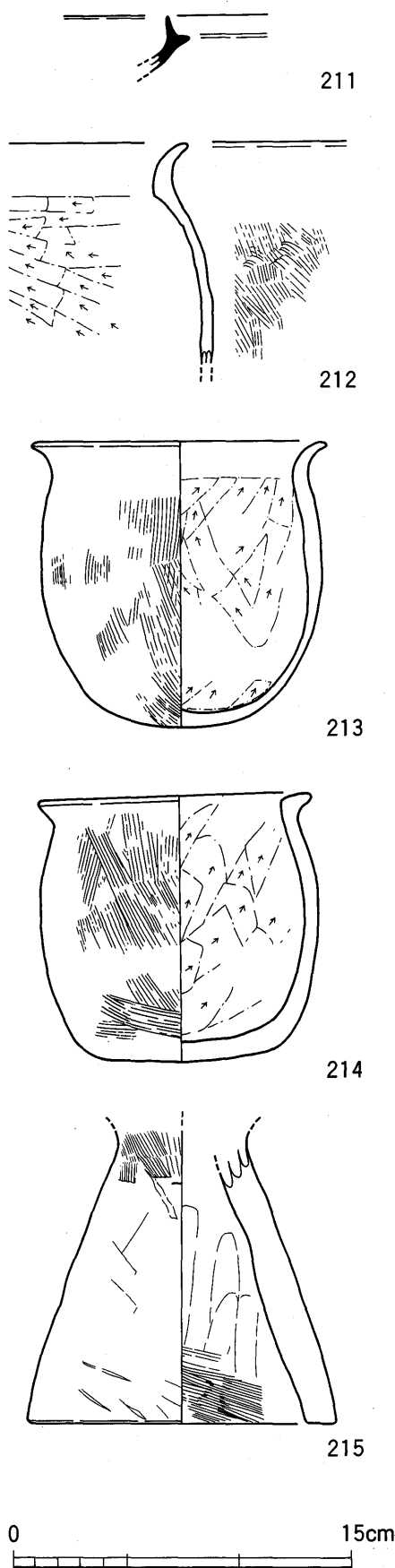


Fig. 34 SC67・68出土遺物実測図
(S1/3)

SC89 (Fig.36) SC87に切られ、南東コーナー付近が未調査区へと続く。東・西壁長2.7m前後、南・北壁長3.8m前後のすづまりの長方形プランを呈すと考えられる。カマドは北壁の中心付近に構築。カマドの中心から前庭部にかけては、SC87によって破壊されている。床面検出時に西壁側に長さ70cm、幅15cm前後の柱状の花崗岩が出土。この石は、カマドの支脚であった可能性をもつ。しかし、石材には極度の熱変化は認められなかった。床面の深さは、全体的に15cm前後となり、カマド前庭部（住居跡の中心部）が硬化していた。主柱穴は、北壁側がカマドを中心に2本の Pit を想定、南壁側も同様に2本の Pit を想定し、4本柱とした。やや柱穴間の長さが広いのが気になるが、SC87の下から検出された Pit や4本の Pit の形状・規模などからして4本柱と判断した。遺物は Fig.37-251-260までが図示できた。この中には Pit 出土のものも含まれているため、SC87で述べたように、直接的に住居跡に伴わないものもあると考えられるが、5世紀末頃の住居跡と判断しておきたい。

SC90 Pit1338・1435に切られる。一辺が2.5m前後を測る不整方形のプランをなす。住居跡内部には炉跡やカマドは検出されなかった。壁の深さは5cm前後と浅い。床面には硬化面はないが踏みしめによる汚れが全体的に確認された。主柱穴は床面の中心付近の Pit を想定し、4本柱とした。遺物は図示できるものは出土しなかった。

SC91 SC86に切られ、SC92を切る。一辺1.9m前後の方形の形状を呈す小型の住居跡。土坑とも考えられたが、後述の状況から住居跡として扱った。床面には炉跡やカマドはなく、壁の立ち上がりは20cm前後とやや深い。床面は貼り床は認められないが、中央付近がやや硬化した所があった。主柱穴は中心付近に位置する Pit を想定し、2本柱とした。出土遺物の中には図示できるものはない。

SC92 SC86・91・95に切られ、南壁側の一部と西壁を残すだけである。壁の立ち上がりの深さも5cm前後を測るだけで浅い。検出した床面上には炉跡やカマドは確認できなかった。西壁が、コーナー部分まで遺存していると考えると一辺3.3mとなり、他の南・北・東壁もこれに近い数値があてはまれば、すづまりの長方形のプランが想定できる。主柱穴についてもすづまりの長方形プランより推定されるのは、中心部付近に位置する Pit が想定でき4本柱と考えた。遺物については細片が多く出土して、図示できるものはなかった。

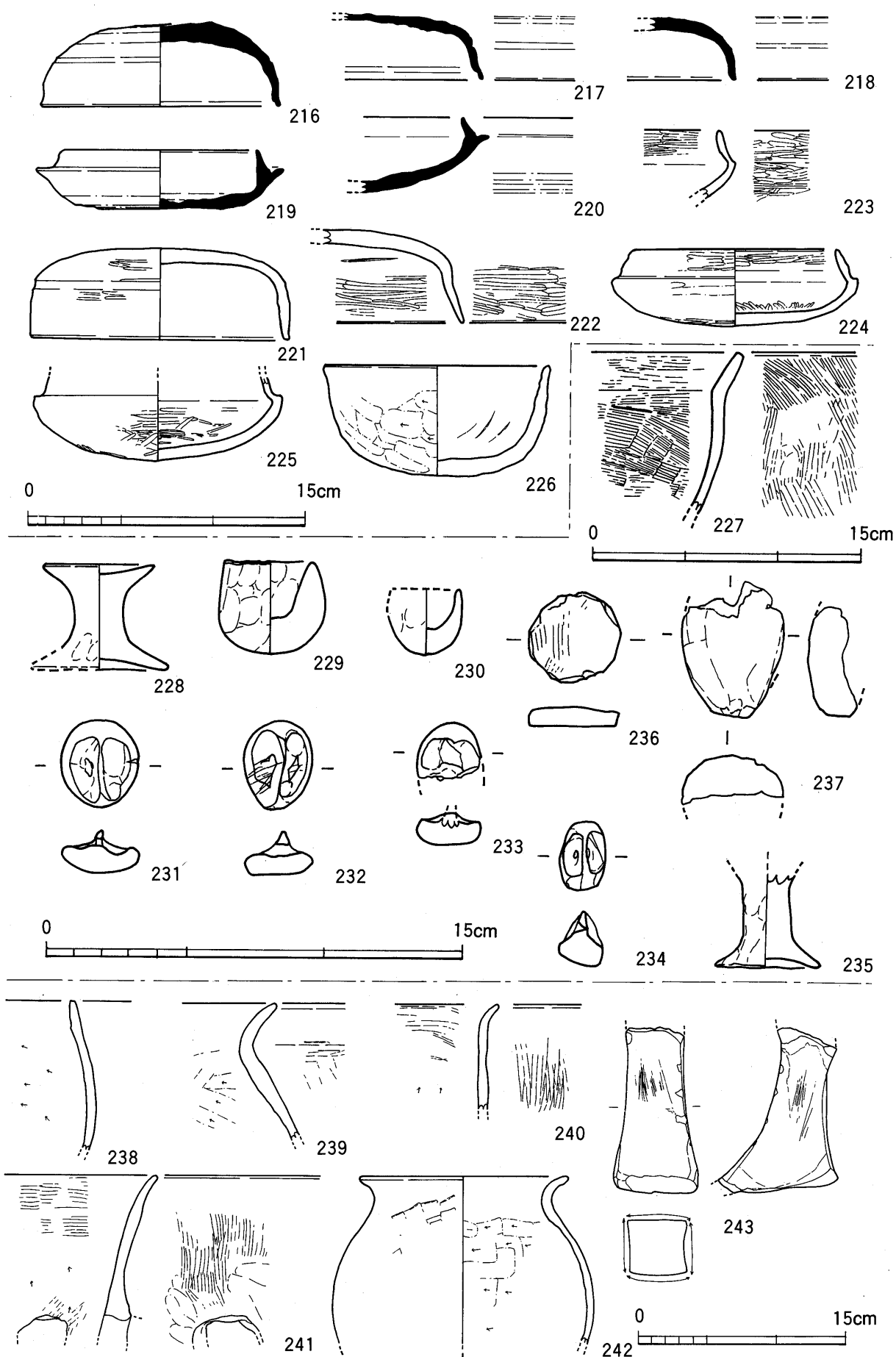


Fig.35 SC68出土遺物実測図 (S1/2・1/3・1/4)

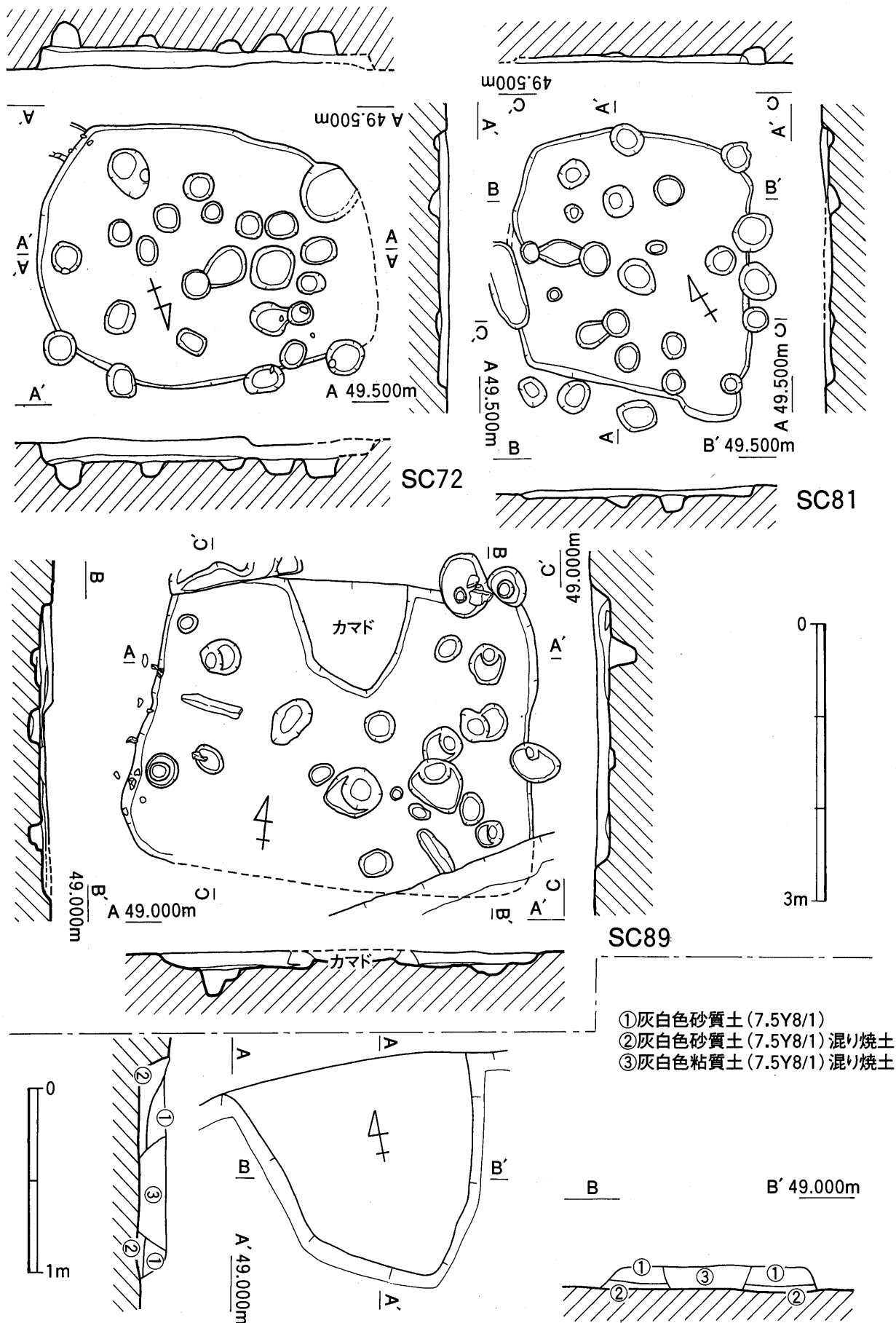


Fig. 36 SC72・81・89およびSC89カマド実測図 (S 1/60・1/30)

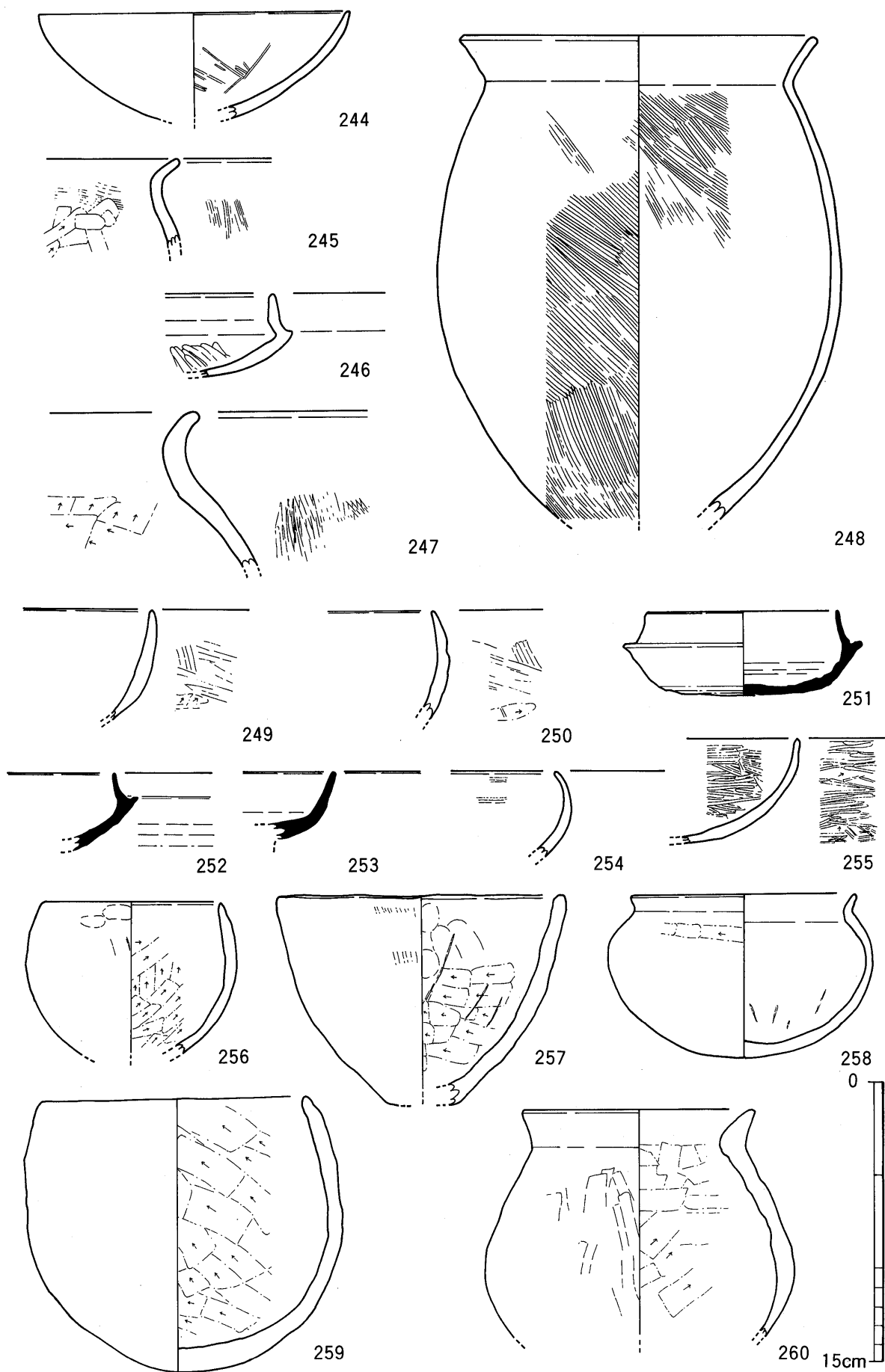
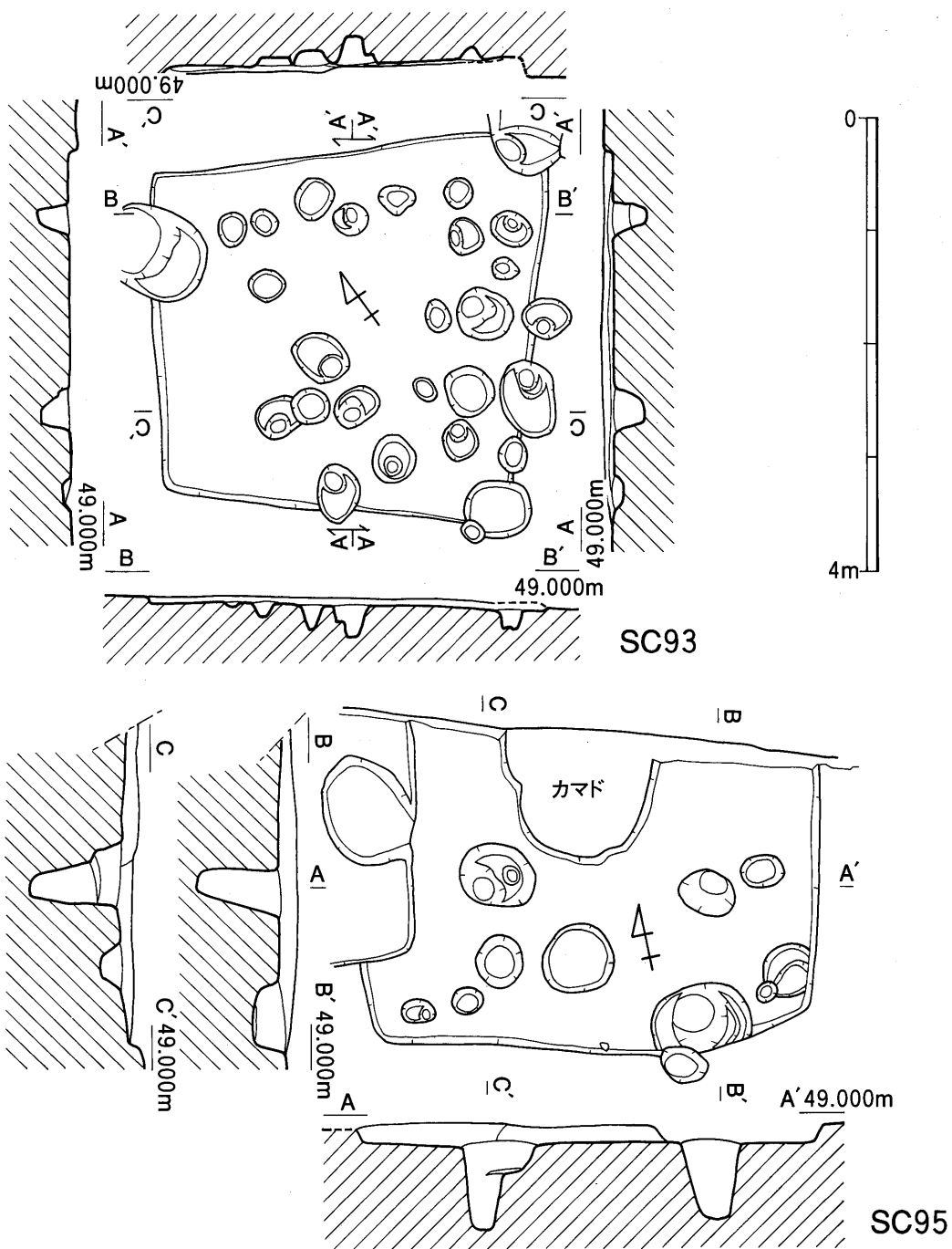


Fig.37 SC71・72・77・82・84・87・89出土遺物実測図 (S1/3)



- ①灰白色砂質土 (7.5YR8/1) 混り焼土
- ②灰白色粘質土 (7.5YR8/1) 混り焼土 (ソデ)

Fig.38 SC93・95およびSC95カマド実測図 (S1/60)

SC93 (Fig.38, PL. 9) SC86の南側に近接して位置する。北壁長3.4m、北西壁長2.7m、西壁長2.9m、東壁長 $1.3 + \alpha$ mを測る不整形形のプランをなす。床面の西側コーナー付近に焼土があって簡易な炉跡と位置づけられる。中央部付近の床面は踏みしまりによる汚れが目立つが、全般的に踏みしまりは確認できる。壁の立ち上がりは5 cm前後の深さしかない。主柱穴は、中央付近に位置する Pit を考え 2 本柱とした。出土遺物は細片が多く、図示できたものは Fig.39-269の石器だけである。269は、凝灰岩の敲石で、表面の中央に敲打痕の浅い凹みがあり、裏面に比べると若干ながら平坦となる。また周縁部は磨石の用途として用いられたのか使用痕が確認された。このように敲石と磨石の用途をもった石器と考えておきたいが、明確な時期判定の資料はなく、切り合いからも現状では、時期が確定できない。

SC94 SC85・SX 4 に切られる。北壁長 $3.3 + \alpha$ m、東壁現存長1.5mだけしか明確でない。遺存する床面上には炉跡やカマドは確認されない。壁の立ち上がりは北壁側が5 cm前後とかなり残りは悪い。SC85で記述したように南に向って地山が下がるため、南壁の検出は不可能であり、全容を捉える事はできなかった。主柱穴も 2 本ないし 4 本柱の可能性をもつとしておきたい。

SC95 (Fig.38) 北壁長 4 m、南壁長3.7m前後、東・西壁長2.5m前後の不整形長方形のプランをなす。カマドは北壁のほぼ中心部に位置して、カマドの上面を覆う灰白色砂質土混の白色粘土は、よく焼けしまっている。床面上に粘質性の土を積んで基底面を構築し、その上に砂質土混りの白色粘土を積んで、袖・天井部を構築している。このカマドも支脚が抜きとられて、半壊状態と云って良い。南側床面には踏みしまりによる硬化面が検出された。主柱穴は短軸にあたる東・西の中心に位置する Pit を想定し、2 本柱とした。遺物は Fig.39-270~273が出土した。

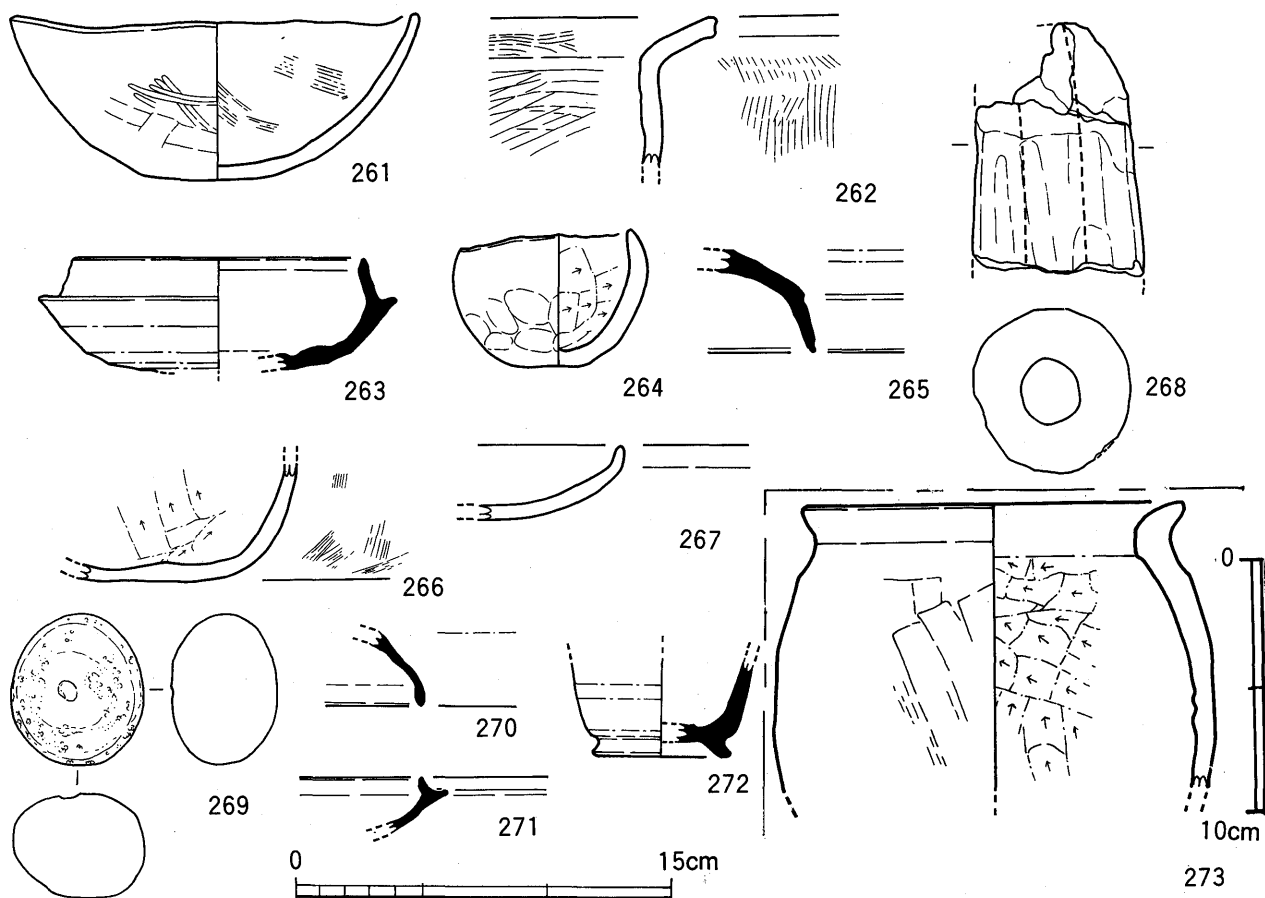


Fig.39 SC84・85・87・88・93・95出土遺物実測図 (S1/2・1/3)

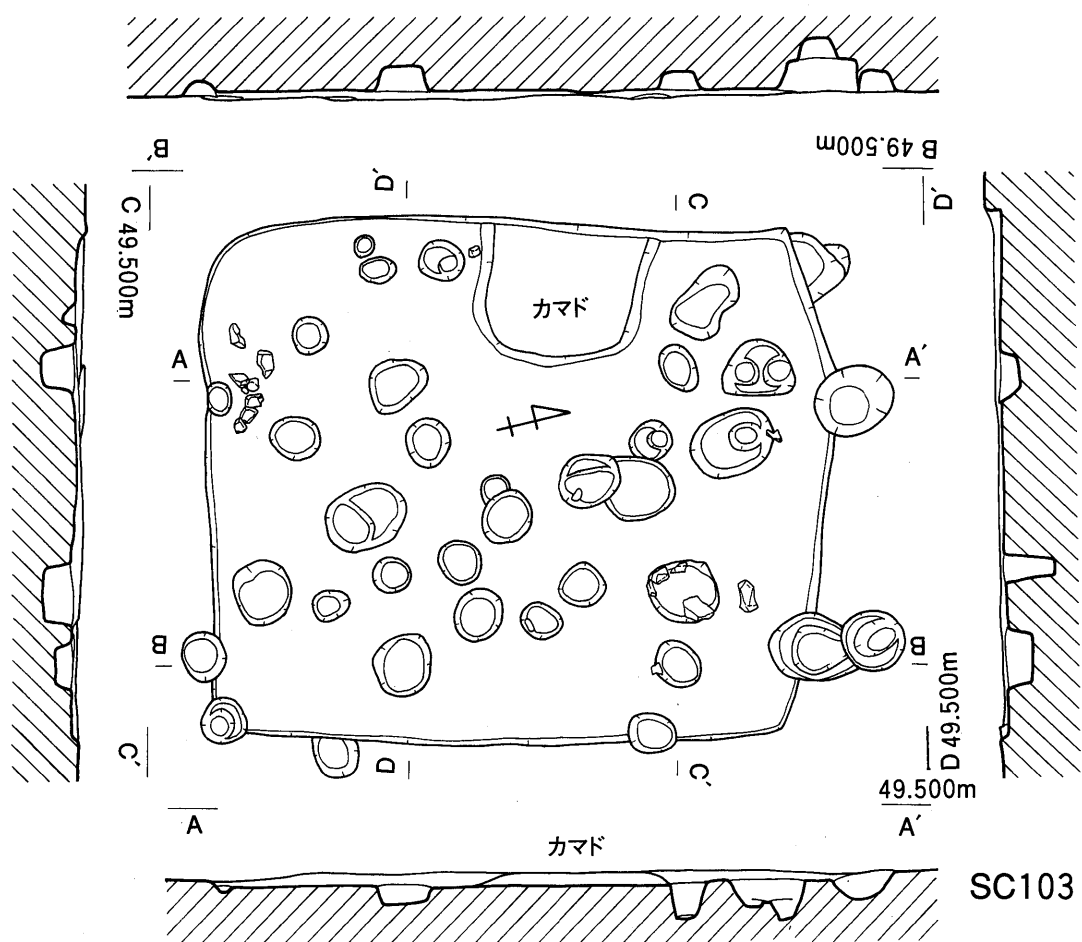
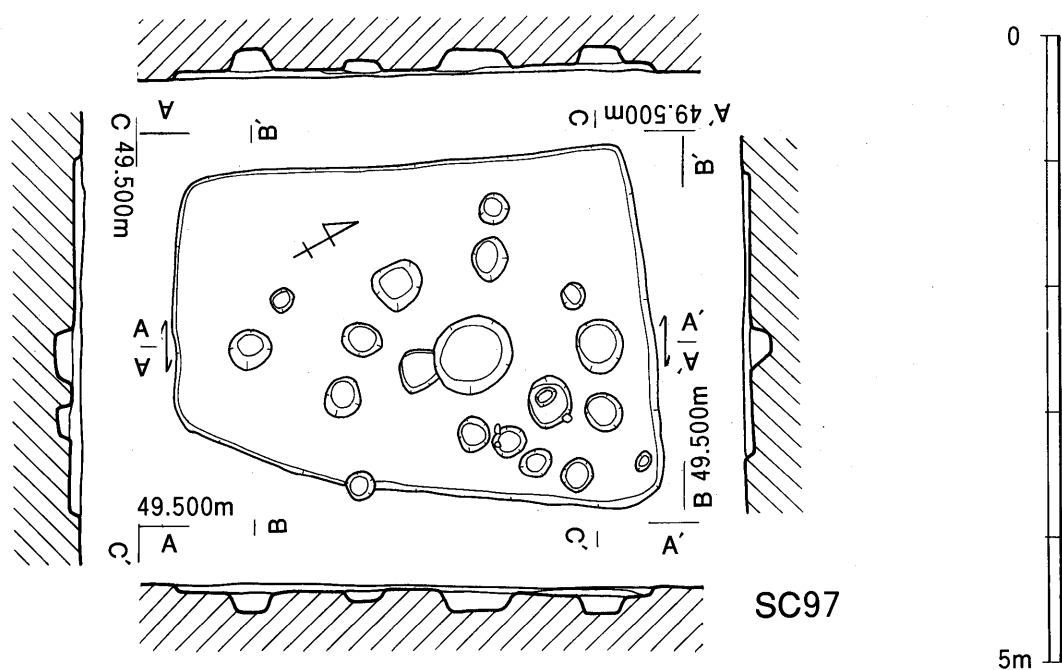


Fig.40 SC97・103実測図 (S1/60)

SC96 (PL. 9) SC99・574・581を切って、Pit1745・1751に切られる。深さが10cm 前後と浅いため、次年度の剥土の段階で下げ過ぎて、北壁側が検出できていない。現存長は、南壁2.4m、西壁2.1+ α m、東壁1.5+ α mとなる。同様な遺構から推測するとやや寸づまりな長方形プランを呈していたと考えられる。図面上ではSC581と同一住居跡かのように見えるが、南東コーナーから、北へ1.5mの所で壁の延びと埋土の状況・床面の深さに変化があり、別遺構とした。中央 Pit 付近に踏みしめによる汚れが顕著に確認される。遺物は少量しか出土しなかった。Fig. 41-274の甕の口縁部を図示した。胎土に微砂粒とウンモを含んで焼成は普通で、色調は内外ともに、にぶい橙色(7.5YR 7/4)をなす。口縁内面の調整はハケメ、外面はハケメ後ナデ仕上げ、胴部外面ハケメ、内面ハケメ後ナデによる仕上げ。

SC97 (Fig.40, PL. 9) SC98・127を切る。北西壁長が3.3m、北壁長2.7m、東壁長3.7m、南壁1.9mの長さを測る不整長方形の形状をなす。壁の遺存は悪く5 cm前後しかない。床面の中心部に炉跡らしい焼土が確認できたが、極度の比熱は受けていない。北東コーナー付近が踏みしめによるものか、他の床面に比べ硬化と汚れが顕著である。主柱穴は南・北の短軸に近く位置する Pit を想定し、2本柱とした。Fig.41-277・278が図示できた遺物である。

SC98 SC97・127に切られ、SC126を切る長方形プランを呈す。壁の立ち上がりは、15cm前後を測り、深い方に分けられる。床面には踏みしめによる汚れや踏みしまりは、さほど認められない。主柱穴は4隅に近い Pit を考え、4本柱とした。図示できる遺物の出土はなかった。

SC99 SC96に切られ、SC100を切る。壁の立ち上がりが明確に捉えられるのは南壁の一部と東壁の一部だけで、残りの部分を検出できなかったため、詳細な全容を明確にすることは、できない。現存の床面上には炉・カマドは認められなかった。遺物も細片のため図示できるものはなかった。

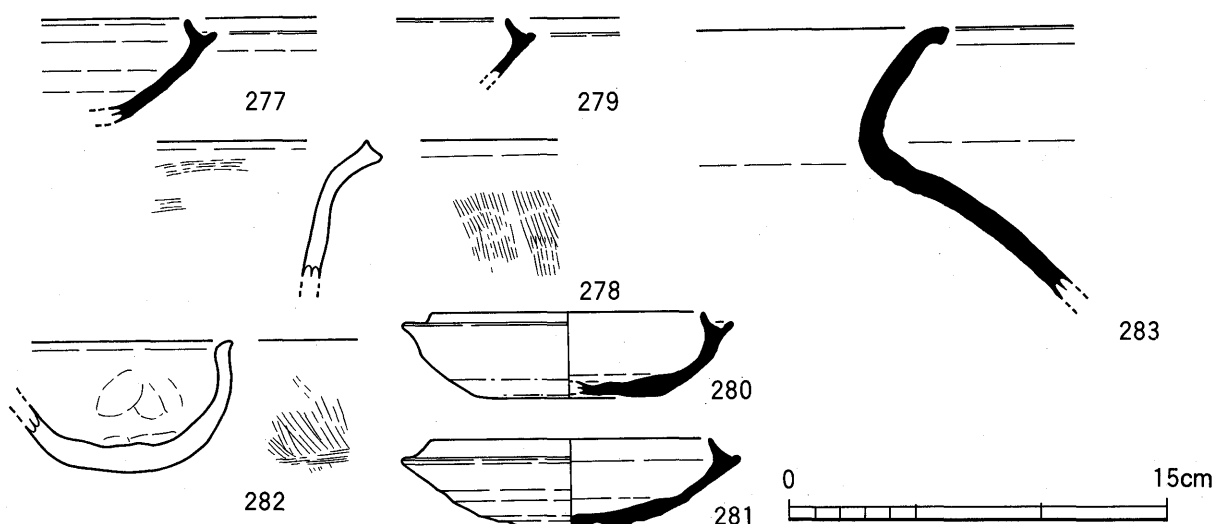
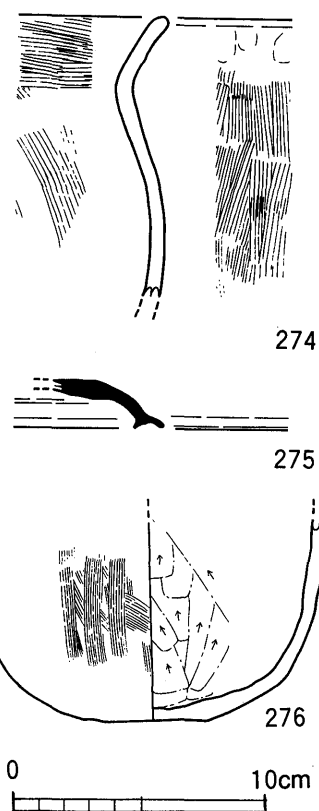


Fig.41 SC96・97・100・103出土遺物実測図 (S1/3)

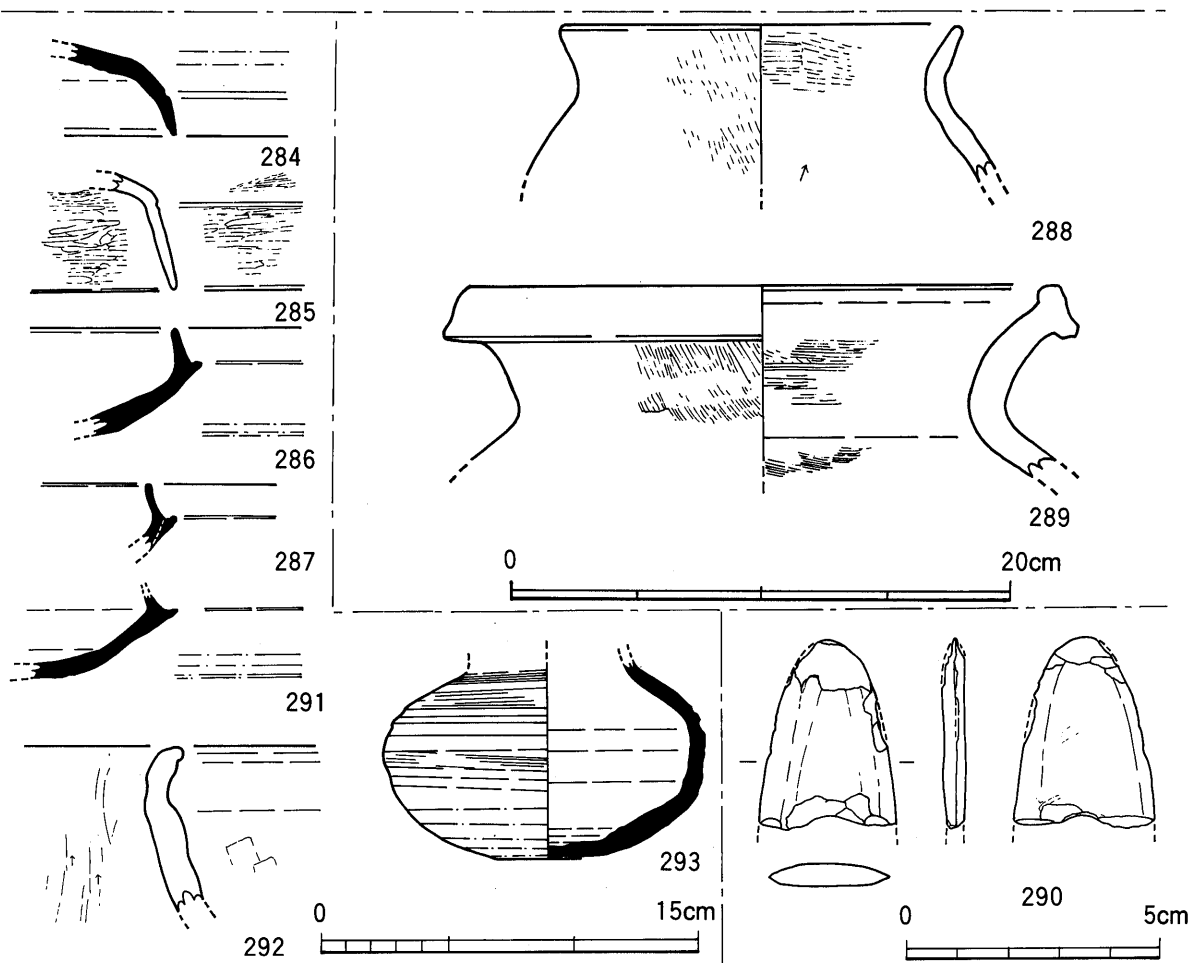
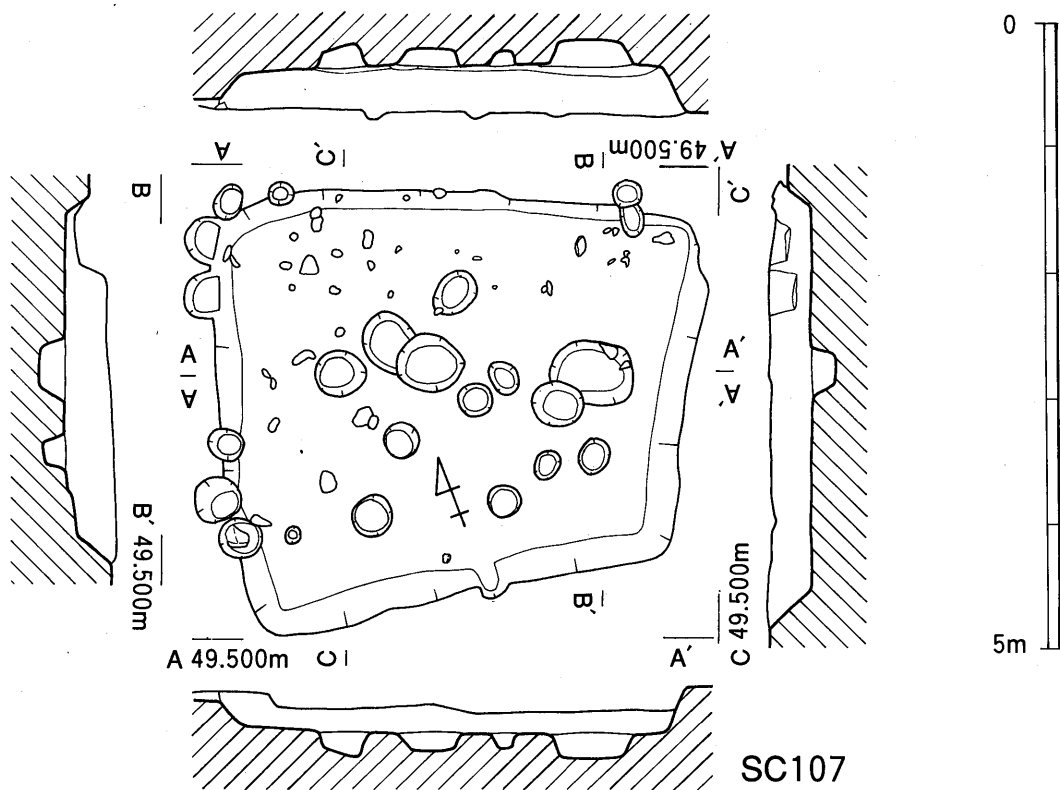


Fig.42 SC107実測図およびSC105・107・108出土遺物実測図 (S1/60・1/3・2/3)

SC100 SC104を切って、SC96・99に切られる。南壁長4 m前後、西壁 $2.2 + \alpha$ m、東壁長3.4 mが明確に検出できた壁で、調査区内の検出例から寸づまりの長方形プランをなすと考えられる。カマドは西壁のほぼ中心部にあたる位置に構築されている。カマドを覆う上面の灰白色砂質土は極度の比熱は受けていず、若干脆い。構築は、床面（地山）の上に7 cm前後の粘質土を積んで袖の基底面を築き、その上面に粘土混りの砂質土を積んでいる。このカマドも支脚に使用された石材、土器などは抜かれていて出土しない。焚口付近に25 cm × 20 cmの楕円形の火床があって、比熱している部分は4～5 cmの厚みをもつ。また火床の下層に、80 cm × 35 cmの楕円形を呈する Pit が検出されたが、埋土には、炭や焼土など含まず直接的には、SC100とは関係なく、SC104に伴う Pit と判断された。主柱穴は、形状・規模などから4本柱を想定した。壁の立ち上がりは15 cm前後が遺存、調査区の中では良い方に分類できる。出土した遺物は細片が多く、図示できたのは Fig. 41-275・276である。276はカマドの中心付近に炭混りの焼土などと、いっしょに出土した。

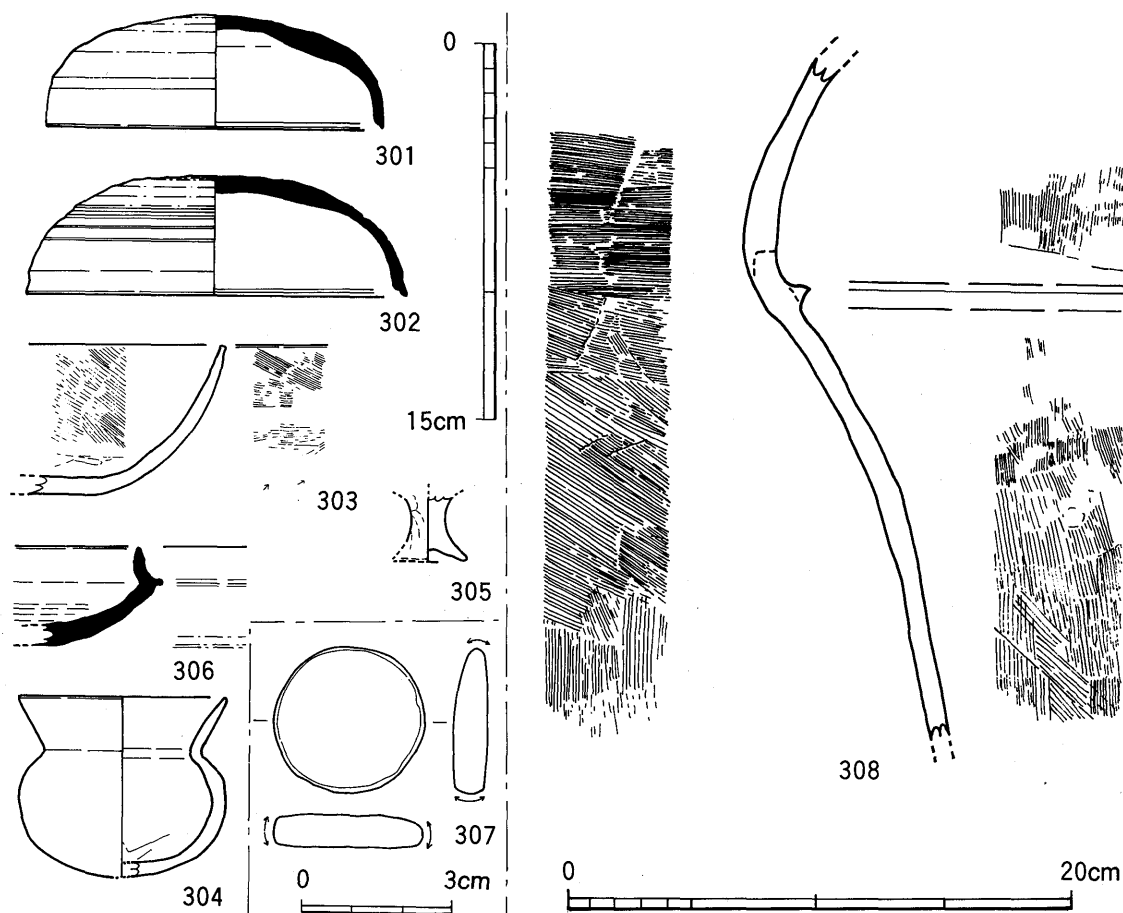
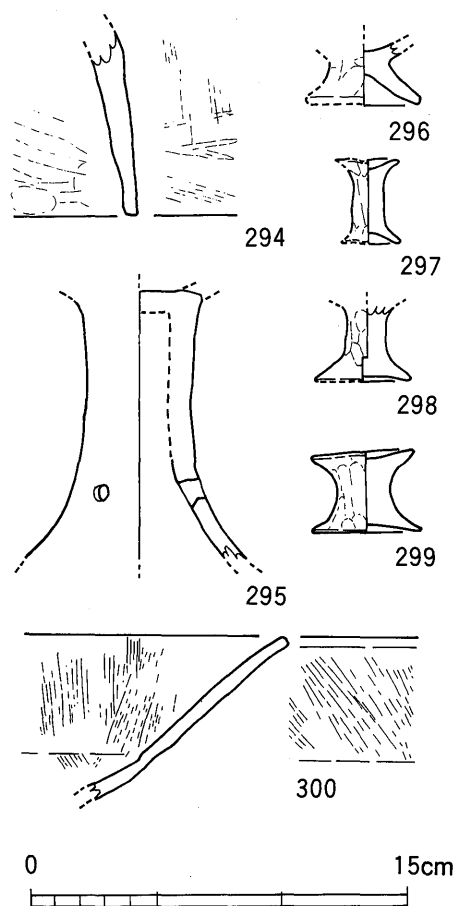


Fig. 43 SC109・110・112・113・117出土遺物実測図 (S1/3・2/3)

SC101 (PL.10) 北西壁の一部と西壁だけが検出。壁の遺存も悪く、清掃作業で失われる程度しかない。現存長は西壁が2.5m、北東壁1.8+ α mを測るが、詳細は不明。床面には炉跡やカマドは確認されず、踏みしめによる汚れも目立たない。主柱穴は推定の規模からすると4本柱が妥当かとも考えたが、現状では3本しか確認できないため、北西側と東側壁近くに位置する Pit を想定し、2本柱とした。出土遺物は、図示できるものはなかった。

SC102 (PL.10) SC101と向きあうように検出。東壁と北東コーナー部および南壁の一部しか遺存していない。東壁長3.6m、北壁長1.2+ α m、南壁長1.7+ α mを測り、壁の立ち上がりが5 cm前後と残りは悪い。周辺域の遺構の状況から推測するならば、一辺3.6m前後の方形もしくはすづまりの長方形の可能性をもつ。床面にはSC101と同様に炉跡やカマドは確認されない。床面は東壁側が踏みしめによる汚れは顕著である。主柱穴は規模・形状などを考慮すると2本柱とした方がよいと思われる。遺物は弥生時代中期のミニチュア甕が出土している。

SC103 (Fig.40, PL.10) 北壁長3.8m、南壁長3.5m、西壁長4.3m、東壁長4.2mを測るすづまりの長方形の形状を呈す。カマドは西壁側の中心より、やや北に寄って構築されている。カマド本体の遺存は悪く、熱変色し白灰色の砂質土もしくは粘土層は、皆無の状態に僅かな炭混りの焼土層があるだけで、カマドとして認識してよいか否か、かなり躊躇した。土層立ち割りの結果床面（地山）上に10cm前後の粘質土を積んで、袖の基底面を構築。その上の積み土の状況は現状では確認できない。支脚には、長さ37cm、幅15cm前後、厚さ2～3cmの扁平な柱状の花崗岩を使用している。支脚は、床面（地山）より25cm程度、深く埋めこんで粘質土の土で固定させて、上部12cm程度を受けとしていた。その上部の12cm位は、比熱による変化を顕著に示す。現状では火床など検出は、できなかった。

床面の中央付近と東壁の中心部は、踏みしめによる汚れなどが目立つ。この東壁の中心部付近が入口であったことも考えられる。主柱穴は、形状・規模・深さなどを考慮し、中央付近の4本を想定した。柱心心間は2.1m前後を測る。遺物は細片が多かったため、図示できたのは Fig.41-279～283だけである。カマドから出土したのは280と283で、この住居跡の時期を7世紀前半代と考えた。

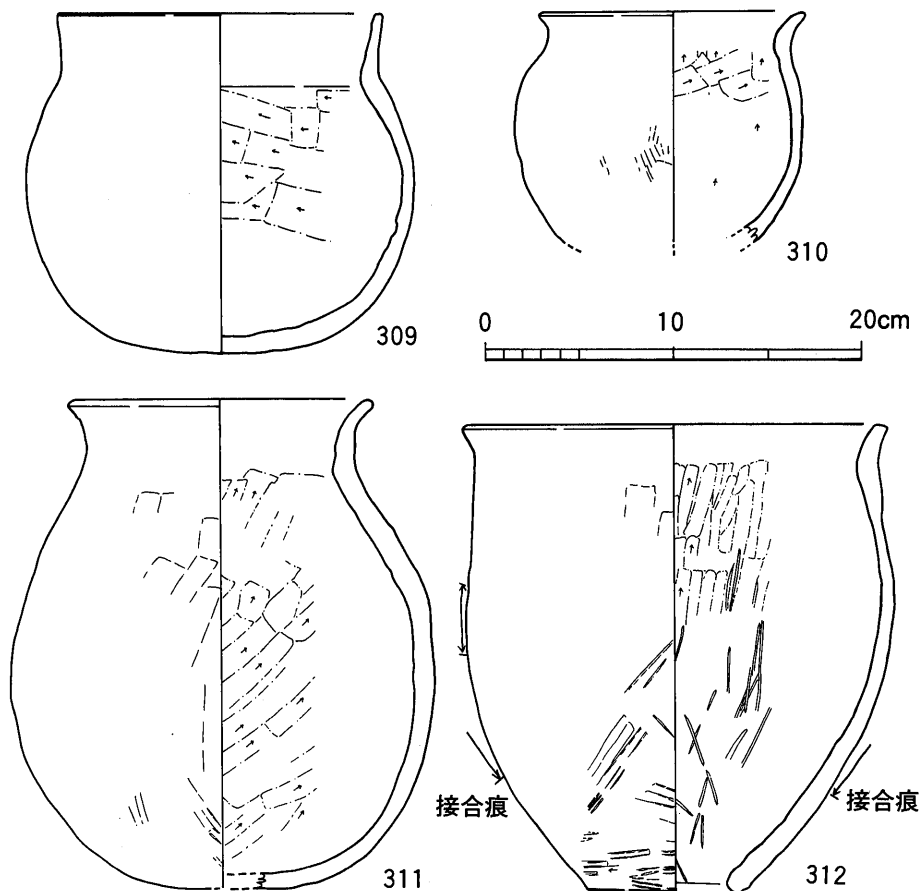


Fig.44 SC117出土遺物実測図 (S1/4)

SC104 SC100に切られる。南壁長3.2mを測り、現状では全容は不明。遺物も図示できるものの出土はない。

SC105 (PL.12) SC103の東側に近接して位置。北壁長2.8m、西壁長2.8m、東壁長2.2m、南壁長2.7mを測る不整形の形状をなす。壁の立ち上がりは15cm程で、床面には炉跡やカマドも検出されない。主柱穴は南北壁のほぼ中央に位置する Pit で考え、2本柱とした。Fig.42-284・285が図示できた遺物である。

SC106 南・北壁長2.6m、東・西壁長2.5mの寸づまりの長方形プランを呈す。床面には、カマドや炉跡は検出されない。西側の床面に踏みしめによる汚れが僅かに認められる。主柱穴は、北壁近くの Pit が考えられるが中軸線になく、不明とした。

SC107 (Fig.42) SC34・50・76に切られる。北壁長3.7m、西・南壁長3.3m、東壁2.7mの長さを測る。床面の中心付近に炉跡があり、主柱穴は、東・西の中央に位置する Pit を考え、2本柱とした。遺物は Fig.42-286~290が図示できた。

SC108 (PL.10) SC30に切られて、一辺2.1m前後の不整形プランをなす。床面には炉跡などなく、主柱穴は2本と考えられる。図示できた遺物は Fig.42-291~293。

SC109 SC27・32・33・40・49に切られる。西壁長5.3m、南壁長 $3.9 + \alpha$ m、北壁長 $2.8 + \alpha$ mを測り、東壁側は不明。カマドは西壁の中心より僅かに南によって構築。炭混りの焼土層だけが検出され、カマド本体の残りは悪い。主柱穴は4本柱と考えた。カマド前面の床面中央付近に貼り床があり、やや硬化している。壁の立ち上がりは、14cm前後を測り、残りは良い。遺物はあまり多く出土しなかったが、Fig.43-301~303が図示できた。

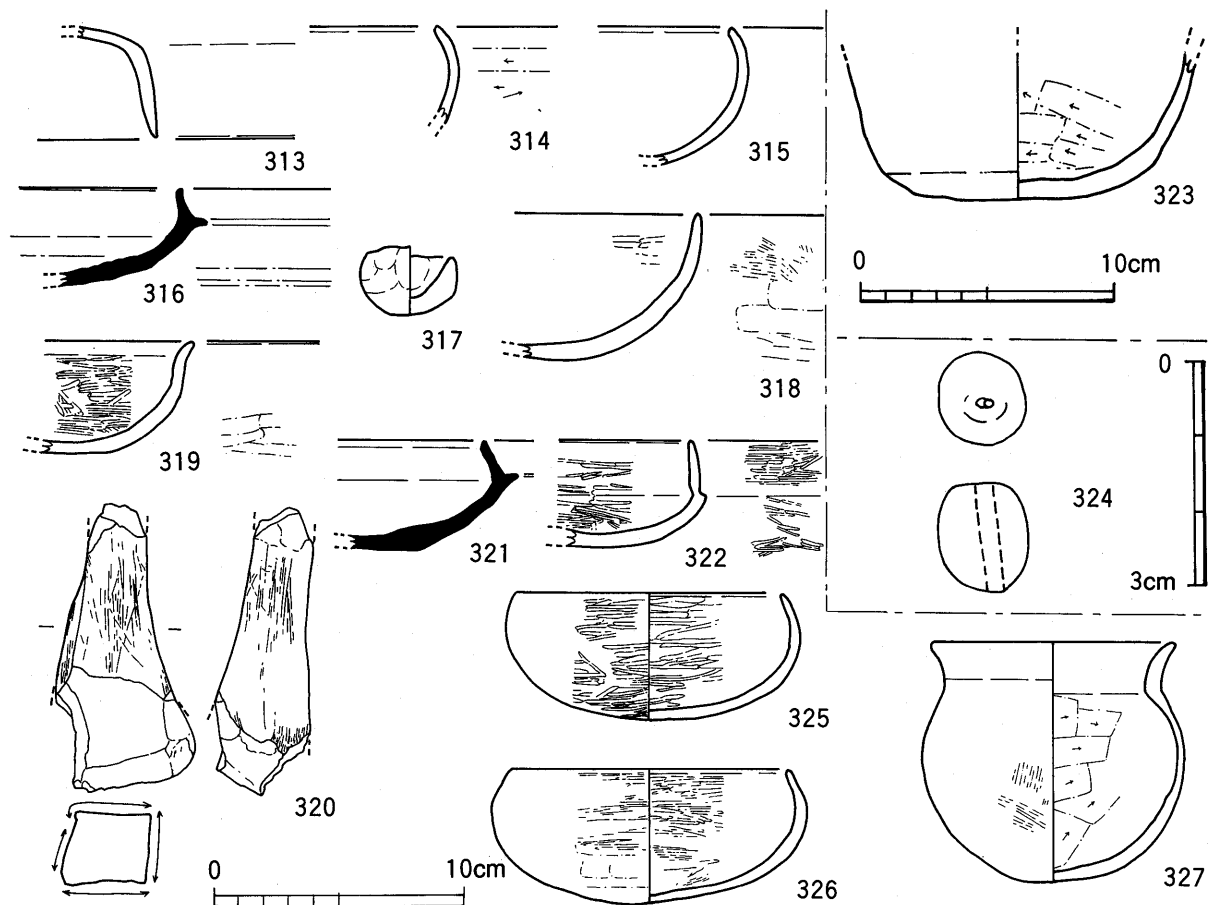


Fig.45 SC122・123・126・129・133出土遺物実測図 (S1/1・1/3)

SC110 SC36・SK33に切られ、SC111を切る。東・南壁と西壁の一部のみが遺存し、不整長方形をなす。壁の立ち上がり20cm前後を測る。遺物は Fig. 43-304だけが図示できた。

SC111 SC36・37・110・SK33に切られるため、詳細は不明だが遺存する西壁から推測すると、一辺が2 m前後の小型の住居跡の可能性が考えられる。出土遺物で図示できるものはない。

SC112 SC20・63・115に切られ、SC113を切って西側部分は未調査区へと延びる。全容は不明。遺物は Fig. 43-294～300までが図示できた。

SC113 SC112に切られ、SK112を切る。西壁側は未調査区へと続き、4本柱の可能性が考えられる。出土遺物は少量で Fig. 43-305だけが図示できた。

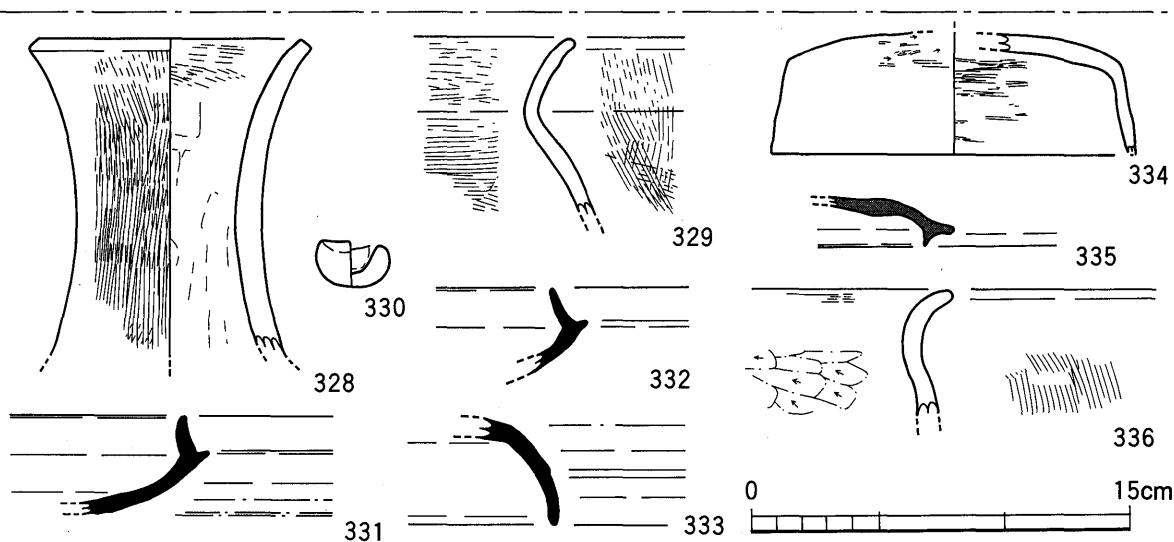
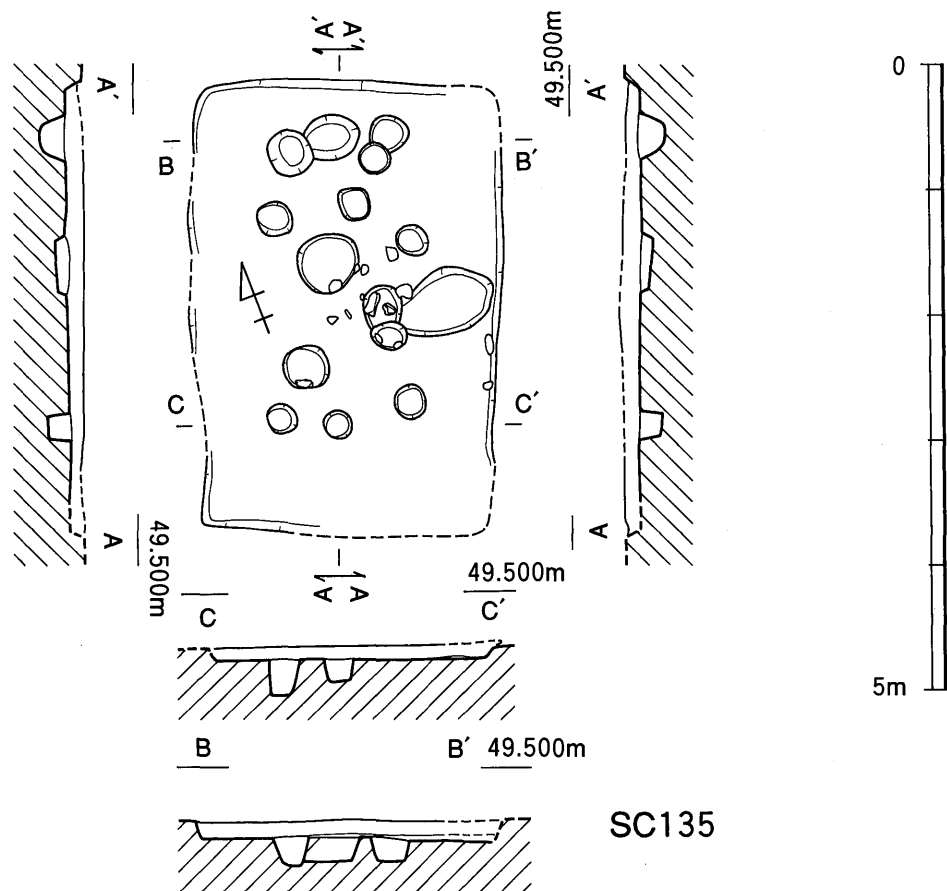


Fig. 46 SC135実測図およびSC135・136出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

SC114 SC13・14に切られる。壁は西壁の一部2 m程度しか遺らないため形状・規模ともに不明。床面はSC14の床面から10cm 前後下がり、かなりの硬化をみせる。遺物は細片が多かった。

SC115 SC112を切って、3/4以上が未調査区へと延びて、4本柱と考えられる。形状は方形もしくは、寸づまりの長方形と考えられる。

SC116 SC59・81に切られる。重複が激しいため、北壁の一部を遺すだけで全容は不明。

SC117 SC17と試掘トレンチに切られ、大半を失うため全容は不明。

SC118 SC17・117と試掘トレンチに切られ、北西コーナー付近しか壁が遺存しない。全容は不明。主柱穴は周辺の遺構から勘案して、2本柱としておきたい。

SC119 SC81に切られSC116を切る。形状は、長軸3.2～3 m、短軸2.2m を測る不整長方形の形状を呈する。深さは20cm 前後を測り、底面は北側部分の汚れが目立つ。主柱穴は、中央付近のPit を考慮し、2本柱としておきたい。

SC120 SC15・59に切られ、2/3以上が西側の未調査区へと続く。深さ17cm 前後を測り、遺存部内にはカマドや炉跡は確認できない。現況では2本の主柱穴が明確であり、未調査区へ続くことを考慮すれば4本柱と推測できる。底面の踏みしめは主柱穴の周辺が顕著である。

SC122 SC13・14・114に切られて、形状・規模ともに不明。遺物はFig. 45-313～315を図示した。313は蓋、314・315は坏。いずれもローリングが著しい。

SC123 SC11・13・42に切られ、しかも未調査区へ延びるため全容は不明。遺物の出土は多かったが、図示できたのはFig. 45-316～319だけである。

SC126 SC97・98に切られる。深さ8 cm 前後と遺りの悪い住居跡である。カマドを西壁の中心部よりやや北側に配置。カマドの遺りも悪く基底面しかない。出土遺物で図示できたのはFig. 45-320・321だけである。床面は中心付近に硬化面が確認された。

SC127 SC97・98・126に切られ、北壁の一部を遺すだけで全容は不明。

SC128 SC100に切られ、SC95・575・595を切る。東壁の中心より僅かに南によってカマドを設置。南壁長3 m、東壁2.5+ α m、西壁2.8+ α m を測る。2本柱の可能性をもつ。

SC129 SC53・54・62・83に切られる。南壁の一部を遺すだけで詳細は不明。遺物はFig. 45-322～324だけが図示できた。

SC130 SC79に大半を切られ、北コーナー、東南コーナー付近しか遺らない。全容は不明。

SC131 SC1・4・82に切られ、SK110を切る。不整長方形のプランを呈す。

SC132 SC1・4に切られる。深さ5 cm 前後で遺りも悪く、規模・形状ともに不明。

SC133 SC10・12に切られ、形状・規模不明。遺物はFig. 45-325～327が図示できた。

SC134 SC10・133に切られる。詳細は不明。

SC135 (Fig. 46, PL. 12) SK29に切られる。長軸3.3m 前後、短軸2.2m 前後の長方形のプランをなす。遺物はFig. 46-328・329が図示できた。

SC136 SC41に切られ、長方形の形状と考えられる。床面には、炉やカマドはないが、踏みしめによる汚れ等から住居跡とした。遺物はFig. 46-330～336だけが図示できた。

SC137 SC126・127に切られる。カマドだけが遺り、詳細は不明。

SC138 SC83・129に切られる。東壁4 m、北壁2+ α m、南壁2.6+ α m を測るが、形状は不明。床面には炉・カマドもない。東側の床面には踏みしめによる汚れが顕著。

(5) 溝状遺構 (SD)

7年度は、24条の溝を検出した。未調査区へと続いたり、途中で切れたり調査区全域を継断・横断して走るものはなかった。

SD 1 SX 1に切られ、未調査区へ続く。幅1 m前後、深さ10cmを測る。壁の立ち上がりは直に近い。遺物は Fig. 47-337だけが図示できた。

SD 2 SC12に切られる。長さ3.3mで、ほぼ南北に走る。壁は底面から緩やかに立ち上がり幅15～40cmの段をもつ。溝の幅は0.72～1.25mで、深さ8 cmを測る。

SD 3 SD 8と切り合う。検出時には新旧関係は確認できなかった。SC10に切られる。南西から北東へ僅かに蛇行しながら7 m付近でSD 8に重複。南西部は6 cm、北東部は17cmを測る。

SD 4 Pit 319に切られ、北へ1 m向かい、東方向へ逆L字状に曲がり、2.2m直進し途切れる。溝幅は24～29cm、深さ17～19cmを測り、断面形状はU字型を呈す。遺物は細片が多く、図示できたのは Fig. 47-338の石包丁片だけである。

SD 5 SC22に切られる。SC36・37・SD11を切る。西から北方向へ屈曲して走り、幅0.47～1.3m、深さ11～24cmを測る。SD11と交差する付近で、溝幅が狭まり途切れる。

SD 6 SC39・不明遺構に切られ、幅39cm、深さ3 cmを測る。本来の長さは不明。南東から西側へ向かって走る。

SD 7 全長2.6m、幅46cm、深さ7 cmを測り、ほぼ東西に緩やかな弧を描いて走り、SC23・SK20を切って途切れる。断面形状は浅いU字状。出土遺物は細片が多く、図示できるものはなかった。

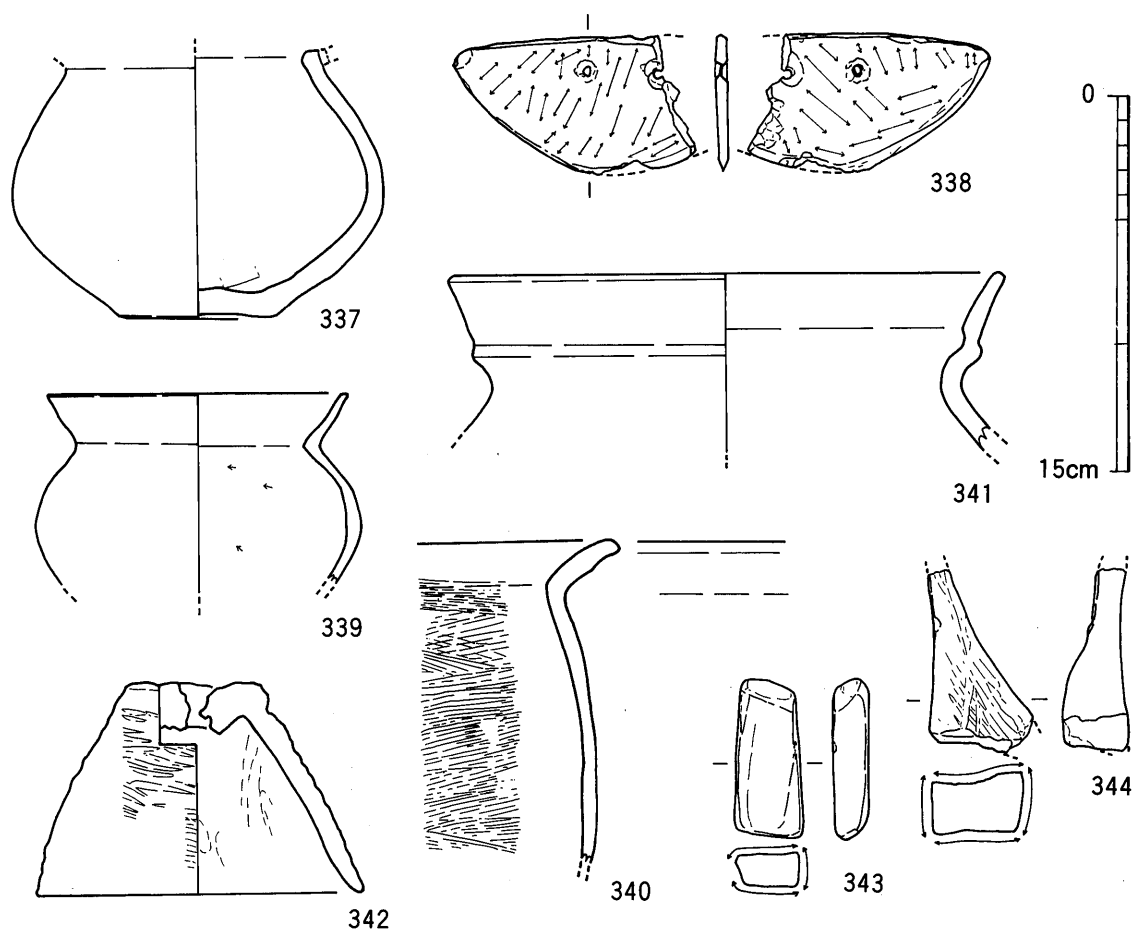


Fig. 47 SD 1・4・15・16出土遺物実測図 (S1/3)

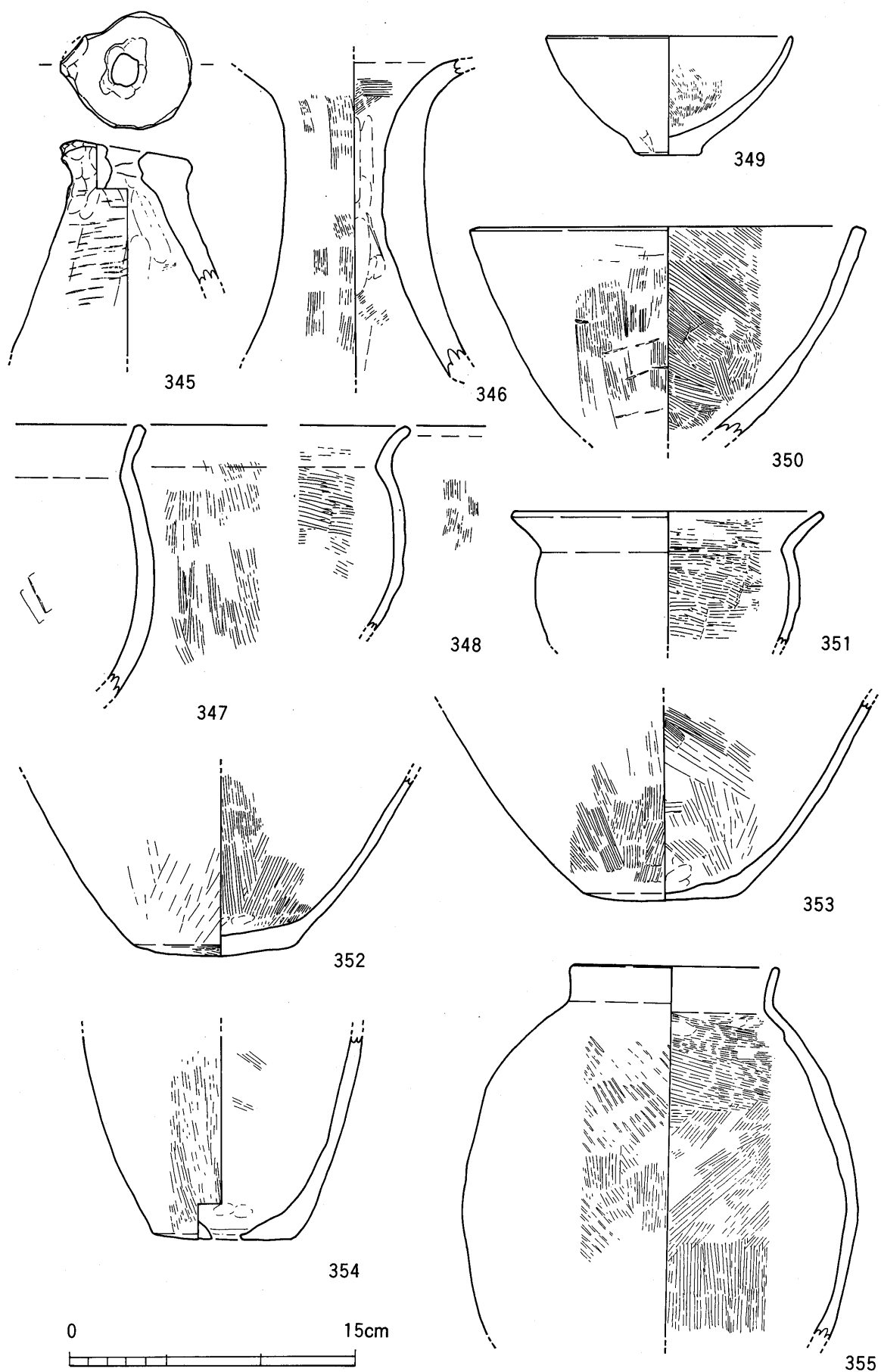
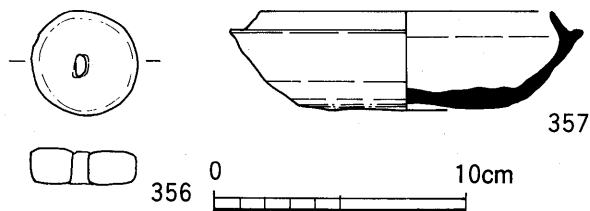


Fig.48 SD18出土遺物実測図 (S1/3)

SD 8 SD 3 を切って、Pit に切られるが、北西側は自然流路側へと向かう。溝幅は、南東側27cm、北西側45cmで深さ6～20cmとなる。



SD 9 ほぼ南北に走る溝で、SC29を切る。全長1.7mと短く、浅いU字状を呈す。

SD10 SC34・41を切ってSX11に切られる。 Fig.49 SD23出土遺物実測図 (S1/3)
南東から西へ4m程走り、それから北方向へ走り、SC34で途切れる。溝幅は南東側が30cm前後、北側75cm前後で深さは北側が深くなる。

SD11 SD 5 に切られ、SC36・37を切る。南東から北西へ蛇行しながら向かう。全長4.9m、幅34～53cm、深さ2～34cmを測り、ゆるやかなU字状の断面をなす。

SD12 北西方向から南東方向の未調査区へやや直線的に走る、現存長3.2mの溝。幅は40～73cm、深さ5～8cmを測る。

SD13 SC75を切って、北西方向から僅かに弧を描いて南の未調査区へと向かう。幅45cm前後で深さ12cmを測る、断面浅いU字状をなす溝である。

SD14 SX 4・SC94を切る。北東方向から南西へ向かう。途中 Pit に切られ、溝幅が変化するため一見すると別々の遺構と捉えられがちであるが、埋土等は同一である。

SD15 SC31・72に切られ、SD16の方向へと走る。溝と云うより地形の変換線と考えた方がよいかも知れない。遺物で図示できたのは Fig.47-339・340である。

SD16 SC21の下層面にあって、SD15と同様な捉え方が妥当性をもつ。遺物も時期的にバラつきがあり、明確な時期は不明。図示した遺物は Fig.47-341～344である。

SD17 SC 7 を切って Pit1846に切られる。浅い溝。南東から、やや直線的に北側へ向かい、Pit に切られ途切れる。

SD18 SC106に切られる。これも SD15・16と同様に地形の変換線と云えよう。全長7m前後、幅2～3.5mで、最深部0.67mの不定型な土坑状を呈し、ほぼ東西方向に向く。出土した遺物には時期差があって、この溝状遺構の時期は明確でない。図示できた遺物は Fig.48-345～355で、これ以外は細片が多かった。

SD19 市道取付部とインター本体部の接点で検出。南東部は未調査区へと続く。南東から北西方向へ走り、Pit1898に切られ北東方向へと向きをかえる。

SD20 Pit1932・1933を切って途切れる。溝幅40cm前後の土坑状を呈す。北から南東へ直線的に走り、南東部で最深部40cmを測る。出土遺物はローリングを受けた弥生期のものが多い。

SD21 Pit1875に切られ、北方向から僅かに弧を描きながら Pit2055に切られる付近から西へ向く。全長1.8m、幅90cm前後でSD18へ向って深くなる。

SD22 Pit2074・SK 4 に切られ、ほぼ南北方向に走り、自然流路へと流れる。全長2.5m、幅30cm前後を呈し、断面形状はU字型をなす。遺物は細片が多く出土した。

SD23 Pit2083を切って東から3.5m程西へ走り、そこから南へ曲がり2.5m付近で、さらに東方向へ弧を描きながら Pit98におつかり途切れる。遺物は Fig.49-356・357が図示できた。

SD24 SC29・38の間に検出。これも溝と云うより、地形の変換点と考えた方が妥当なもので土坑状を呈す。出土遺物は、ローリングを受けた弥生期のものが多かった。

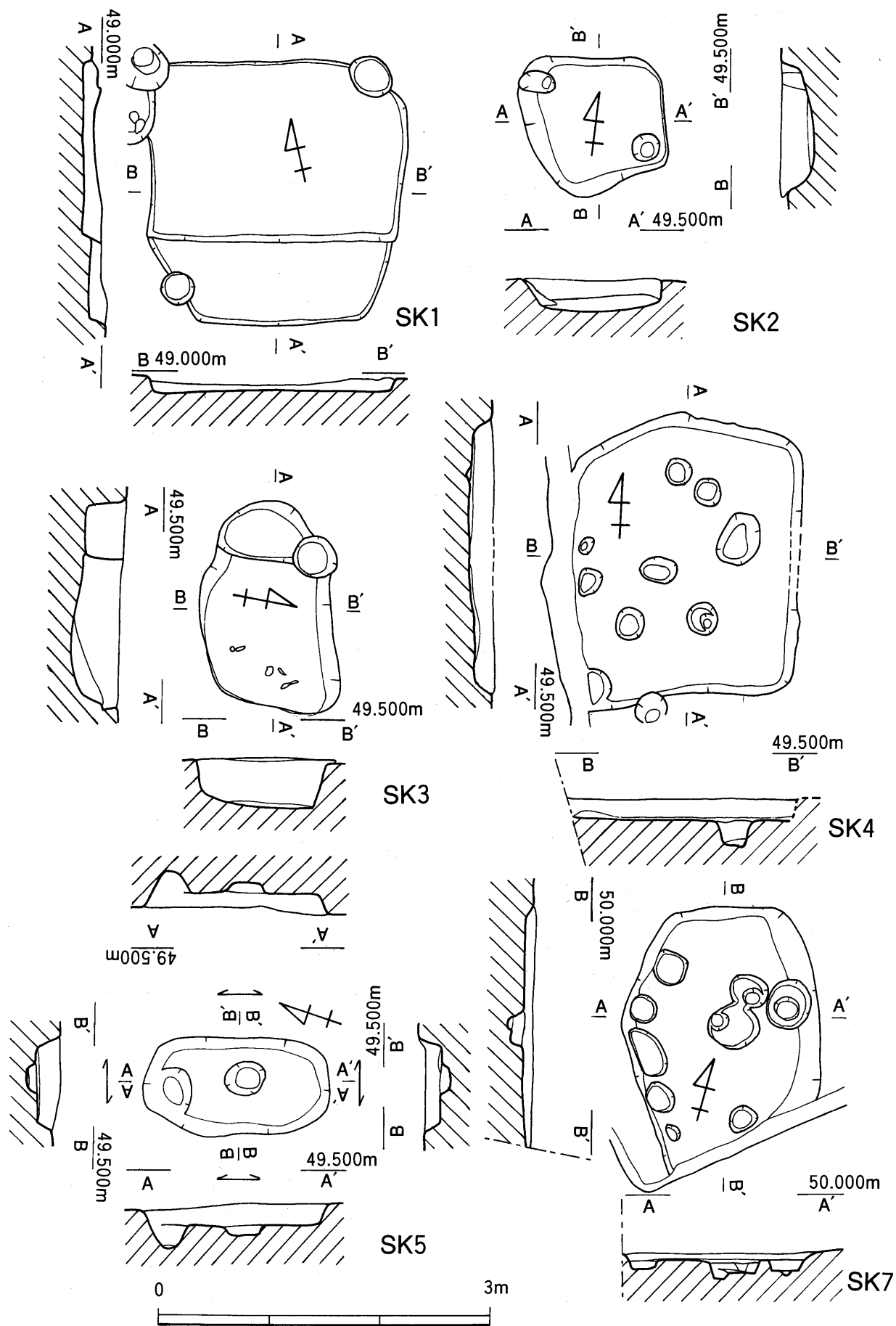


Fig.50 SK 1 ~ 5・7実測図 (S1/50)

(6) 土坑 (SK)

SK 1 (Fig.50, PL.13) Pit 96・99・101・105に切られ、SK22を切る。東・西・北壁長が2.1~2.3m、南壁長が1.7mの台形状のプランを呈す。南側が80cm前後のテラス状となって段をもつ。一見すると2つの土坑の重複に見えるが埋土は同一である。遺物は細片しかなく図示できなかった。

SK 2 (Fig.50, PL.13) 一辺が0.7~1m前後の不整形プランを呈す。底面は凹凸が多く深さも一定していない。東南コーナー部に Pit を検出。埋土の状況から土坑に伴うものと判断される。遺物は図示できるものではなく、細片が多かった。

SK 3 (Fig.50, PL.13) SK 2 に近接して検出された不整形方形の土坑。Pit141を切る。北・南壁長1.2~1.3m、東・西壁長1~1.1mを測り、底面は40cm前後ではほぼ平坦となる。壁の立ち上がりは南壁の一部と東壁が直に近いが、北・西壁は緩やかである。

SK 4 (Fig.50, PL.13) 調査区北西端で検出。西壁部分が未調査区へ延びる。北壁側が直線的でなく、やや曲線で、東・南壁は直線的、コーナー部も角ばらず丸くなる不整隅丸方形と考えられる。規模からして住居跡かとも考えられたが底面に踏みしまりなどなく、土坑として扱った。遺物は Fig.51-358・360が細片ながら図示できた。Fig.57-370は、ローリングを受けたスクレイパーであるが、土坑に伴うものではなく混在品と考えられる。

SK 5 (Fig.50) SK 4 の南にあって SD 1・SX 1 を切る。土坑墓かとも考えられたが、埋土・底面の状況から土坑とした。短軸0.5~0.6m、長軸1.35~1.6m、深さ18cm前後を測り、西壁が曲線を描き、隅丸長方形のプランを呈す。底面の北西付近の Pit から Fig.51-359が出土。ただ Pit の埋土から考えると重複していた Pit を同時に掘り下げた可能性があり、土坑の方が古い時期と判断する方が妥当かと思われる。

SK 6 調査区南端・市道予定地で検出。Pit289に切られ、南側が未調査区へ続く。このためプランは明確でない。北壁長0.95m、東・西壁長ともに $0.7 + \alpha$ mを測る。

SK 7 (Fig.50) SK 6 の東側で検出。これも未調査区へと続くためプランは不確定。Pit392に切られ、壁の立ち上がりは3cm前後で消失してしまいそうな深さである。

SK 8 (Fig.53, PL.13) SK19・SC119を切って Pit330に切られる。西南コーナー付近を試掘トレンチに切られ詳細は不明。北壁長2.1m、東壁長2m、西壁長 $2.4 + \alpha$ m、南壁長 $2 + \alpha$ mを測る。深さも5cm前後と遣りは極めて悪い。

SK 9 SK 8 の東側で検出。1/2程度が試掘トレンチによって削平。しかも遺構自体の遣りが悪いので詳細は不明。現状では、北壁長1.4m、東壁長 $1.4 + \alpha$ m、西壁長 $0.9 + \alpha$ mである。遺物は Fig.52-361が細片ながら図示できた。

SK10 (Fig.53) SK 9 の東側で検出。Pit・土坑に切られる。多角形のプランを呈す。床面は平坦。壁の立ち上がりは緩やかで、深さ15cm前後を測る。出土遺物は、細片で、ローリングを受けた弥生期のものが多く出土したが、図示できるものはない。

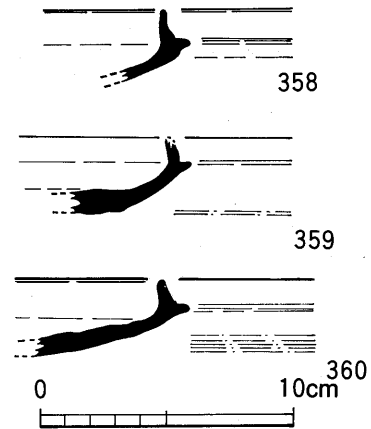


Fig.51 SK 4・5 出土遺物実測図 (S1/3)

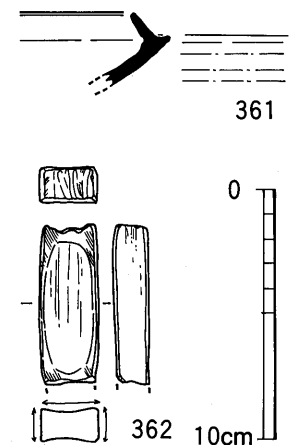


Fig.52 SK 9・12 出土遺物実測図 (S1/3)

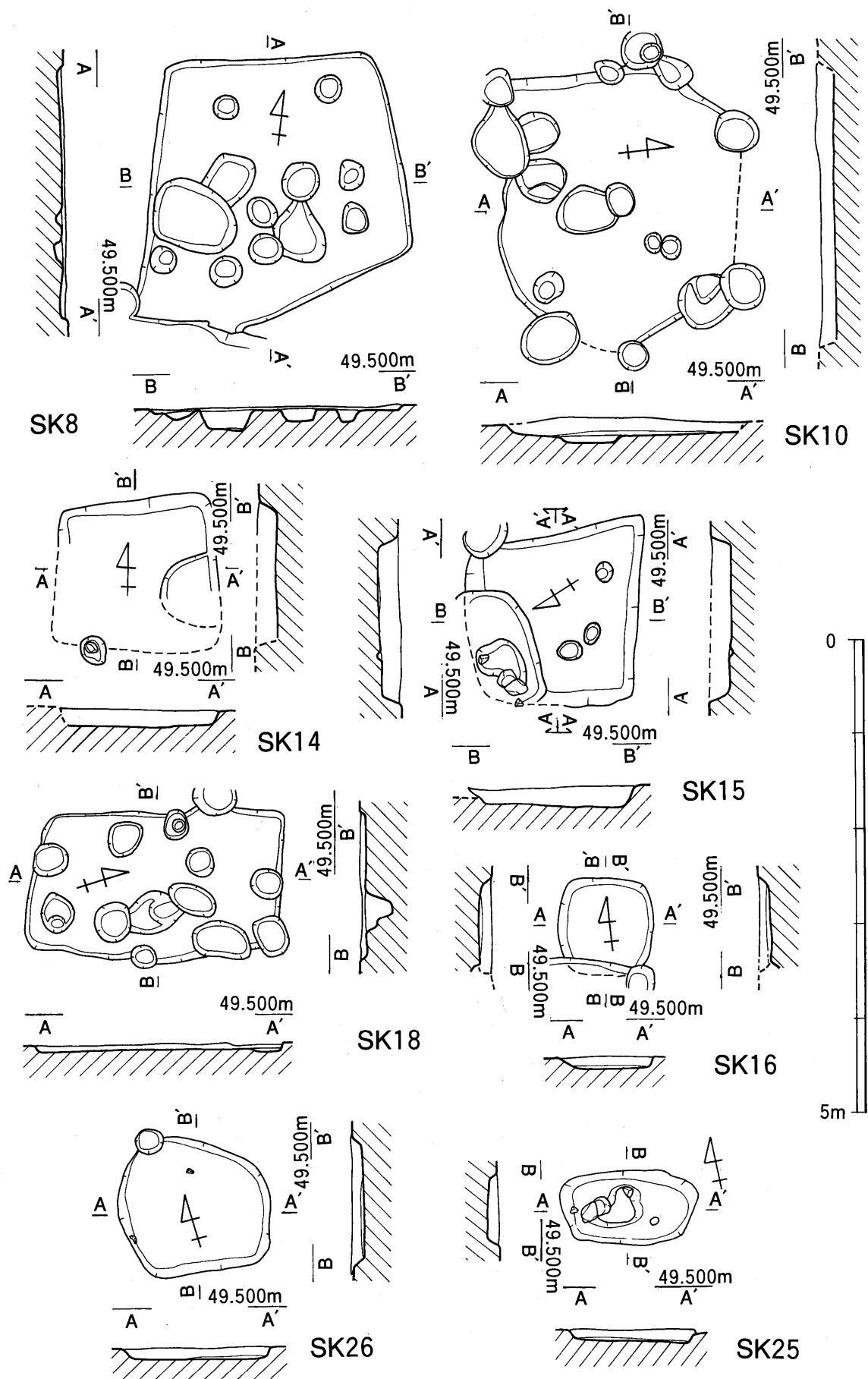


Fig. 53 SK 8・10・14~16・18・25・26実測図 (S1/60)

SK11 SC80に切られ、SX 8を切る。全容は不明。現存長、北・南壁 $0.8 + \alpha$ m、東壁0.4mを測る。北東・南東コーナー部は角ばらない。底面は東側に20cm前後の段をもち、緩やかに下段の底面へと向かう。

SK12 (PL.13) SC38に切られる。一辺が2 m前後の不整形形のプランを呈する。壁の立ち上がりは緩やかで、深さ32cm前後を測り、底面も凹凸がある。埋土はSC38と比較すると概して、湿った感じの埋土であった。遺物の出土は、そう多くはなく、図示できたのはFig.52-362の砥石だけである。

SK13 試掘トレンチに大きく切られ、南西のコーナーと南壁長さ2.3m・南東コーナーの一部しか遺っていない。しかしトレンチの反対側に遺構の続きが検出されない事と、調査区内の同様な遺構から推測すると一辺2 m前後の方形もしくは長方形プランの可能性が考えられる。深さも20cm前後と思われる。

SK14 (Fig.53) SC24に遺構の半分以上が切られる。現存長は北壁1.5m、西壁0.4m、東壁 $1.1 + \alpha$ mを測る。壁の立ち上がりは三方向とも直に近い。底面の深さは18cm前後となり、ほぼ平坦をなす。図示できる遺物は出土していない。

SK15 (Fig.53) SC 9・69を切ってSK25・Pit71に切られる。現存部から推測すると一辺が1.5m前後の不整形形のプランを呈すると考えられる。深さは20cm前後で、ほぼ平坦な底面を呈す。遺物はFig. 54-55-363・364だけを図示した。

SK16 (Fig.53) SC72に南辺部を切られる。現存長、北・東西壁ともに0.8mを測り、隅丸方形のプランを呈すと考えられる。底面は、深さ8 cm前後を測り、ほぼ平坦をなす。出土遺物で図示できるものはなかった。

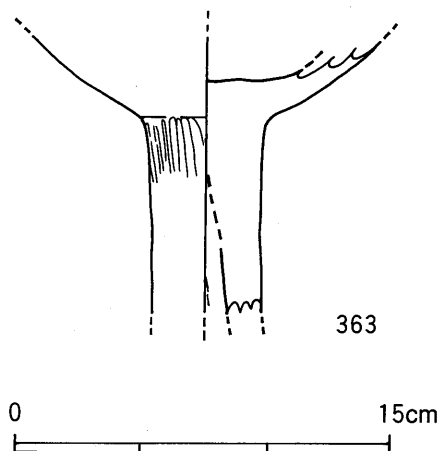


Fig.54 SK15出土遺物実測図 (S1/3)

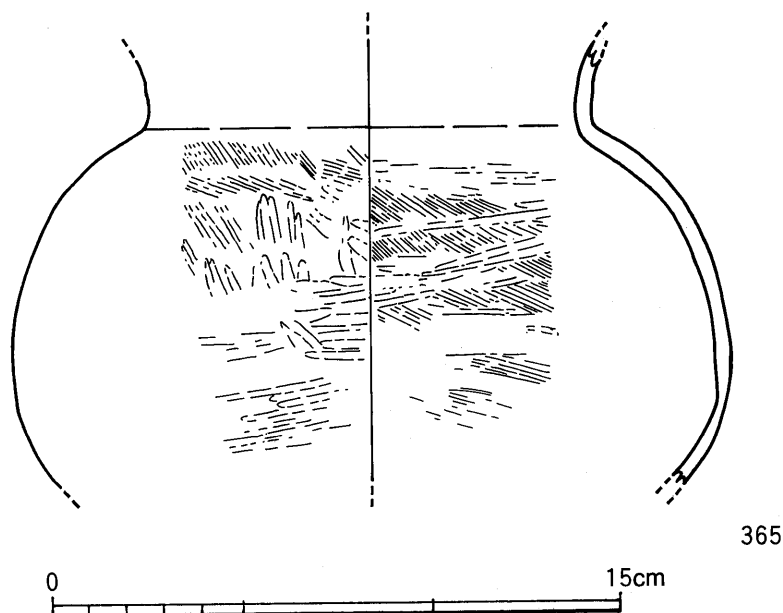
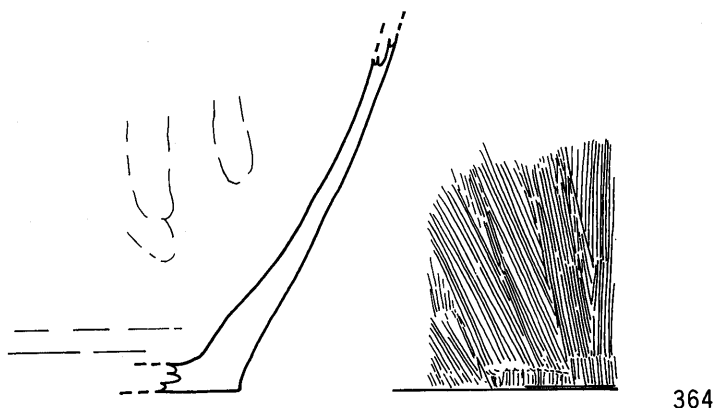


Fig.55 SK15・17出土遺物実測図 (S1/2)

SK17 SC21の南西コーナー付近を切って検出。長軸2m、東壁長1.2m、西壁長1mを測る楕円形のプランを呈す。SC21の埋土と比較すると埋土は灰白色（5YR8/1）が多量に混入しカマドかと疑問をもった程であった。遺物は時期差のあるものが多く、図示できたのはFig.55-365とFig.57-369の石鎌だけである。

SK18 (Fig.53) SC81の北西側で検出。Pit212~215に切られる。短軸1.3m前後、長軸2.3m前後の長方形プランを呈すと考えられる。深さは5cm前後でほぼ平坦をなす。

SK19 Pit592・602とSK8に西辺付近を切られる。遺存状況から一辺が0.8m前後を測る不整形プランを呈すと思われる。深さ5cm前後と遣りは悪い。

SK20 北西コーナー付近をSC65・SK21に南辺部をSD7・Pit427に切れ、遺構の中央付近にもPitが多く検出された。このため明確な全容は捉えきれない。

SK21 SK20を切ってSC25・65に切られる。全容は不明。

SK22 Pit14・97・103に切られる。多角形のプランを呈し、遣りも深さが5cm前後と悪い。

SK23 Pit48・2099・2102に切られる。楕円形プランを呈する土坑。長軸1.5m、東壁1.1m、西壁1.4mの長さを測り、壁は緩やかに立ち上がり鉢状となる。

SK24 SC35・53に切られ、SK42を切る。長軸になる東・西壁の長さが1.8m、北壁が1.1m、南壁の長さ0.9mを測る楕円形プランを呈す。深さは30cm前後で底面は一定しない。

SK25 (Fig.53) SK15を切る。北壁1.5m、南壁1.1m、東壁0.5m、西壁0.6mの長さの不整形長方形を呈す。床面の西側に花崗岩があり、その下層床面等も精査したが、この土坑に伴うものとは考え難かった。遺物は時期差のあるものが出土したが図示できたのはFig.56-366~368だけである。

SK26 (Fig.53) 北コーナー部をPitに切られる。北壁長1.3m、南壁長1.2m、東壁0.8m、西壁1.3mの長さの不整形のプランを呈す。深さ10cm前後でやや一定していない。遺物で図示できるものはない。

SK27 SK28を切る。極めて浅い土坑で北側部分を剝土の時削平してしまい、全容は不明。

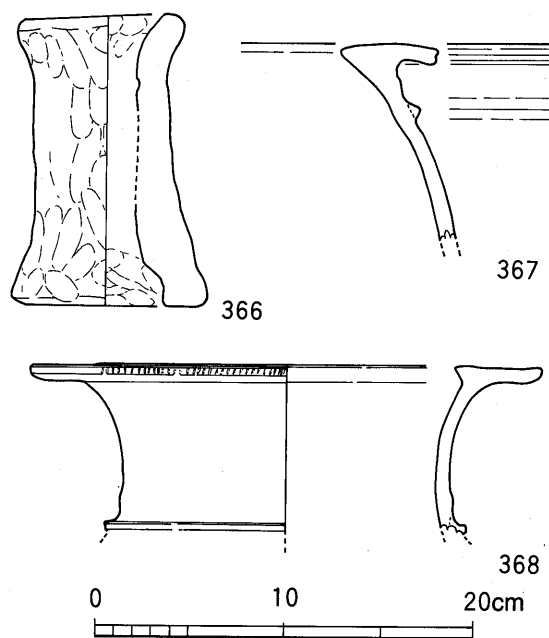


Fig.56 SK25出土遺物実測図 (S1/4)

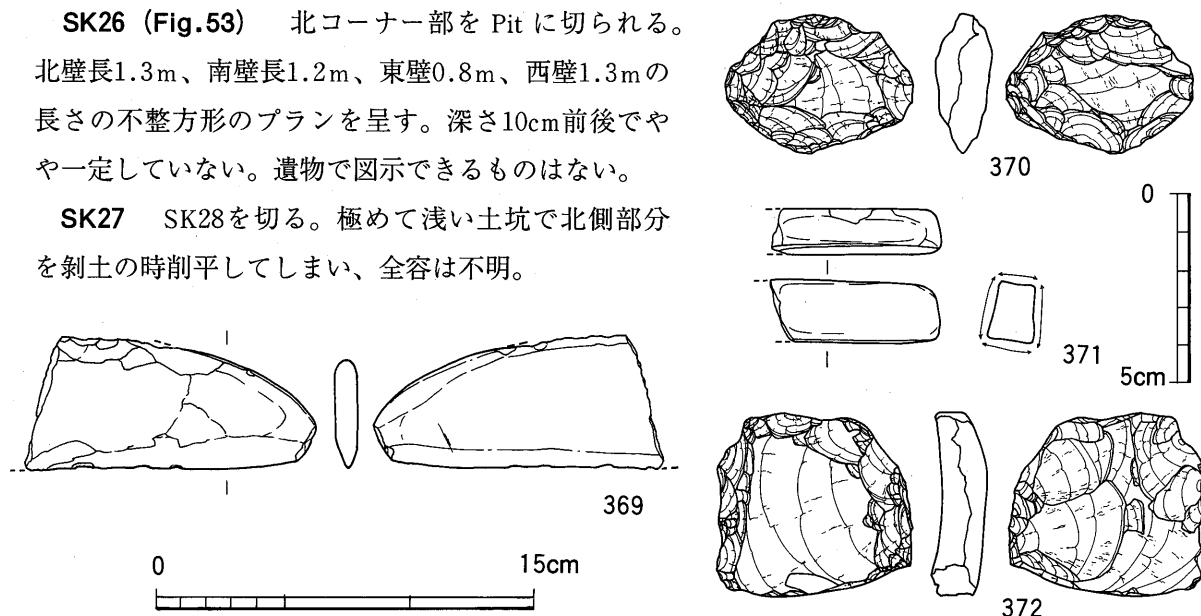


Fig.57 SK4・17・29・31出土遺物実測図 (S1/2・1/3)

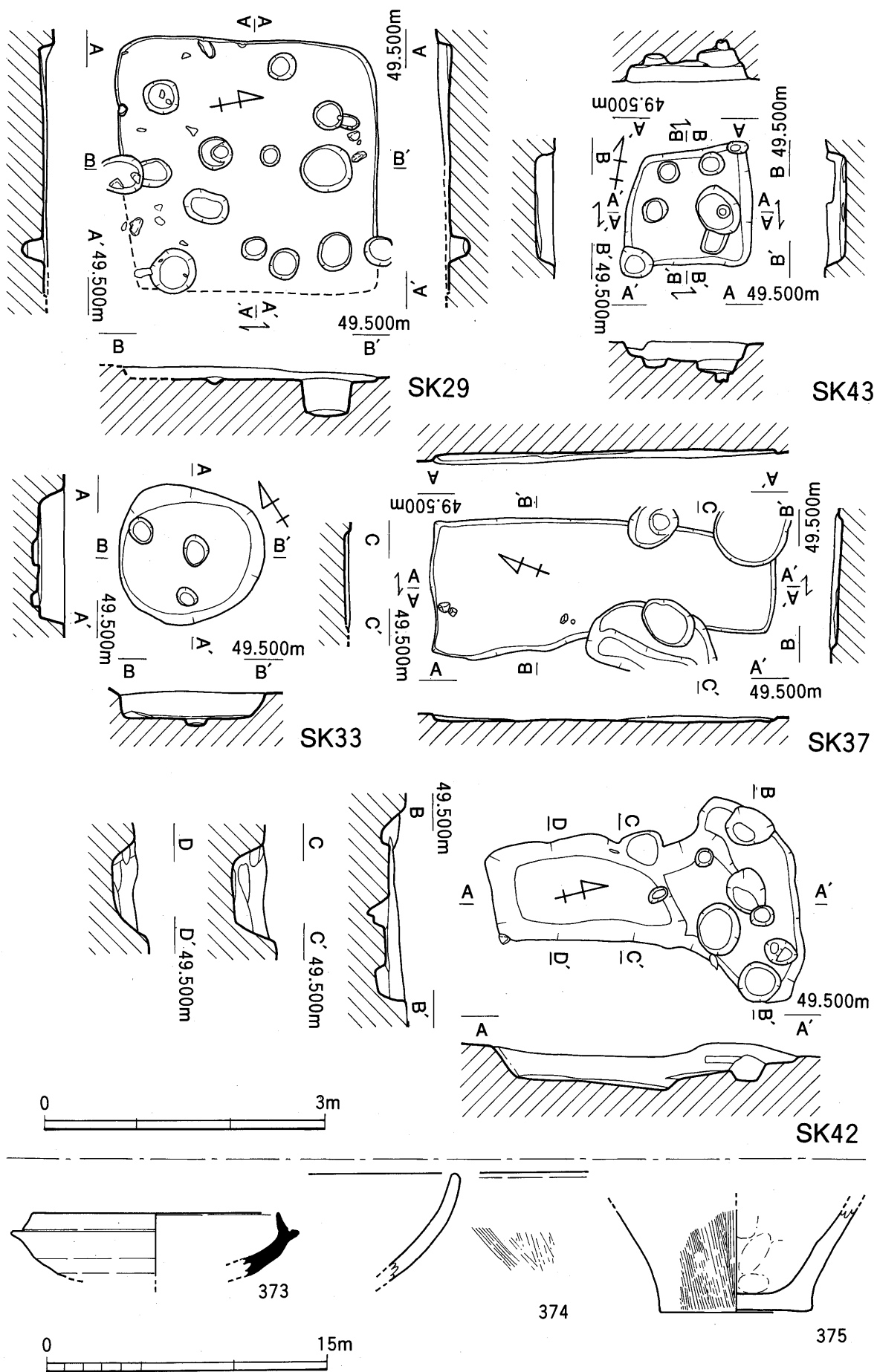


Fig.58 SK29・33・37・42・43実測図およびSK29・37・42出土遺物実測図 (S1/60・1/3)

SK28 SK27に切られ、北側部分を剝土の際、削平しているため詳細は不明。

SK29 (Fig. 58) SC106に切られ、SC135・136を切る。明確にプランが検出できたのは北・西・南辺部の三方向だけである。形状・規模から住居跡とも考えたが、床面の状況から土坑とした。遺物の出土も細片が多く、Fig. 57-371の砥石とFig. 58-373だけが図示できた。

SK30 Pit 1830を切り、遺構の大半が未調査区と続くため全容は不明。

SK31 SC20・112・Pit 316に切られ、未調査区へと延びる可能性もあるが、全容は不明。壁の遣りも悪く6cm程度しかない。遺物は細片が多く、Fig. 57-372のスクレイパーしか図示できなかった。

SK32 試掘トレンチ・Pit 1024に切られる。長方形もしくは方形プランを呈すると考えられるが、壁も5cm前後を測る程度で遺存状況は良くない。

図示できる遺物の出土はなかった。

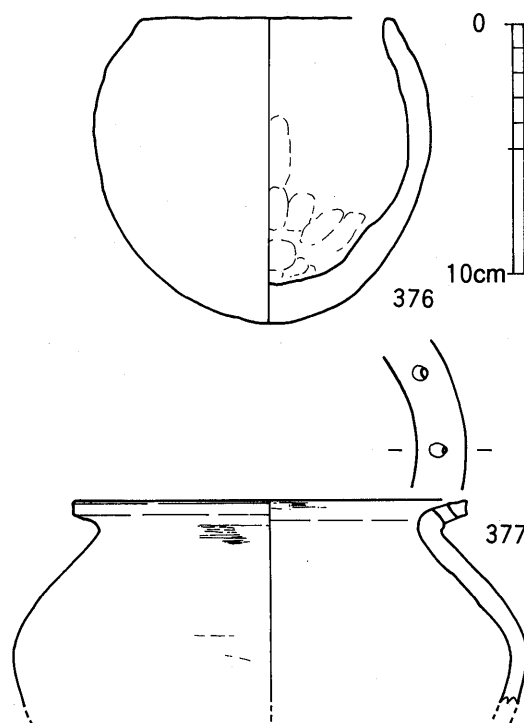


Fig. 59 SK37・42出土遺物実測図 (S1/3)

SK33 (Fig. 58) SD 5・11・SC36・37に切られる不整形円形の土坑である。直径1.5m前後を測り、北壁側がやや直線に近い形状をなす。壁の残りは25cm前後で、立ち上がりは全体的に緩やかで、底面は、ほぼ平坦。底面に検出されたPitは、埋土の状況から土坑に伴うものと考えてよいと思われる。出土遺物は細片が多く、図示できるものはなかった。

SK34 SC26に切られる土坑で、隅丸方形のプランを呈す。一辺が1m前後を測り、深さは15cm程度の遺存である。この遺構の周辺は、地山が黒味がかかった砂層の部分もあり、壁の立ち上がりを若干見失っている感もある。これも出土遺物は細片が多く、図示できなかった。

SK35 SC 9・16に切られるため、さほど深くはなく壁は10cm程度しか残っていない。一辺が1m前後の不整隅丸長方形プランを呈する。底面は中央部が深く、やや凹凸があり一定していない。遺物は時期差のあるものが出土したが、図示できるものはなかった。

SK36 SC18・24に切られる。北東コーナー付近はSC24のカマド部分と重複するため詳細は不明。西壁長1.4m、南壁長1.2m、東壁長1.6mを測り、深さ25cm前後となる。底面はほぼ平坦をなし、遺物はローリングを受けた細片が多く出土した。

SK37 (Fig. 58) Pit 1064・1065・1082・1113に切られる。西壁・北壁・東南壁は明確に検出できたが、東壁がやや不明瞭であった。もしかすると一辺3.5m前後の寸づまりの長方形プランの住居跡の可能性も考えられたためPit 1171・1172付近まで床面精査を試みたが捉えることはできなかった。壁の立ち上がりも5cm前後と浅いため、遺物もさほど多くは出土しなかった。Fig. 58-375とFig. 59-377だけが図示できた遺物である。

SK38 SC 4・132、Pit 8・10-13に切られる。短軸が1.5m前後、長軸2m前後の不整隅丸長方形のプランを呈する。深さ28cm前後で、底面は、かなり狭くなって壁の立ち上がりは緩やかで、断面形状は鉢状に近くなる。遺物は細片が多く、図示できるものはなかった。

SK39 SC 1・4、Pitに切られるため、明瞭な平面プランとして捉えられない。長軸1.8m 前後、短軸1.2m 前後の楕円形となり、深さは20cm 前後を測る。壁の立ち上がりは直に近い形態をなす。遺物はローリングを受けた弥生時代のもが多く出土したが、図示はできない。

SK40 SC 9、Pit 1853～1857に切られる。長軸1.5m 前後、短軸0.6m 前後の不整隅丸長方形のプランを呈し、ややSK25に類似する。深さ15cm 前後で、壁の立ち上がりは、やや緩やかになる。これも遺物は弥生時代の細片が多く、図示できるものはなかった。

SK41 SC10・12・133・134に切られる。直径1.2m 前後の不整円形プランをなし、断面形状は鉢状を呈す。底面の中央がやや深くなっていて平坦な底面にはならない。出土遺物は、細片でしかもローリングを受けていたものも多く、図示できなかった。

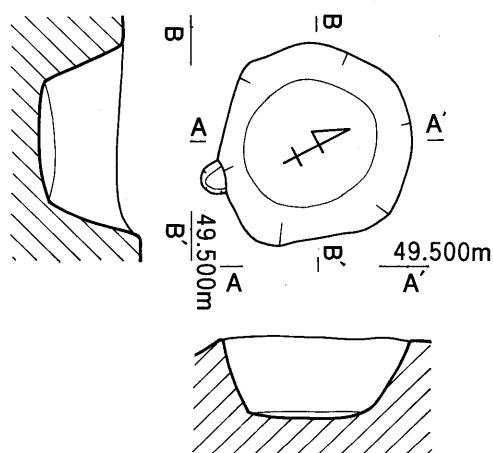


Fig. 60 SP 1 実測図 (S1/60)

SK42 (Fig. 58) SC35・43・53、Pit 2060～2065、SK24に切られる。北壁長2 m、南壁長2.1m、東壁長0.7m、西壁長0.9m を測る。不整長方形を呈す。西壁側の Pit 2065の南側の壁がやや張り出しているのは、Pit を見誤って同時に掘り下げた可能性がある。出土した遺物はローリングを受けた細片が多い。しかしながら Fig. 58-374、Fig. 59-376のようなまざり混んだものが出土している。

SK43 (Fig. 58) Pit 817・1182～1186・1261に切られて、不整形のプランを呈する。北壁長1.1m、東・南壁長1.3m でやや直線的に、西壁の長さ1.2m で僅かながら弧を描いている。底面までの深さは15～20cm と一定していない。壁の立ち上がりは、直に近い形状をなす。出土遺物はさほど多くはなく、図示できるものもない。

SK44 SK 1・22に切られ、土坑と切り合う。直径1.1m 前後の楕円形をなし、断面形状は底面が狭い鉢状となっている。上面をSK 1で削平されているため、深さ15cm 前後と深くはない。出土遺物は少なく、時期決定できるものはなかった。

SK45 SC26・65、SK20に切られるため、西壁の一部しか遺存しないため全容は不明。ただ遺存する西壁が2 m 前後の長さを測るため、規模的には住居跡の可能性もあったが、遺存する床面を精査しても、踏みしまりなどによる汚れなど確認できなかったため、一応土坑として扱った。遺物は細片ばかりが出土した。

SK46 SC 8を切ってSK47に切られ、SC396を切る。非常に浅いため、東壁側を剝土の際とばしてしまって、北壁長0.5m、西壁長1.6m しか検出できず全容は不明である。

SK47 SC77に切られ、SK46とSC393を切る。SK46と同様、東壁側のプランを剝土で検出できていない。南西コーナー部と南壁側は、SC77に切られているため不明。残存長は北壁2.2m、西壁1.8m しか測れない。遺存する壁の規模や僅かな踏みしまりによる汚れから住居跡の可能性も考えられるが、全容が捉えられないため一応土坑とした。遺物はローリングを受けた細片だけが僅かに出土しただけである。

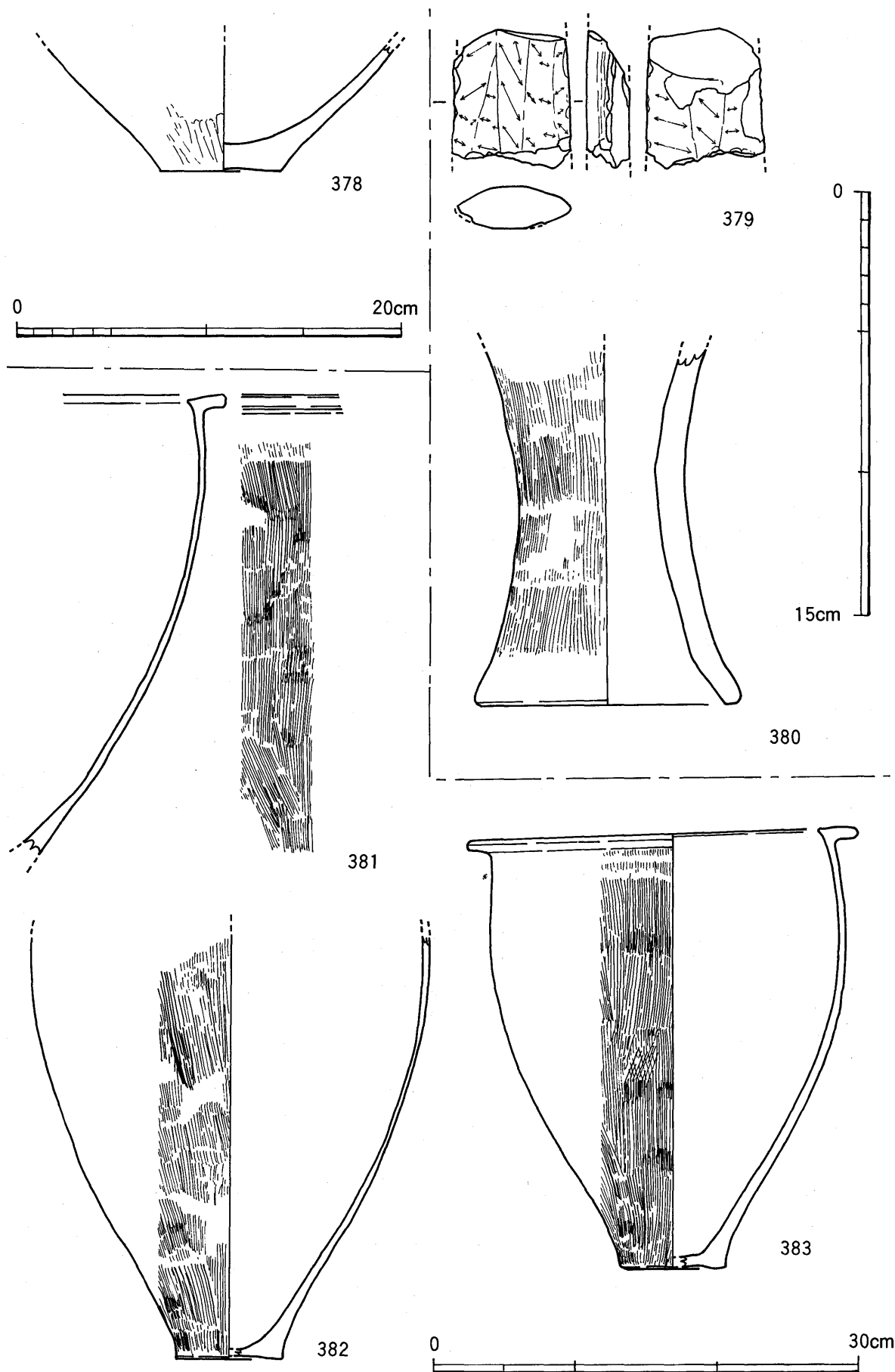
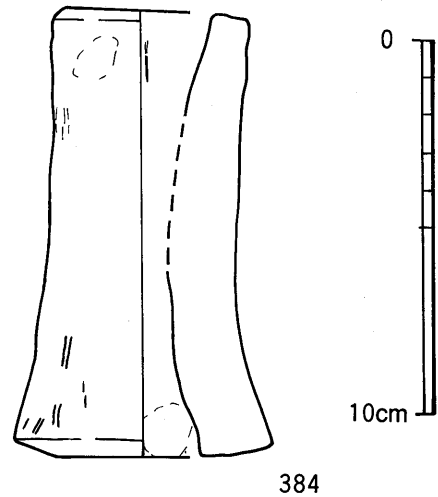


Fig.61 SP1出土遺物実測図 (S1/2・1/3・1/4)

(7) 貯蔵穴 (SP)

SP 1 (Fig. 60, PL. 12) SC67に切られ、Pitと重複する。直径1.6m 前後の不整円を呈す。東～南側壁が直線的であつたり歪んでいて、この壁周辺だけを見ると隅丸長方形として捉えられる。東壁側の直線的なラインはSC67の東壁と重複するため、住居跡を意識しすぎて掘り足りなかった可能性が強い。壁の立ち上がりは斜め方向に緩やかになっていて、途中が僅かだが中ぶくらみする部分も見受けられた。そのため土坑とは区別して貯蔵穴として扱った。遺物は多く出土したが、全般的にローリングを受けた破片で、図示したのはFig. 61-378-383である。379は基部・先端部を欠損した石剣の破片。現存長4.8cm、刃部幅4cm、



厚さ1.5cmを測る。刃研ぎなどの整形は丁寧な研磨を施している。381の甕は残存高33.05cmを測るが、口縁の一部と胴部の1/4程度しか遺存せず、口径・最大径ともに不明。器高30.8cm、復元口径27cm、胴部最大径24.6cmを測る382は、外面にぶい橙色(7.5YR 6/4)、内面明黄褐色(10YR 7/6)の色調を呈す。焼成は普通で、胎土には1mmの砂粒とウンモ片を少量含んでいる。調整は内面はナデ仕上げ、胴部中位から底部にかけススが付着している。外面にもススの付着があるがハケメによる調整を施す。383は器高31.15cm、底径7.45cm、口径27.5cmを測る甕。出土した遺物は概して甕が多く、378・380のような壺や器台は少なかった。

Fig. 62 SP 4 出土遺物実測図 (S1/2)

SP 2 SC 8に切られて楕円形のプランを呈す貯蔵穴。これもSP 1と同様に壁の立ち上がり途中で若干の中ぶくらみをするため貯蔵穴とした。検出面のプランの歪みは、他の遺構と重複していた可能性がある。元来は一辺が1.4m 前後の隅丸方形プランであつたと考えられる。遺物は図示できるものではなく、細片ばかりが出土した。

SP 3 SC66, Pit 86・118・1087・1088に切られるが、一辺の長さ1.3m 前後を測る隅丸方形プランを呈していたと考えられる。底面の中心部に径18cm 前後のPitを検出。これは埋土の状況から貯蔵穴に伴うものと考えられる。底面はやや凹凸があるもののほぼ一定。壁の立ち上がりは、57cm 前後を測り、底面から丸みをもって直に近く延びているが、やはり途中で僅かに中ぶくらみをしている。遺物は埋土上層から中層が多く、底面近くでは少量の細片しか出土せず図示できるものもなかった。

SP 4 調査区の北西側、SK 2の北側で検出。遺構の重複があるためプランにシャープさがなく蛇行しているが、元来の形状は長軸2.2m、短軸1.1m 前後の隅丸長方形を呈していたものと思われる。底面中央部と南東コーナー付近で3個のPitを検出、これらは埋土等から貯蔵穴に伴うものと考えてよい。北東コーナー付近に僅かに低くなったところがあるが、深さ30cm 前後ではほぼ一定である。壁の立ち上がりはSP 3に類似して、底面から壁に向かい丸みをもつが、直に近く立ち上がり、若干の中ぶくらみを呈す。遺物は細片が多かったが、Fig. 62-384の支脚が図示できた。器高12cm、上端5.3cm、下端6.9cmを測る。色調は内外ともに明黄褐色(10YR 7/6)を呈し、胎土には1mm前後の砂粒が多く含まれる。焼成は普通。外面には指頭痕が顕著に残る。

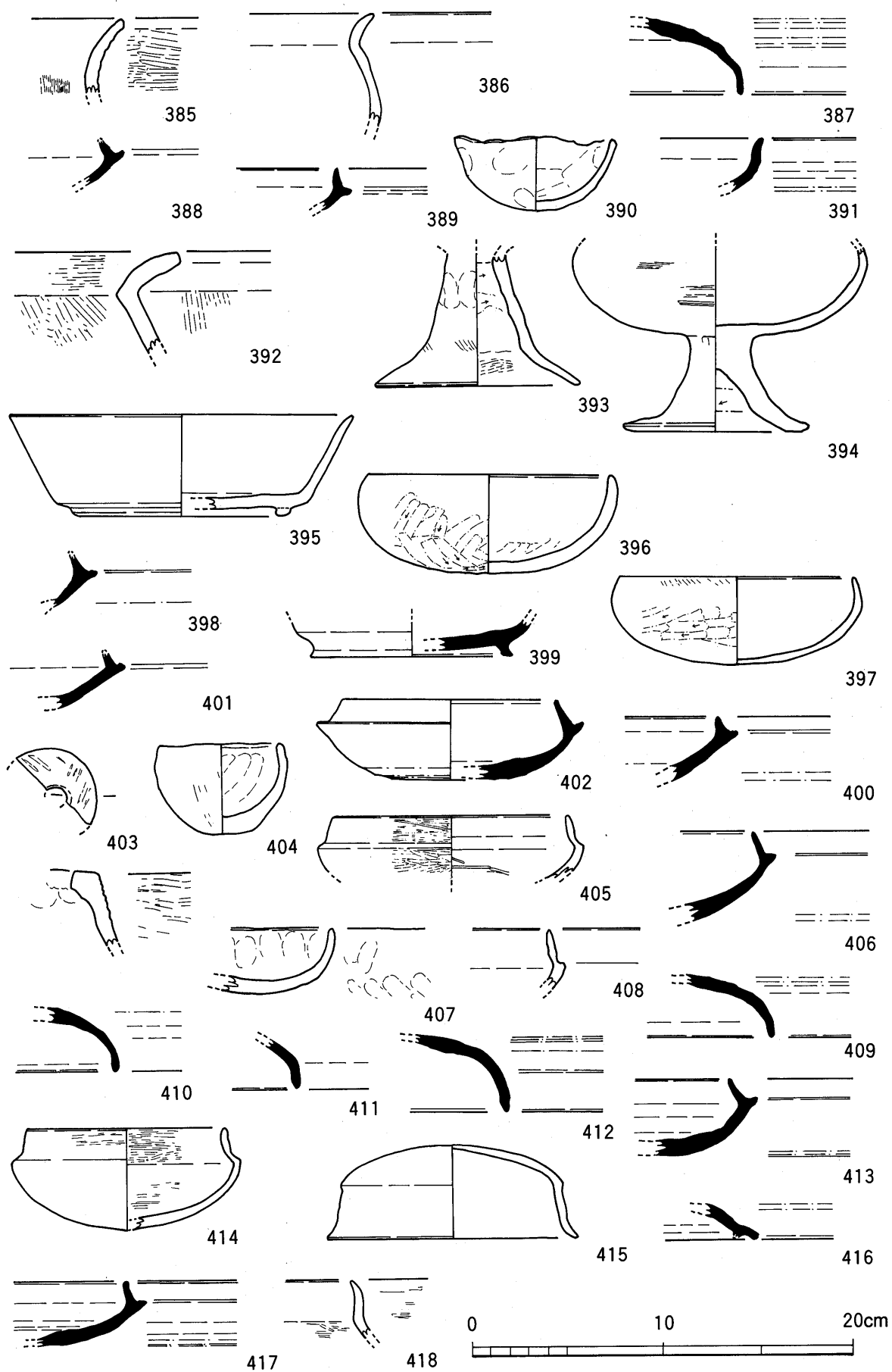


Fig.63 Pit出土遺物実測図 (S1 / 3)

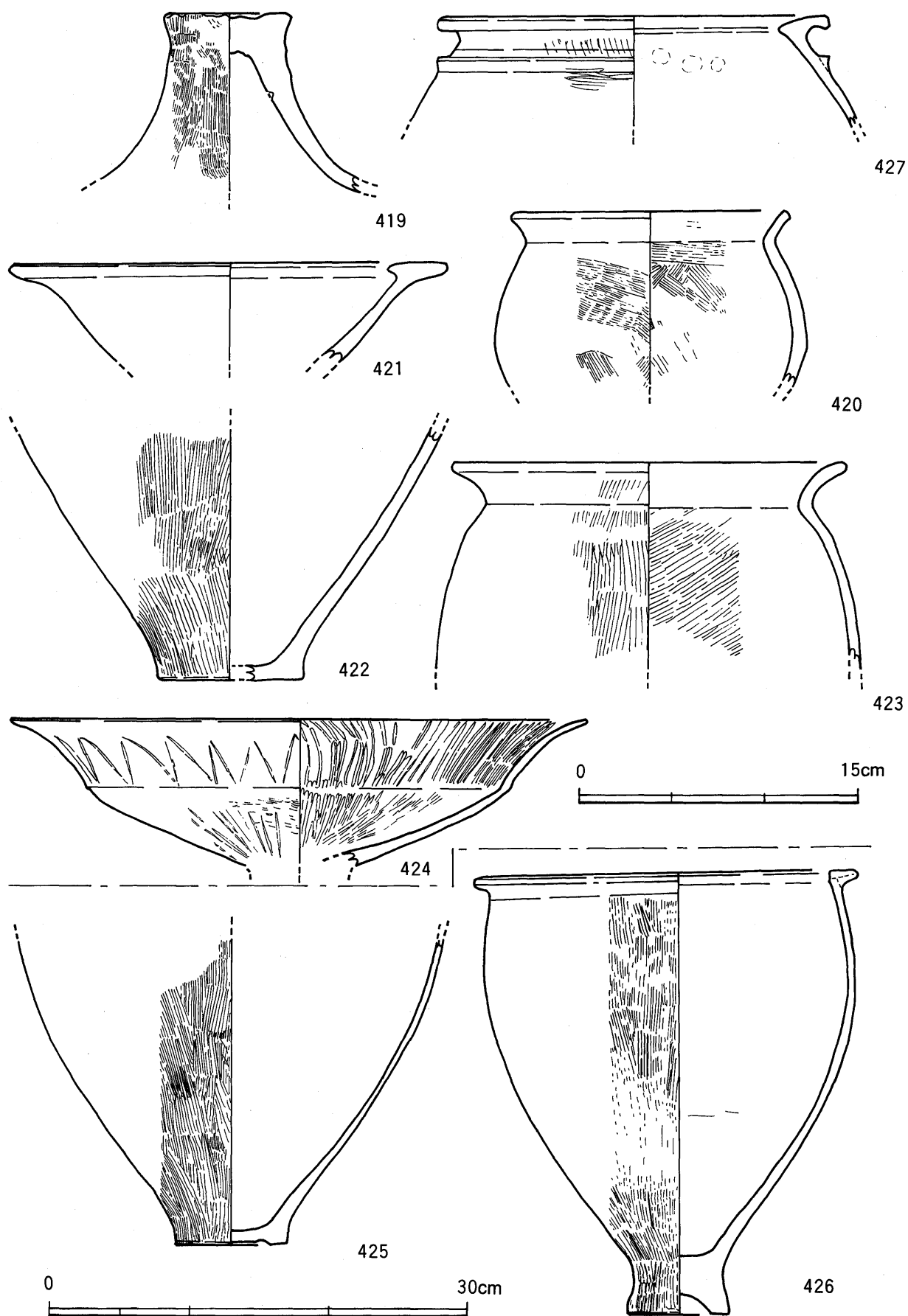


Fig.64 Pit出土遺物実測図 (S1/3・1/4)

(8) 柱穴 (Pit)

Fig. 63-386は Pit 34より出土。小型の甕の破片。残存高5.95cm を測り、焼成は普通、内外ともに、にぶい黄橙色 (10YR 6/3) の色調を呈す。Pit 49から出土した387の蓋は、胎土に1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は普通。390は外面に指頭痕を顕著に残す。色調は灰褐色 (7.5YR 5/2) を呈し、焼成は普通。口径8.6cm、器高3.95cm で、胎土に1mm前後の砂粒とウンモを含んでいて、内面から外面口縁部にかけて黒斑が認められる。これはPit 188より出土した。高坏の脚部のみが遺存する393は Pit 337から出土。復元裾部径10.7cm、残存高7.1cm を測る。胎土には微砂粒とウンモを少量含んで、焼成は普通。内外面ともににぶい黄橙色 (10YR 6/3) の色調を呈し、内面の調整はケズリとナデ、裾部がハケメ後ナデを施す。外面はナデ調整がなされるが指頭痕をウッスラと残している。Pit 359より出土した394は口縁端部が破損した高坏で、ローリングのためやや調整は不明瞭だが、ミガキ調整が部分的に残っている。焼成は普通で、胎土に僅かな細砂粒と赤褐色土を含んでいる。色調は外面橙色 (2.5YR 6/8)、内面浅黄色 (2.5YR 8/4) を呈す。体部の一部に赤彩の痕を残す。1/3程度しか遺存しない坏の395は、Pit 381から出土。復元口径18cm、器高5.35cm、復元高台径は11.4cm を測る。外面暗灰色 (N 3)、内面灰白色 (2.5YR 8/1) の色調を呈す。胎土はわりに精製されているが、焼成はややあまい。ローリングのため調整は不明瞭となっている。焼成良好な396は Pit 385より出土した。口径13.3cm、器高5.3cm を測り、内外面とも、にぶい橙色 (7.5YR 7/4) の色調を呈し、胎土には1~2mmの砂粒と赤褐色土を含む。調整は外面ヘラケズリ、口縁部付近ヨコナデ、内面ヘラナデ後ナデガ施されている。Pit 412から出土の397は、ローリングのためウッスラとしか遺らないが赤彩が施してあったと思われる。復元口径12.4cm、器高4.7cm を測り、外面浅黄橙色 (10YR 8/4)・橙色 (5 YR 6/8)、内面浅黄橙色 (10YR 8/4) の色調を呈す。体部外面にはヘラケズリ、内面から外面口縁部にはナデ、ヨコナデがなされている。口縁部の立ち上がりが396とは違い若干内傾している。400は1/4程度の破片。微砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通。外面黄灰色 (2.5YR 6/1・2.5YR 5/1)、内面黄灰色 (2.5Y 6/1) の色調をなす。外面体部に自然釉が付着し、ヨコナデ・ケズリ、内面ヨコナデ後ナデ調整を施す。Pit 483から出土。Pit 500から出土した402は、1/3程度遺存する坏身。復元口径11.4cm、受部径14cm、器高4.25cm を測り、内外ともに青灰色 (5 B 5/1) の色調を呈す。調整は内外ヨコナデ、外底面にはヘラケズリを施して、1mm前後の砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通である。全体の1/4が遺存する手捏土器の404は、Pit 548より出土。復元口径6.3cm、器高4.85で、胎土に1mmの砂粒とウンモを少量含み、焼成は普通。色調は、外面にぶい橙色 (7.5YR 7/4)・浅黄橙色 (10YR 8/4)、内面にぶい橙色 (7.5YR 7/4) をなす。内面はナデ調整が施されるが、指頭痕をウッスラ残し、外面口縁部はヨコナデ、体部にはハケメ後ナデを施す。外面の体部~底部に黒斑が残る。405は1/3遺存する坏。復元口径12.4cm、復元受部径14cm、残存高3.35cm を測る。胎土に微砂粒・ウンモを少量含んで焼成は良好。内外面の色調は灰白色 (2.5YR 4/2) をなす。調整はケズリ後ミガキあるいはヨコナデ後ミガキを施し、丁寧な調整のされた土器で Pit 650出土。内底面に同心円の当て具痕を残す413は Pit 785の出土。1mm程の砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通。外面灰色 (N 4)・灰白色 (N 7)、内面灰色 (N 4) の色調を呈し、外底面にヘラケズリ、ヨコナデをなし、体部には自然釉が付着する。Pit 744出土の409は残存高3.35cm を測る蓋の破片。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は普通。色調、外面暗灰色 (N 3)、内面の色調は灰色 (N 5) をなす。ヨコナデを内外に施し、口縁部に自然釉が付着。

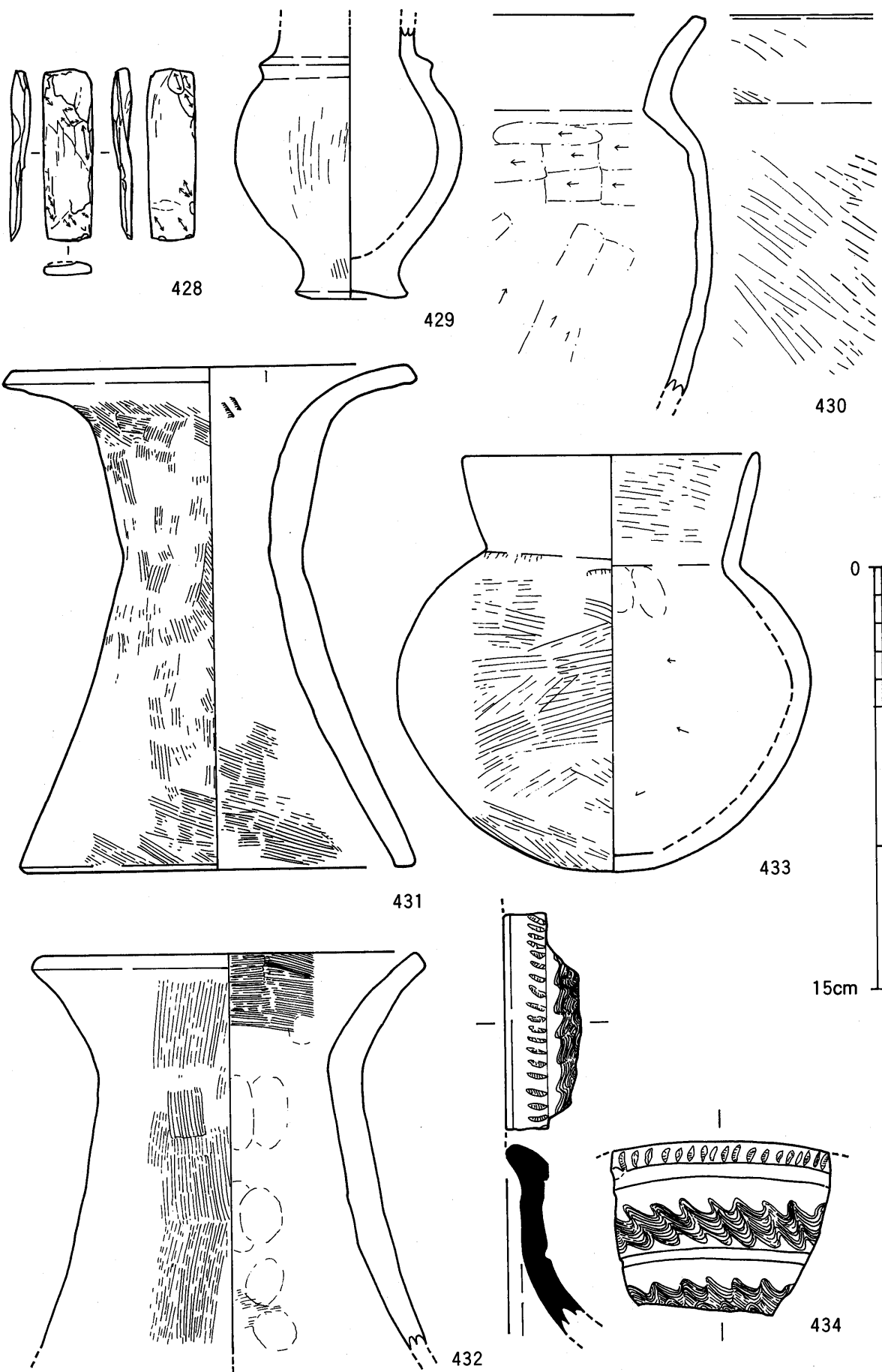


Fig. 65 Pit出土遺物実測図 (S1 / 2)

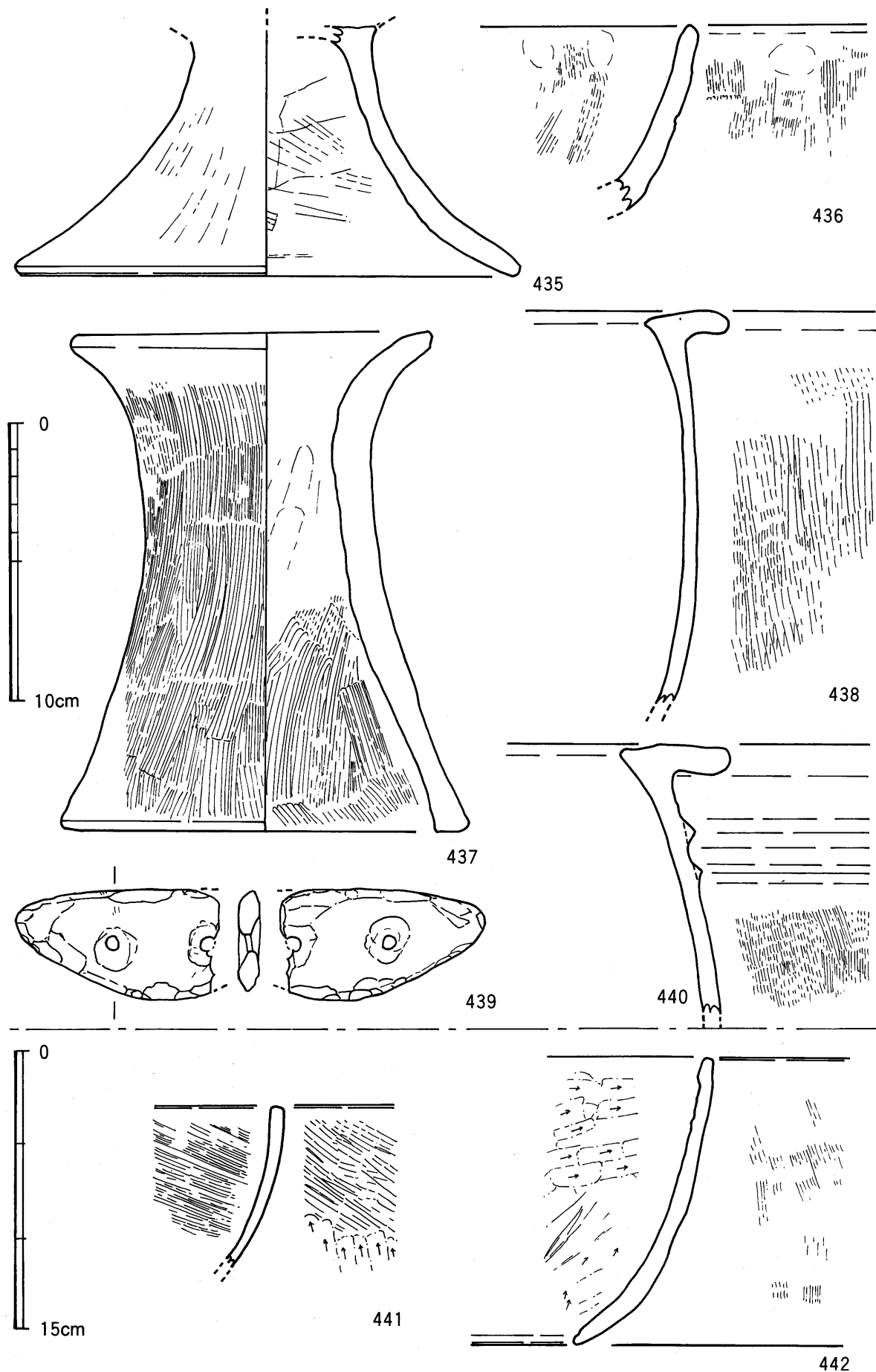


Fig.66 Pit出土遺物実測図 (S1/2・1/3)

Pit 775から出土の**412**の蓋は、胎土に微砂粒を含んで焼成は不良。調整は外天井部にケズリ、口縁内外面はヨコナデがなされる。外面の色調、灰褐色（7.5YR 6/2）、内面灰色（10YR 6/1）を呈す。ローリングのため外体部の調整が不明瞭な**414**は、ウッスラと部分的に赤彩を残す。復元口径10.7cm、受部径12.1cm、器高5.4cmを測り、内外面の色調、浅黄橙色（7.5YR 8/6）を呈し、胎土には赤褐色粒・1mm前後の砂粒を僅かに含み、焼成は普通である。内外面に細いミガキがなされていたのか部分的に残る。Pit 909からの出土。赤彩の施された**415**は、復元口径13.2cm、器高4.95cmを測る蓋。胎土に1mm程の赤褐色土を含み、普通の焼成をなす。色調は内外ともに赤褐色（2.5YR 4/8）を呈し、ローリングのためやや不明瞭ではあるがミガキを施している。Pit 913から出土した。Pit 954より出土の**417**は、内外面灰色（N 6）の色調を呈し、残存高3.4cmを測る坏。1mm程の砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通。内面から外体部はヨコナデ仕上げ、内底面に当て具痕が残り、外底面はヘラケズリを施している。Fig. 64-**420**、復元口径15.1cm、残存高9.65cmの鉢。1mm程の砂粒・ウンモを僅かに含んだ胎土で、焼成は普通である。にぶい橙色（7.5YR 6/2）・灰黄色（2.5Y 6/2）を外面に、内面灰黄色（2.5Y 6/2）の色調を呈す。内面胴部はハケメ後部分的にナデ、口縁部はハケメ後ヨコナデが、外口縁部はヨコナデ、頸部付近はナデ後ハケメ、胴部にはハケメ、胴部下位にはケズリ後ハケメが施されている。胴部中位に最大径があり、16.8cmを測る。Pit 418から出土。高坏の口縁～体部の破片の**421**はPit 469より出土。ローリングのため調整不明瞭。復元口径23.6cm、残存高5.4cmを測り、内外ともに明赤褐色（5 YR 5/8）の色調を呈す。細砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通である。Pit 469から出土した**422**は、復元底径7.8cm、残存高13.8cmを測る甕。胎土に砂粒とウンモを少量含み、焼成は普通。外面はハケメ、内面はナデ調整が施されている。復元口径21.2cm、残存高11.3cmを測る**423**は、Pit 575出土の甕である。色調は外面暗赤褐色（5 YR 3/2）、内面にぶい赤褐色（5 YR 4/4）を呈し、細砂粒・ウンモを含んだ胎土で、焼成は普通。胴部内外の調整はハケメ、口縁内面にはヨコナデ、外口縁部にはハケメ後ナデで仕上げている。また外面口縁端部付近にはススの付着がある。外面口縁部に鋸歯状の暗文を施す高坏**424**は復元口径31cm、残存高7.9cmを測る。色調は内外ともに、にぶい黄橙色（10YR 6/4）をなし、胎土に細砂粒と赤褐色粒・角セン石を含み、普通の焼成である。内外の体部は、ハケメ後ナデ、さらに暗文を口縁内面にはヨコナデ後暗文を施す。Pit 961から出土した。**426**の甕はPit 433より出土。復元口径は27.7cm、胴部最大径26.7cm、器高32.1cm、底径7.5cmを測る。胎土に1～2mm程の砂粒を含んで、焼成は普通。内外面の色調は明赤褐色（2.5YR 5/6）を呈す。外面は部分的にローリングを受けているがハケメで、内面はナデによって仕上げている。内面の胴部下位から底面に黒斑が残っている。Pit 1065から出土した甕の口縁片の**427**は、復元口径21.1cm、残存高6.2cmを測る。僅かな細砂粒とウンモを含んだ胎土で、焼成は良好である。外面の色調、明赤褐色（5 YR 5/8）、内面にぶい黄橙色（10YR 7/3）をなす。調整はナデもしくはヨコナデで仕上げるが、内面にウッスラ指頭痕を残している。全体に赤彩が施されている。Fig. 65-**429**のミニチュア壺は、Pit 320から出土した。底部端部と口縁部が欠損。復元底径4cm、胴部最大径8cm、残存高9.7cmを測り、少量の細砂粒とウンモを含んだ胎土で、焼成は普通。外面の色調は黒褐色（2.5Y 3/2）、内面灰黄色（2.5Y 6/2）をなす。内面はナデ調整、外面胴部にはハケメ後ナデ、部分的にミガキを、頸部付近はヨコナデ後部分的にミガキがなされる。また外面には黒斑とススが付着していて、全体的に比厚した土器で頸部に一条の三角凸帯を巡らす。Pit 381から出土の**430**は焼成良好な甕で、口縁部から

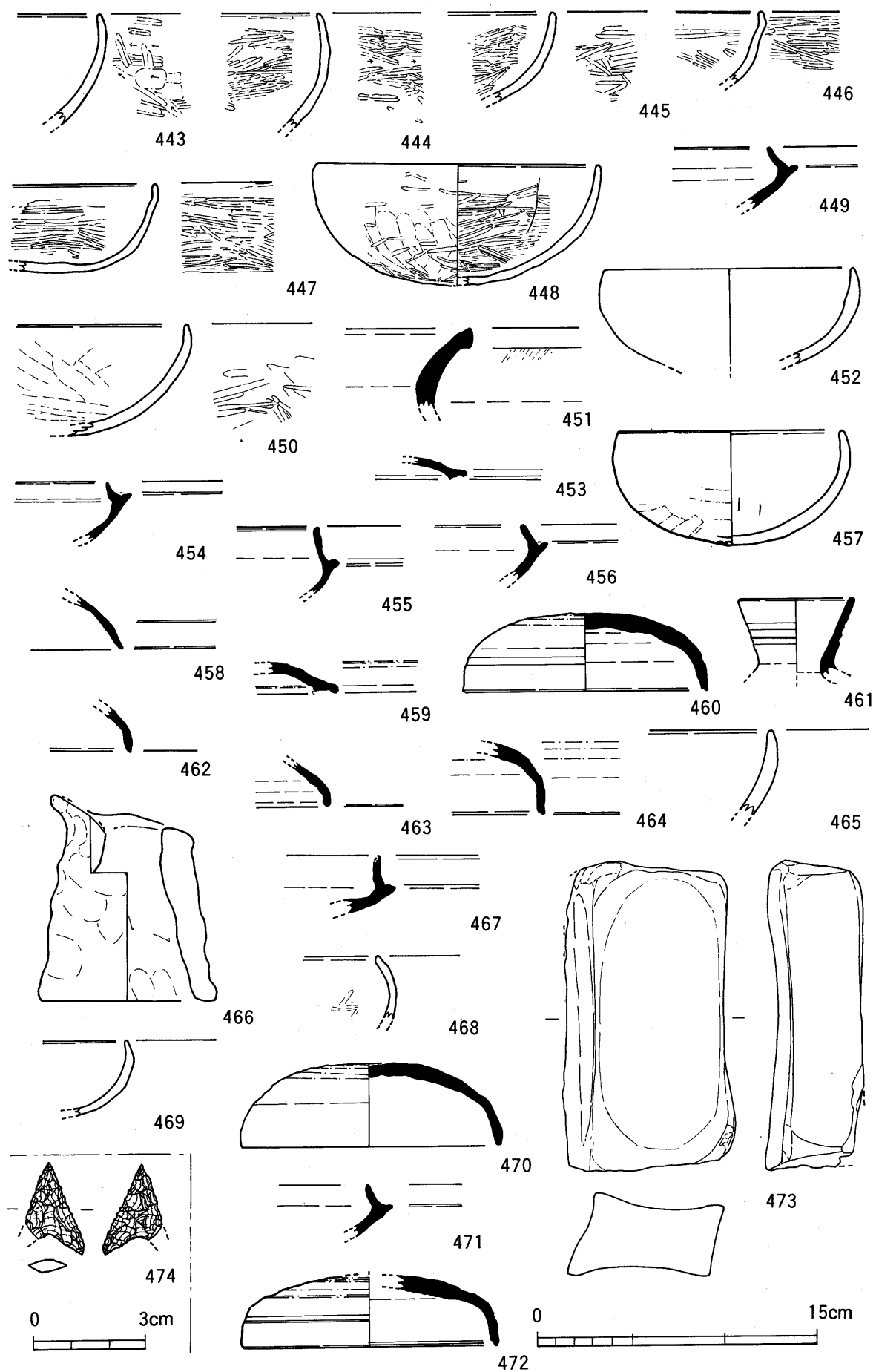


Fig.67 Pit出土遺物実測図 (S2/3・1/3)

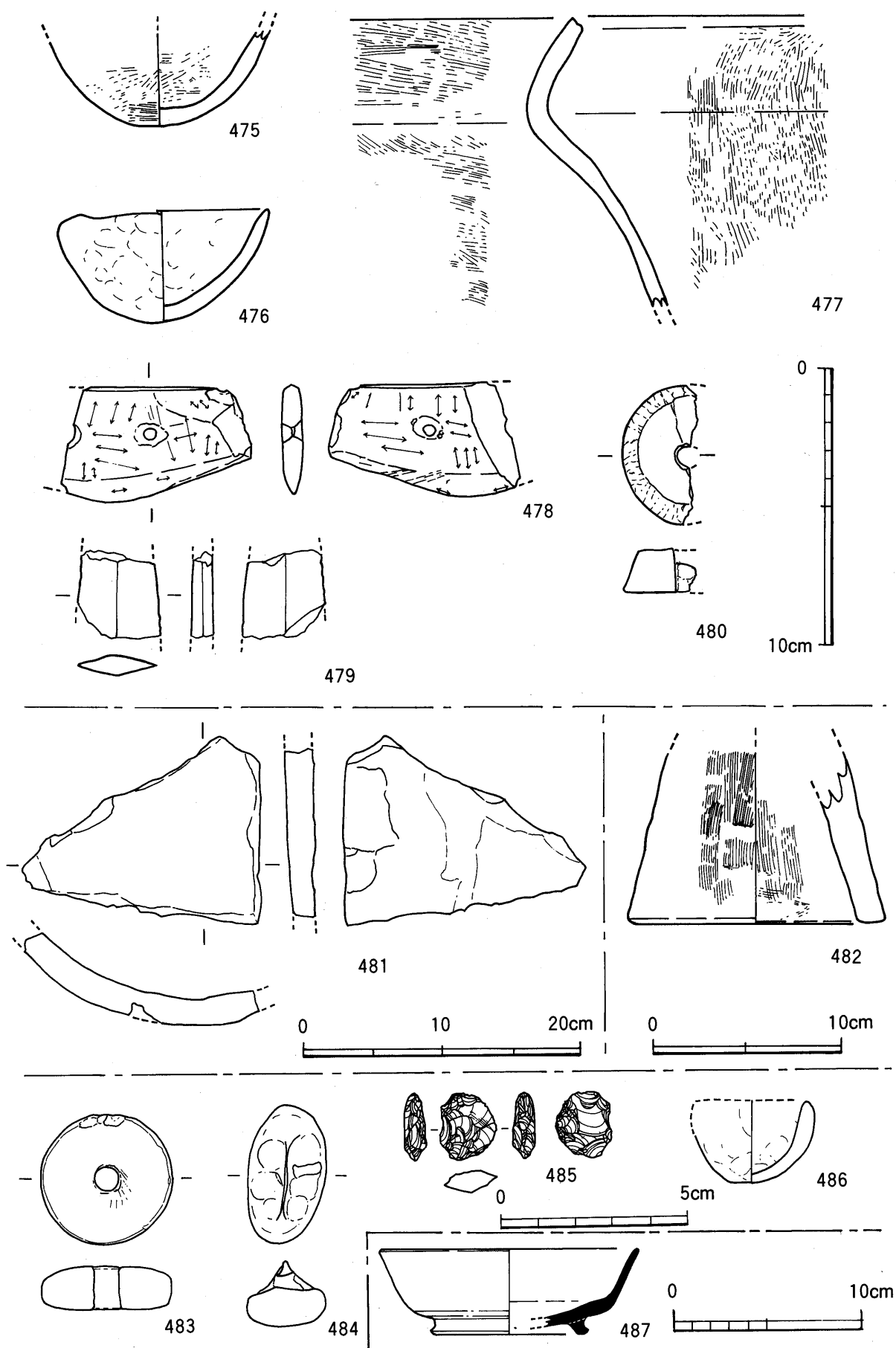


Fig.68 Pit出土遺物実測図 (S1/2・1/3・2/3・1/4)

胴部中位までの破片。残存高13.55cmを測り、胎土には1mm程の砂粒と赤褐色土を含んでいる。外面浅黄橙色(7.5YR 8/6)・橙色(5YR 7/8)、内面浅黄橙色(7.5YR 8/6)・橙色(5YR 7/8)・褐灰色(5YR 6/1)の色調をなす。外面にはハケメ後ナデが、内面口縁部にはヨコナデ、胴部にはヘラケズリもしくはヘラケズリ後ナデ調整が施されている。**431**はPit 320から出土した器台。外面にぶい黄橙色(10YR 7/2)・ぶい黄橙色(10YR 5/1)、内面褐灰色(7.5YR 6/1)の色調をなす。少量の細砂粒と角セン石を含んだ胎土で、焼成は普通である。復元口径14.65cm、器高17.8cm、裾部径14cmを測る。内面はナデと裾部がハケメ、外面はハケメ、部分的にナデを施している。同様にPit 320から出土の**432**は、復元口径14cm、残存高14.2cmを測る器台。色調は、内面にぶい黄橙色(10YR 6/4)、外面黄橙色(10YR 8/6・7.5YR 7/8)を呈す。細砂粒とウンモを含んだ胎土で、焼成は普通である。内面体部上位はナデによる仕上げだが、指頭痕を残す。体部下位はハケメ後ナデによる調整。受部はハケメ調整で仕上げる。外体部はハケメ後、部分的にナデヲを施している。口縁部の一部を僅かに欠損する**433**の壺はPit 306より出土。口径10.55cm、最大胴径14.65cm、器高14.8cmを測り、内外面の色調とともに浅黄橙色(7.5YR 8/3)を呈す。胎土には1~2mmの砂粒が含まれるも焼成は普通。口縁部外面はヨコナデ、内面にはハケメ後ナデを施す。外面の頸部から胴部上位にはハケメ後ヨコナデが、胴部中位から底部まではハケメ後部分的にナデを施している。頸部内面はナデが施されているが指頭痕を残し、胴部はケズリで仕上げている。Pit 1010より出土のFig. 66-**435**は、台付甕の破片。残存高9cm、裾部径18.1cmを測り、内外面浅黄色(2.5YR 8/3)の色調を呈す。内面の調整は、ナデハケメ・ハケメ後ヨコナデを施すが、粘土接合痕が部分的に残る。外面の裾部はハケメ後ヨコナデ、他はローリングのため不明瞭だがミガキで調整を施している。焼成は普通で、0.5~1.5mmの砂粒・ウンモ・角セン石を含んだ胎土をなす。**437**はPit 1274からの出土の器台。裾部の1/3を欠損。口径12.95cm、器高17.8cm、裾部復元径14.55cmで、内外面の色調ともに浅黄橙色(7.5YR 8/3)・橙色(5YR 6/6)を呈す。調整はハケメ・ナデ仕上げだが、外面はタタキの後ハ

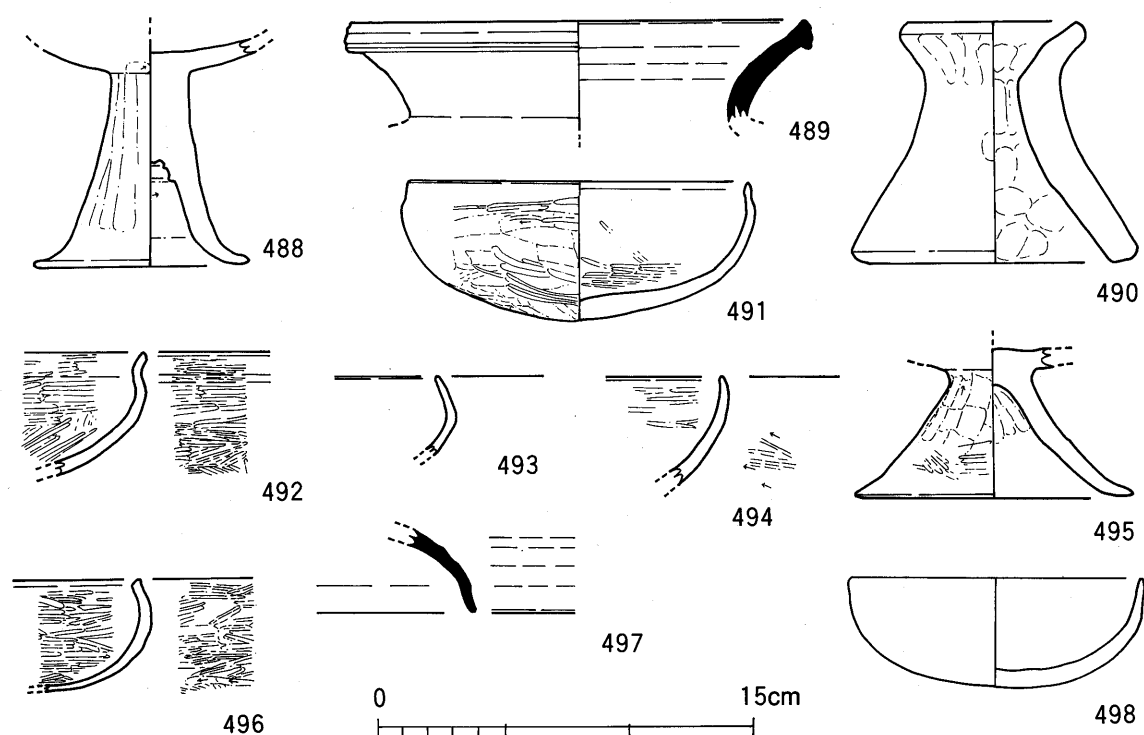


Fig. 69 Pit出土遺物実測図 (S1/3)

ケメを施している。**439**は石包丁で刃部・背部はローリングのため剥離欠損が多い。孔のあけかたも粗雑。部分的に紐づれの痕を残す。Pit 1082より出土。鉢の口縁である**441**はPit 1181から出土した。残存高8.8cm、内外ともに、にぶい浅橙色（10YR 6/4）を呈す。少量の砂粒とウンモを含んだ胎土で焼成は普通。内面はハケメ、内外面口縁端部はハケメ後ナデが施され、外面体部上位はタタキ、下位はタタキ後ケズリが施されている。甑の破片である**442**は僅かな砂粒を含んだ胎土で、焼成は普通。外面の調整はハケメ後ナデで仕上げ。口縁端部は内外ともヨコナデ、内面はケズリ、下位はケズリ後ナデ、部分的にミガキを施している。孔の部分はケズリ後ナデ仕上げで、Pit 1390から出土。Fig. 67—**447**の坏はPit 1068より出土。器高4.75cmを測り、焼成は普通で、胎土は精製されている。内面橙色（5YR 7/8）、外面明赤褐色（5YR 5/6・5/8）の色調を呈す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ後ヘラミガキで仕上げています。Pit 1068出土の**448**は口径15.2cm、器高6.6cmを測り僅かな砂粒・ウンモを含んだ胎土で焼成は良好。内体部はヘラナデ後ヘラミガキ、外体部中～下位はケズリ後ヘラミガキで仕上げ、口縁部付近はヨコナデ後ヘラミガキを施す。口縁部は直立する。色調は外面橙色（5YR 6/6）、内面明赤褐色（2.5YR 5/8）・にぶい赤褐色（5YR 4/3）を呈すが内外面ともにススが付着している。同様にPit 1068から出土の**450**は胎土が精良で、焼成良好な坏。内外面の色調ともに明赤褐色（5YR 5/6）をなす。外体部はヘラミガキ、内面はヘラナデで仕上げています。Pit 1429から出土した若干歪みのある坏**457**は、胎土には細砂粒・ウンモを少量含み、焼成は普通。口径11.8～12.6cm、器高6.1cmを測る。外体部はヘラケズリ後ナデとヘラケズリ後部分的にヘラミガキで仕上げ、内面はナデを施す。**460**の蓋はPit 1509より出土。復元口径13.15cm、器高4.3cmで、外面灰色（N5）、内面灰色（5Y 5/1）の色調を呈す。1～2mmの砂粒を多く含んだ胎土で、焼成は普通である。外天井部はヘラケズリ、体部から内体部までヨコナデ、内天井部はナデを施す。外面の体部と口縁部堺に沈線を有する。Pit 1546出土の支脚**466**は底径9.6cm、受部5.6～8.1cm、器高11.2cmを測る。色調は内外面ともに浅黄橙色（7.5YR 8/4）を呈す。胎土には1～3mmの砂粒が多く含まれ、焼成は普通。調整は内外ともにナデ仕上げだが、指頭痕を残す。口径13.9cm、器高4.5cmを測る**470**の蓋はPit 1743から出土。外面灰白色（N7）・暗灰色（N3）、内面灰白色（N7）の色調をなし胎土には多くの砂粒が含まれるが、焼成は普通。内体部から外体部の一部までがヨコナデで仕上げ、外天井部はヘラ切後ナデ、内天井部はヨコナデ後ナデを施している。**472**は復元口径13.6cm、残存高3.8cmを測り、色調は内外面ともに灰白色（7.5Y 7/1）をなし、焼成は普通。内面から外面口縁部まではヨコナデ、外天井部はヘラケズリで仕上げる。内天井部には当て具痕が残る。Pit 1775より出土。Pit 1580から出土した**473**の砥石は、ほぼ全面を砥面として使用している。一部に熱を受けた痕跡が認められる**474**は、サヌカイト製の石鏃で刃部は鋸歯鏃的である。片方の脚部を欠損。Pit 1761出土。Fig. 68—**476**は、口径7.5cm、器高4cmを測る手捏土器。内外面の色調ともに浅黄橙色（10YR 8/4）を呈す。調整は内外ともにナデ仕上げだが、指頭痕を顕著に残している。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は普通。Pit 1983から出土した。**477**はPit 2021から出土した甕の破片。胎土には1～3mmの砂粒が多く、また少量のウンモを含み、焼成は普通。外面にぶい橙色（7.5YR 7/3）、内面浅黄橙色（10YR 8/3）の色調を呈す。赤紫粘板岩製の石包丁片である**478**はPit 660より出土。1/2程度欠損しているが、使用頻度は高い。Pit 1546から出土した**482**は残存高9.3cm、復元裾径13.8cmを測り、内外の調整はハケメで仕上げ、外面にはウッスラと指頭痕を残している。色調は内面灰色（5Y 6/1）、外面黄橙色（10YR 8/6）・橙色（5YR 6/8）を呈す。焼成は普通。Fig. 69—**488**はPit 1811より出土の高坏の脚部。復元裾部径

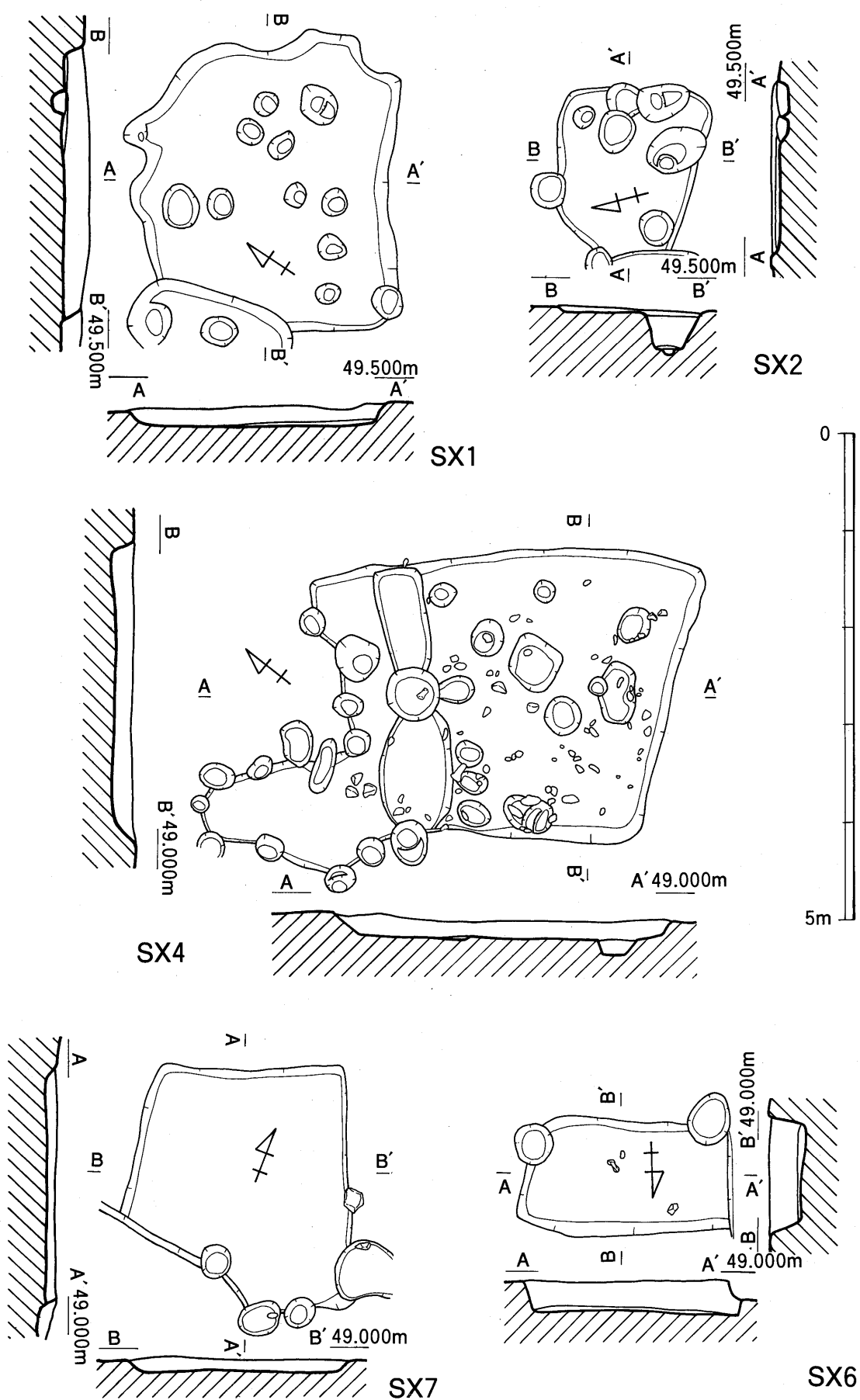


Fig.70 SX1・2・4・6・7実測図 (S1/60)

8.5cm、残存高9.1cmを測り、内外面の色調、橙色（5 YR 7 / 4）を呈す。胎土には細砂粒・赤褐色粒を僅かに含み、焼成は普通である。内面の調整はケズリまたはケズリ後ナデ、裾部内外面はナデとヨコナデで仕上げ、外面はローリングのためケズリ後の調整が不明瞭となっている。Pit 1822より出土した**490**は復元口径7.4cm、復元底径11.4cm、器高9.6cmを測る。色調は外面浅黄橙色（2.5Y 7 / 3）、内面橙色（7.5YR 6 / 6）をなし、胎土には細砂粒・角セン石を含み、焼成は普通。調整は内外面ナデで仕上げるが指頭痕が明瞭に残る。赤彩を部分的に残す**491**は Pit 1858から出土した坏。口径13.3~13.7cm、器高5.6cmで、色調は外面橙色（5 YR 7 / 8）、内面浅黄橙色（7.5YR 8 / 3）を呈す。細砂粒が僅かに含まれる胎土で、焼成は普通である。口縁部の内外はヨコナデ調整、内面はヘラナデ後ミガキによる調整を、外面はヘラケズリ後部分的にヘラミガキによる調整を施している。**492**は Pit 1858から出土した坏片。残存高5cm、内外面の色調、灰褐色（7.5YR 4 / 2）をなし、内外面がヘラミガキによる調整で仕上げられている。Pit 2112から出土した坏片の**496**は残存高4.4cmを測り、明赤褐色（5 YR 5 / 8）の色調を内外ともになす。胎土には赤褐色粒を少量含んで、焼成は良好。内面から外面口縁部はミガキにて、外体部はハケメ後ナデ後ミガキ調整で仕上げる。同様に Pit 2112から出土した**498**は、ローリングが著しく調整は不明。復元口径11.7cm、器高4.4cmを測り、胎土には細砂粒・赤褐色粒・ウンモを含む。焼成が普通の坏片で、外面灰白色（10YR 8 / 2）、内面にぶい浅橙色（10YR 7 / 2）の色調を呈す。

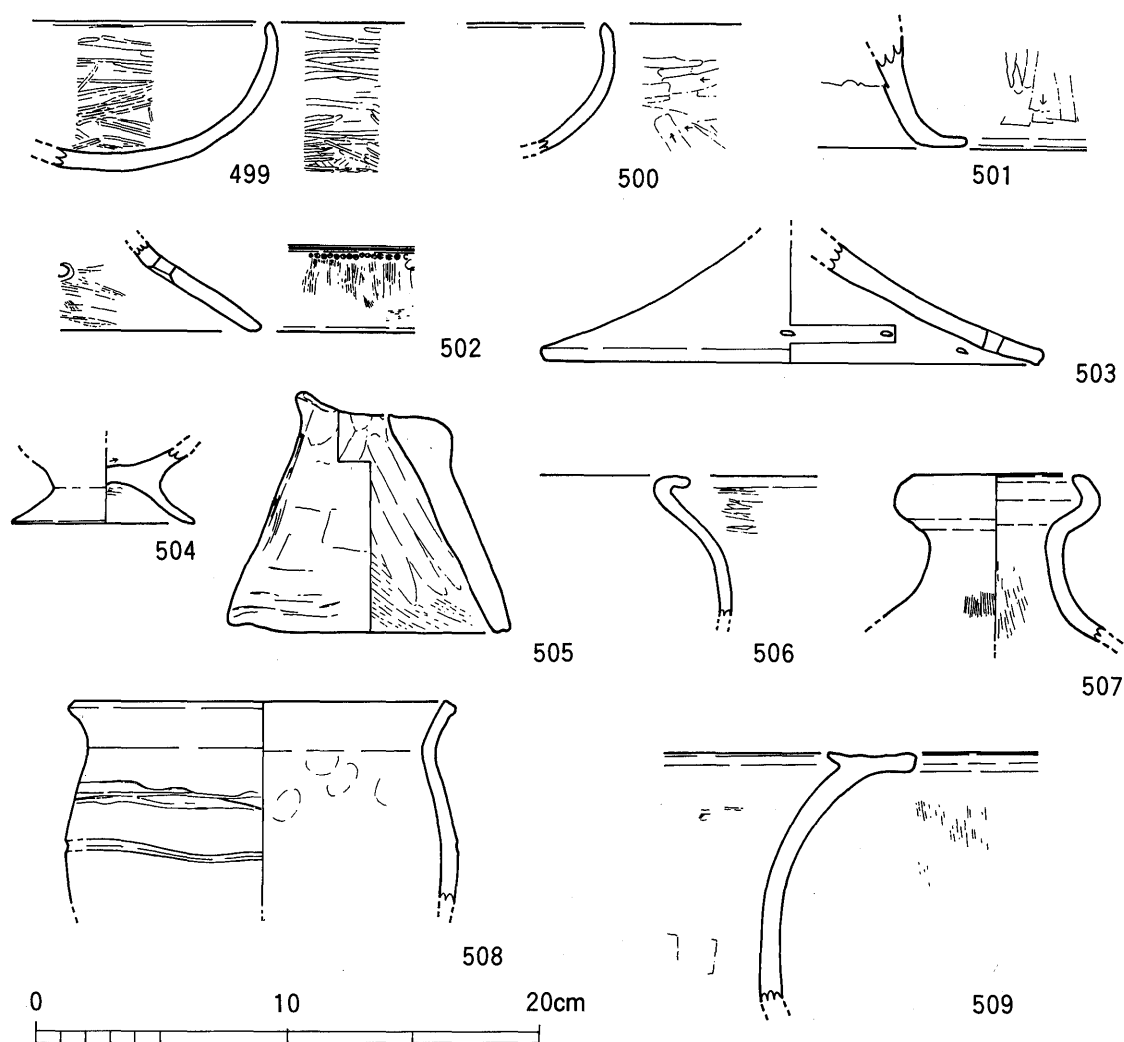


Fig.71 SX 4・5・7・8・11出土遺物実測図（S1/3）

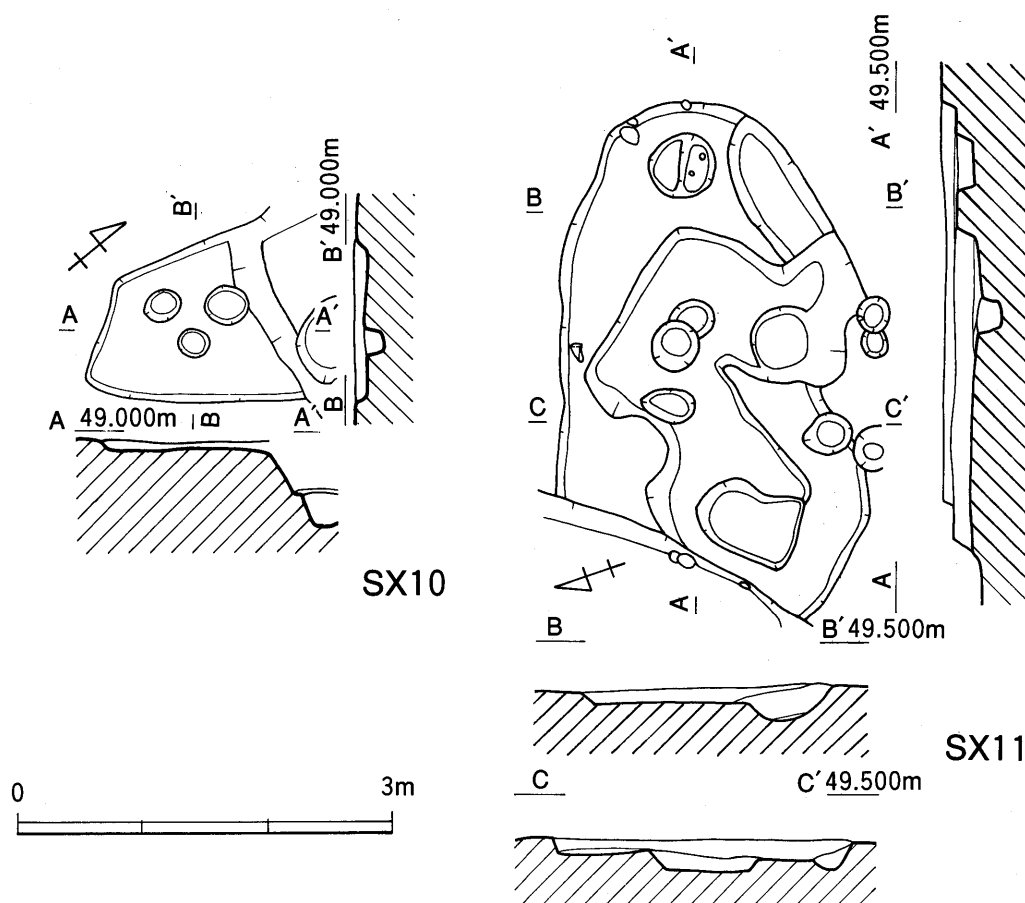


Fig.72 SX10・11実測図 (S1/60)

(9) 性格不明遺構 (SX)

SX 1 (Fig. 70, PL. 12) SD 1 を切って、SK 5 に切られる。Pit と重複するため壁が蛇行するが、本来はやや整った寸づまりの長方形プランを呈していたと思われる。土坑もしくは住居跡かとも考えられるが、調査区内の土坑・住居跡とは違い砂礫層が埋土であったため SX として扱った。長軸 2.9m、短軸 2.6m の規模で、深さは 15cm 前後を測り、遺物の出土もなかった。

SX 2 (Fig. 70) SC120 に切られ、北壁長 1.2m、東壁 1.4m、南壁 1.5m、西壁 1.2m 前後の長さの不整形な形状を呈す。深さは 5cm 前後で浅く、遣りは悪い。遺物は図示できなかった。

SX 4 (Fig. 70) SC94 を切って SD14 に切られる。西壁側が異状に突き出ているが、埋土的には、さほどの変化はなく同一遺構と考えてよい。底面には礫が多く露呈し、深さは 20cm 前後を測る。遺物は多量に出土したが、Fig. 71-499~501・504 だけが図示できた。**499** はヘラミガキで調整された坏。口縁部は僅かに内傾している。**500** の坏は外面ケズリ後ミガキ、内面はヨコナデもしくはナデで調整。**499・500** ともに微量の砂粒とウンモを含んだ胎土で、焼成は良好である。**504** は高坏の脚部片。焼成良好で、胎土には細砂粒と赤褐色粒を含む。外面の調整はケズリ後ミガキ、裾部は内外ともにヨコナデ、内面はヨコナデ後ナデを施している。

SX 5 サブトレンチ内で検出。不整形な形状をなす。明確に遺構になるとは考え難く、地山の凹地の可能性がある。出土した遺物は、時期差がある。図示できたのは Fig. 71-502・508 である。**502** は、竹筭文を巡らした器台の裾部片。**508**、復元口径 15.4cm、残存器高 8.2cm を測る甕で、外面浅黄橙色 (7.5YR 8/4)、内面にぶい橙色 (7.5YR 6/4) の色調を呈す。

SX 6 (Fig. 70) SC105、Pit 1503・1513に切られる。長軸にあたる北・南壁の長さ1.6～2.1+ α m、短軸1.2m 前後を測る不整長方形を呈する可能性をもつ。周辺の礫を廃棄した様相をなす。礫は集石して炉を形成していたとは考え難い。遺物は細片ばかりが出土した。

SX 7 (Fig. 70) SC105、Pit 1529・1535・1537に切られる。北壁長1.9m、東壁2.4m、西壁1.6+ α m の長さを測るが南壁側の詳細は不明。遺存部の壁から推測すると不整長方形の可能性もある。底面には Pit はなく、深さは12cm 前後である。図示できた遺物は Fig. 71-503の蓋。復元口径20cm、残存器高4.85cm を測り、内外面の色調、灰白色 (10YR 8/2) を呈し、焼成は普通である。

SX 8 1・2号石棺墓を囲むように検出。南は未調整区の方へ延び、大きな凹地を形成する。明確な遺構とは考え難く、凹地の可能性をもつ。遺物は多量に出土したが、Fig. 71-506・507・509だけが図示できた。**506**は無頸壺の口縁部片。残存高5.7cm、胎土に細砂粒を僅かに含み、焼成は普通。調整はローリングのため不明瞭となる。**507**、胎土に多量の細砂粒を含み、焼成は普通の袋状口縁の壺。内外の色調は浅黄橙色 (10YR 8/4) をなす。調整はローリングのため不明だが、ウッスラと赤彩を残す。**509**は壺の口縁部片で、外面にぶい黄橙色 (10YR 7/3)、内面橙色 (7.5YR 7/6) の色調を呈し、胎土に砂粒・ウンモを含んで、焼成は普通。

SX 9 SC23・24に切られる。これも遺構というより、楕円形の凹地と考えた方が妥当と思われる。遺物は細片が多く図示できるものはなかった。

SX10 (Fig. 72) SC103とSD18の間で検出。これも遺構というより浅い凹地と考えた方が良いもので、遺物はSX 9と同様に細片が多量に出土した。

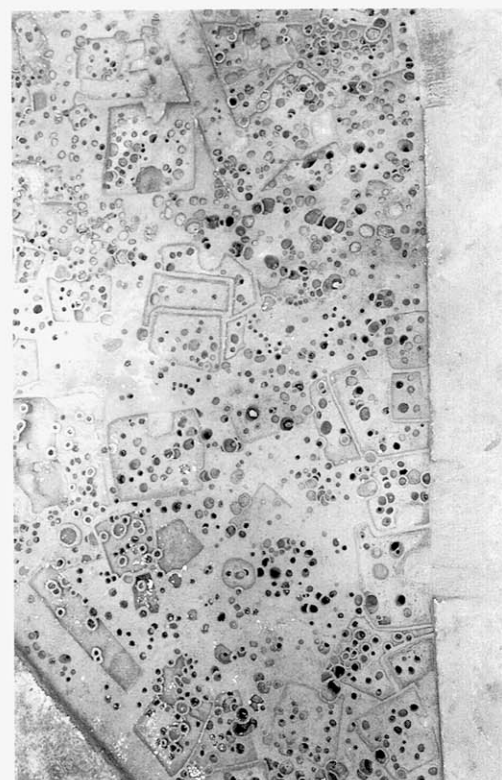
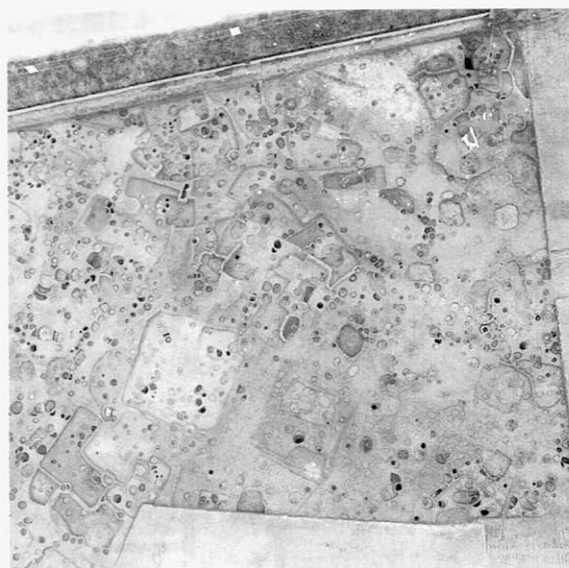
SX11 (Fig. 72) SC41・43に切られて、平面は不整形なプランを呈する。底面もかなりの凹凸があり、深さも一定しない。多量の遺物が出土したが、Fig. 71-505だけが図示できた。**505**は内外ともに浅黄橙色 (7.5YR 8/4) の色調をなす器台。内面の調整は上部がナデのみ、下部がハケメ後ナデで仕上げ、外面はヘラナデによる調整で一部にハケメを施している。

4. 小結

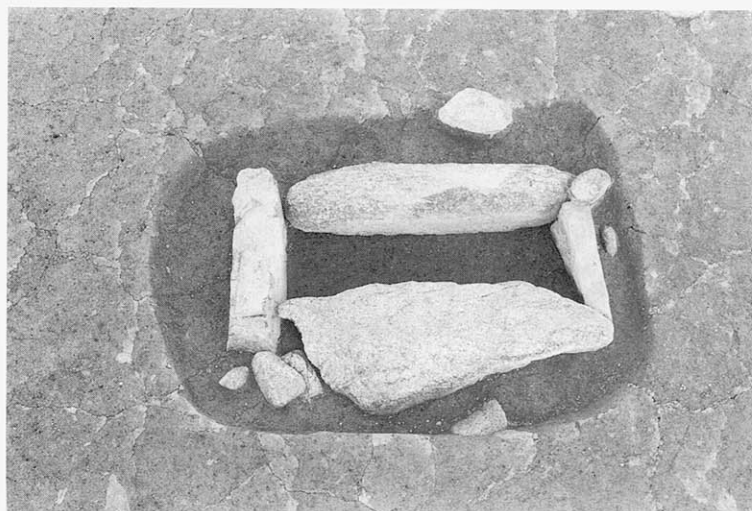
今回は調査開始平成7年12月～8年3月までに検出した遺構のみを掲載した。前述したように予算の状況の変化により3分割とせざるを得なくなったため、1・2・3と報告書掲載内容にバラつきがあるのは了承願いたい。1・2で調査の事実報告そして3で事実報告とまとめを掲載したいと考えている。

整理報告をまとめていく中で、Pit列が東西・南北方向に並んでいるのが確認されたが、この列状のものの時期・配置される意図について、まだ考えがまとまらないでいる。3分冊目が刊行される時までには、解決を計り、なんらかの成果を示したい。

図 版



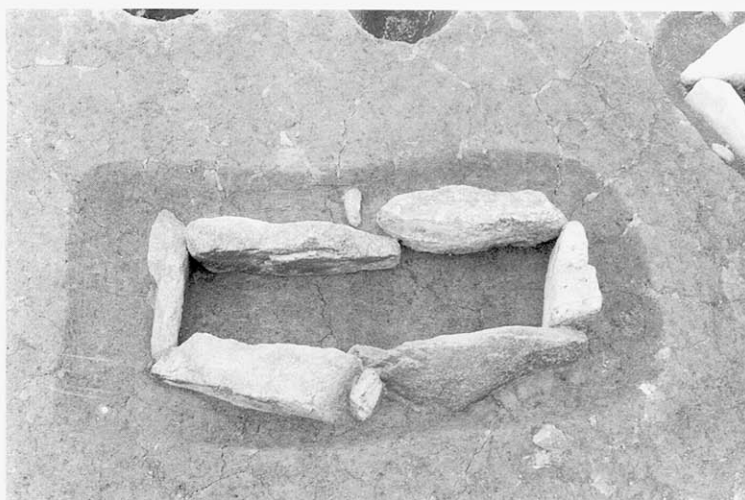
全 景



1号石坟墓



1号甕坟墓



2号石坟墓



2号甕坟墓



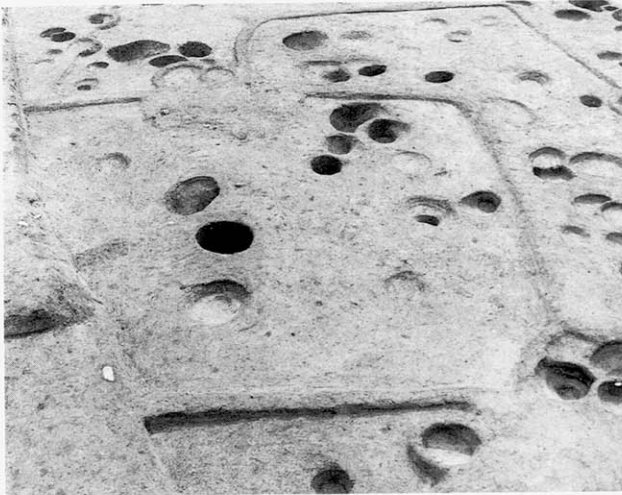
3号石坟墓



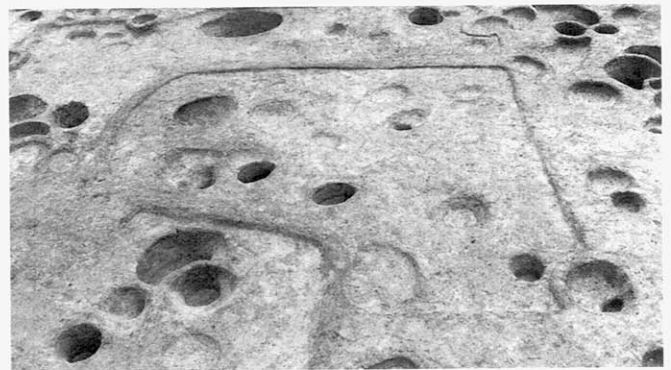
3号甕坟墓



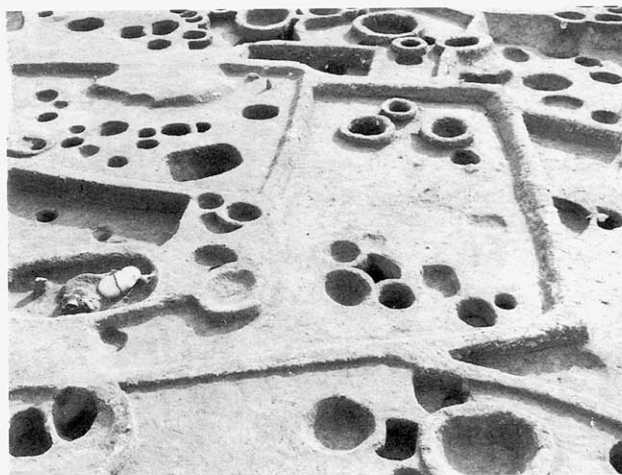
SC 2 • 3



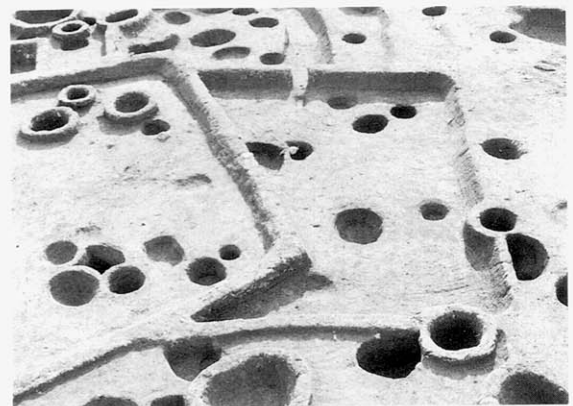
SC 4



SC 5



SC 9



SC16



SC17



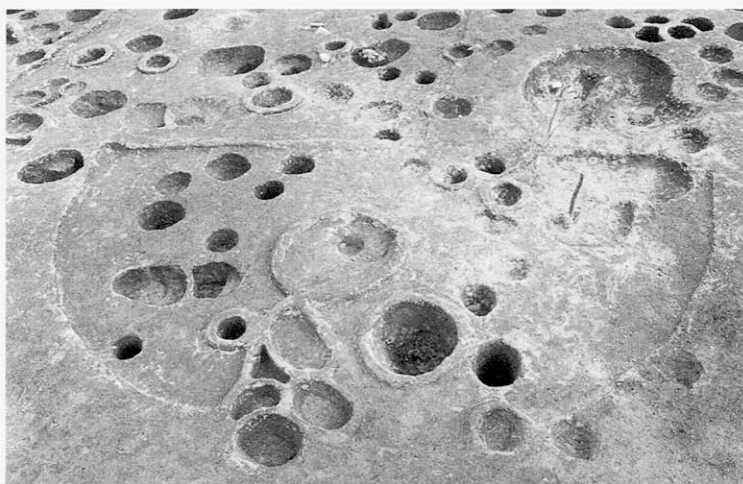
SC20



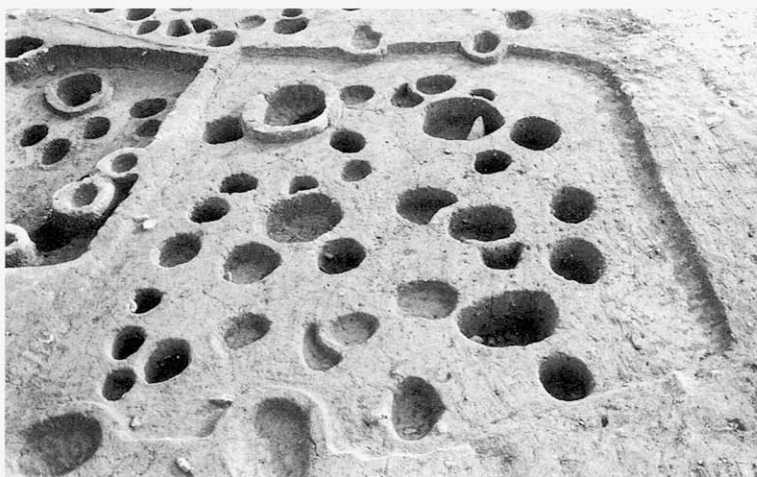
SC21



SC24



SC28



SC31



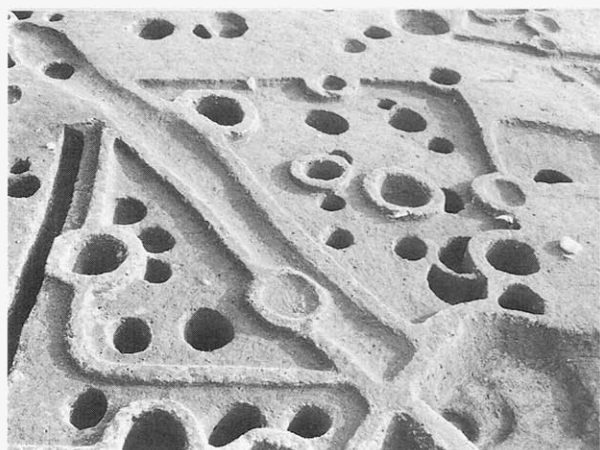
SC30



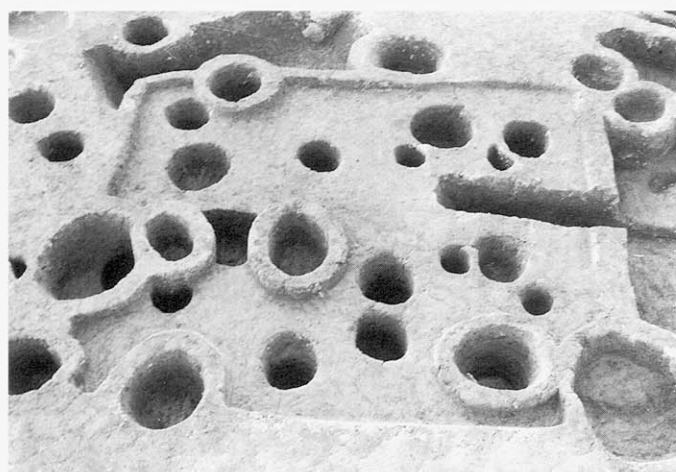
SC33



SC35



SC36



SC38



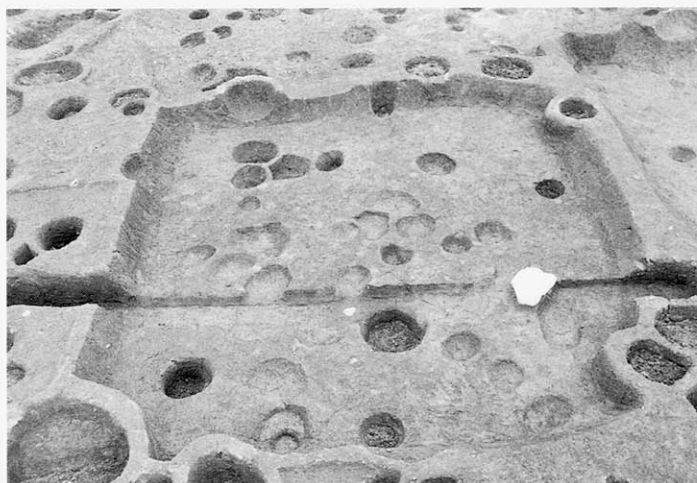
SC40



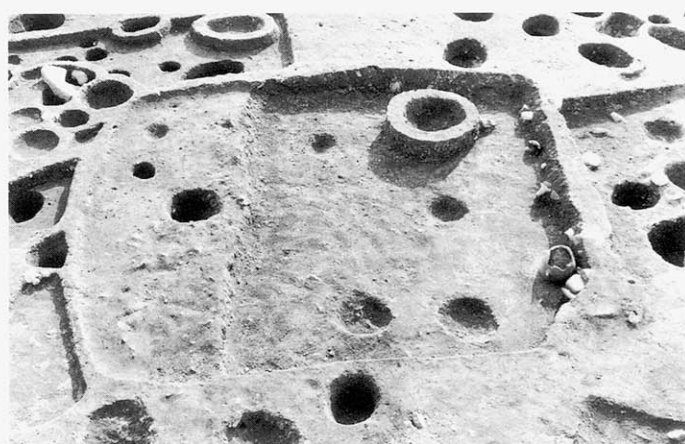
SC43



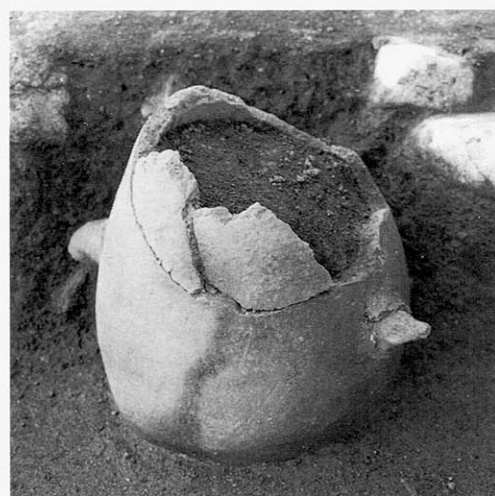
SC50



SC49



SC53



SC53 遺物



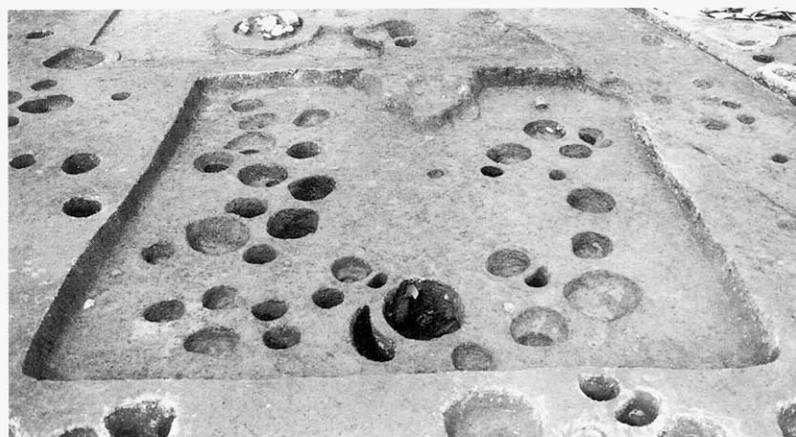
SC54



SC55・56



SC57



SC67



SC67 床面遺物



SC68



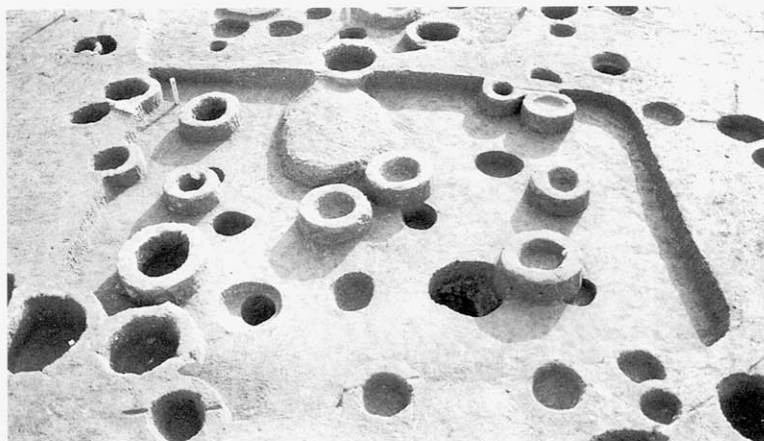
SC71



SC72



SC76



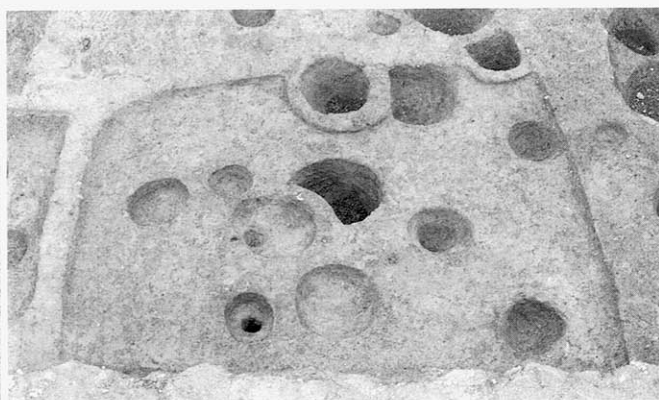
SC83



SC87



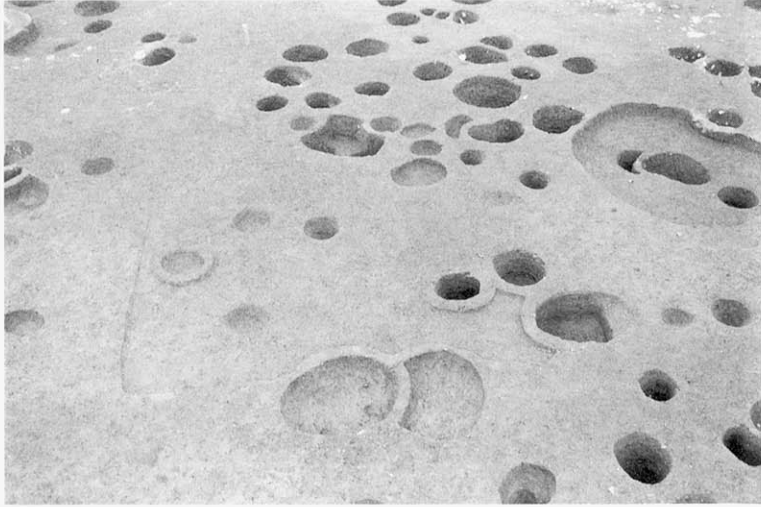
SC93



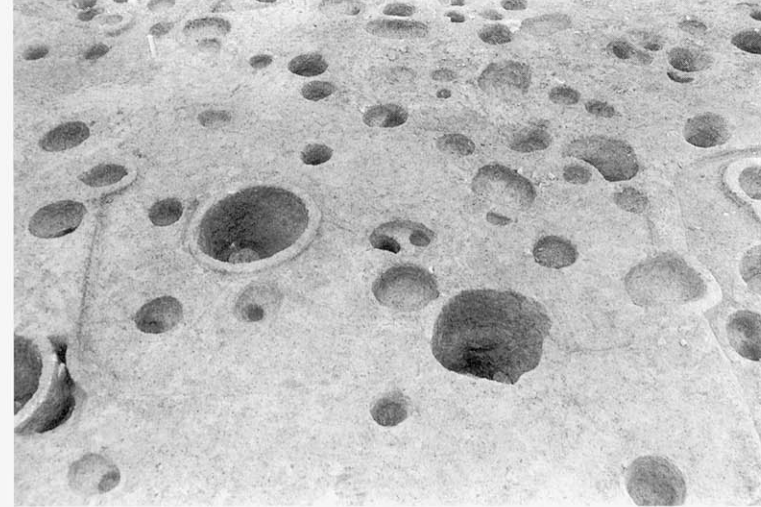
SC96



SC97



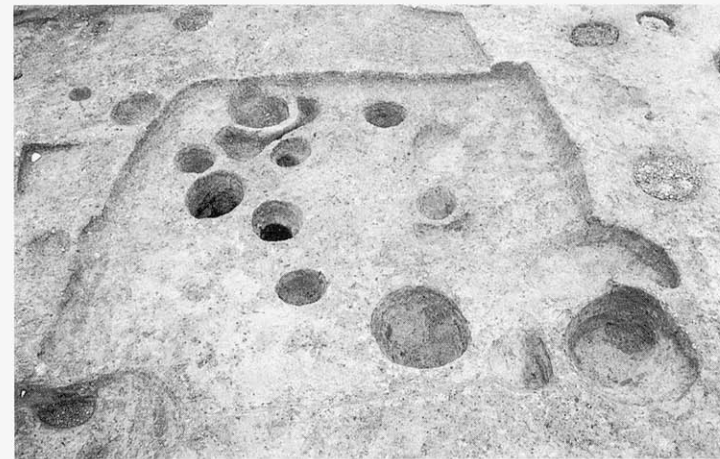
SC101



SC102



SC103



SC108



SC 25 カマド



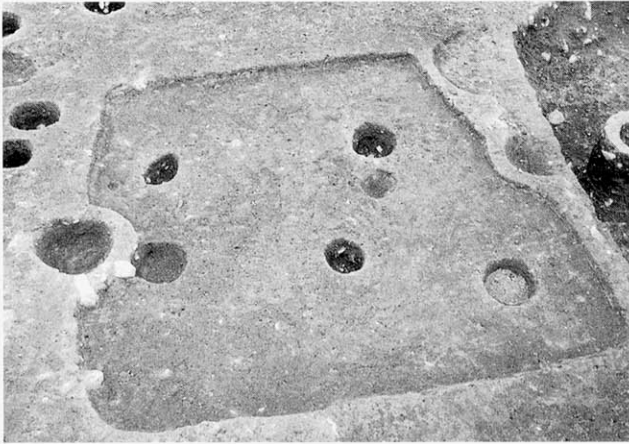
試掘トレンチに切られたカマド



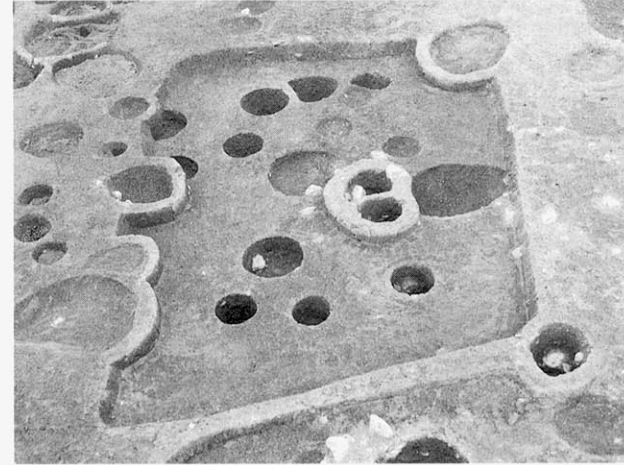
カマド遺物近景



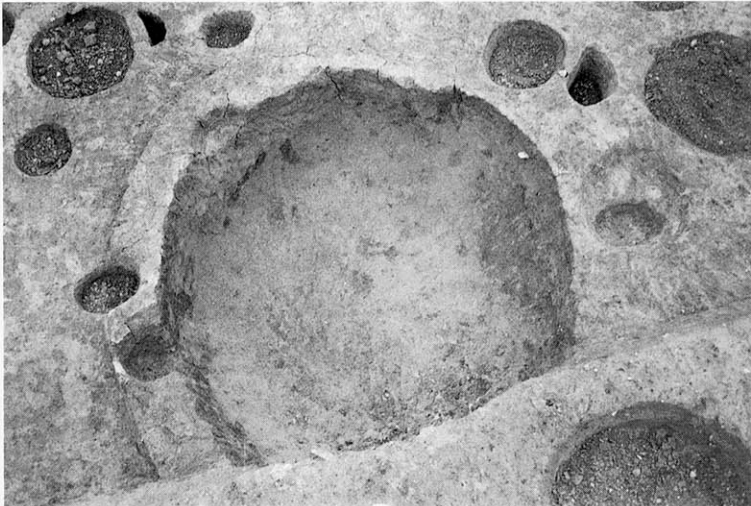
遺物除去後支脚



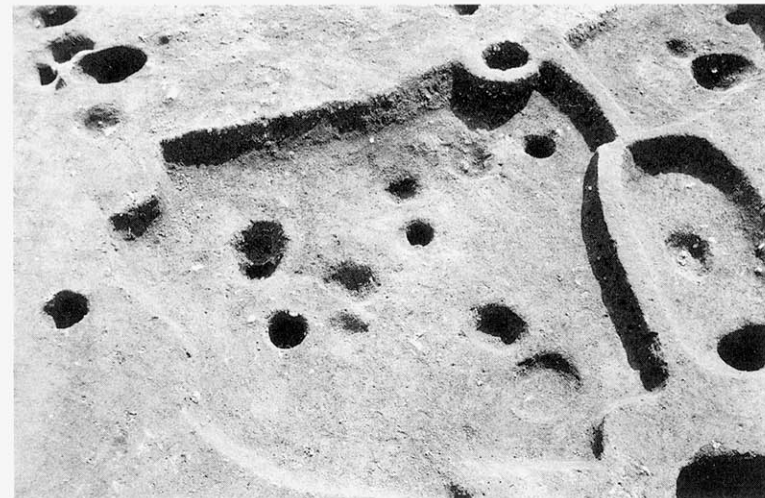
SC105



SC135



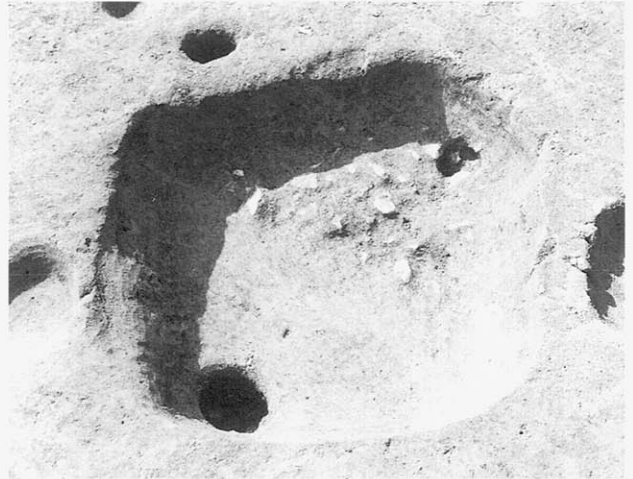
SP 1



SX 1



SK 1



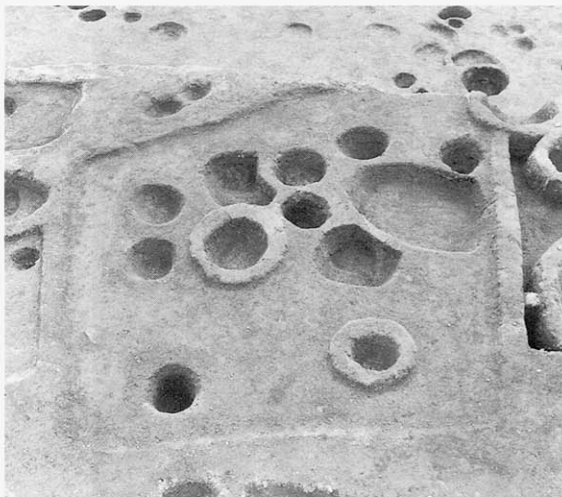
SK 2



SK 3



SK 4



SK 8



SK12



Pit.823



Pit.1764



Pit.1763



Pit.1865



Fig.3-1



Fig.3-2



Fig.3-3



Fig.3-4



Fig.3-5



Fig.3-6



Fig.3-18



Fig.3-21



Fig.3-7



Fig.3-8



Fig.3-9



Fig.3-10



Fig.3-11



Fig.3-12



Fig.3-19



Fig.3-20



Fig.3-22



Fig.3-13



Fig.3-14



Fig.3-15



Fig.3-16



Fig.3-17



Fig.3-23

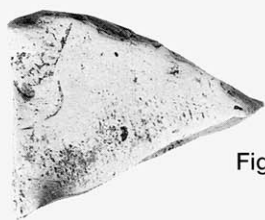


Fig.4-24

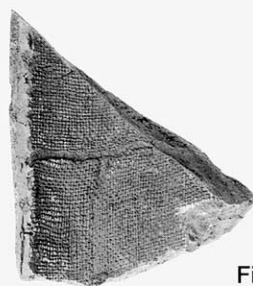


Fig.4-25



Fig.4-31



Fig.4-32



Fig.4-33



Fig.4-34



Fig.4-35



Fig.4-36



Fig.4-29



Fig.4-30



Fig.4-27



Fig.4-28



Fig.9-43



Fig.9-45



Fig.4-37



Fig.4-26



Fig.9-44



Fig.9-46



Fig.10-48



Fig.10-50



Fig.10-52



Fig.13-56



Fig.13-55



Fig.13-53



Fig.10-51



Fig.13-54



Fig.14-58

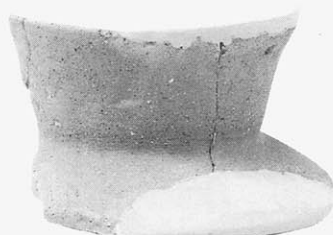


Fig.14-59



Fig.14-60

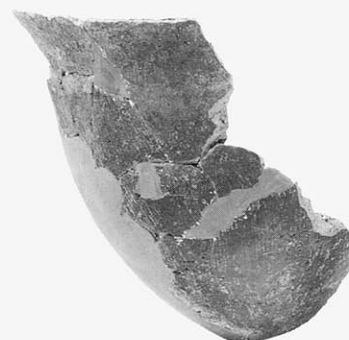


Fig.14-61

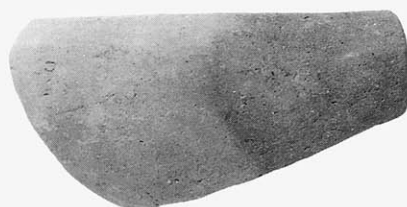


Fig.18-66



Fig.18-67



Fig.18-68



Fig.18-70



Fig.18-71



Fig.18-72

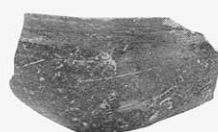


Fig.18-74



Fig.18-73



Fig.18-75



Fig.18-76



Fig.18-81



Fig.18-80



Fig.18-77



Fig.18-78



Fig.18-85



Fig.18-82



Fig.18-83



Fig.18-86



Fig.18-90



Fig.18-92



Fig.18-87



Fig.18-91



Fig.18-95



Fig.18-96



Fig.16-62



Fig.20-97

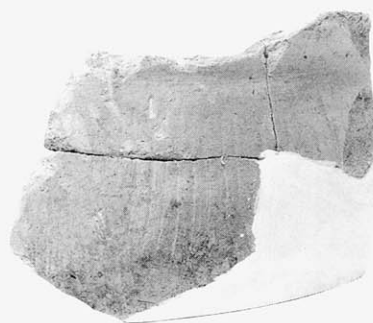


Fig.16-63



Fig.16-64



Fig.20-103



Fig.20-104



Fig.20-99

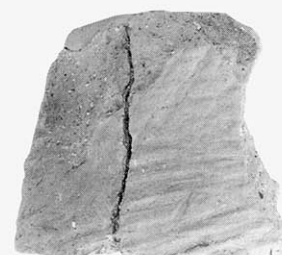


Fig.20-100



Fig.20-101



Fig.20-109

Fig.20-112



Fig.20-110



Fig.20-114



Fig.20-105

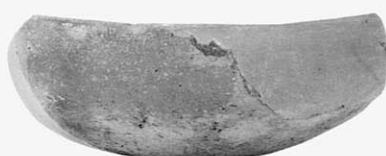


Fig.20-111



Fig.20-116



Fig.20-102

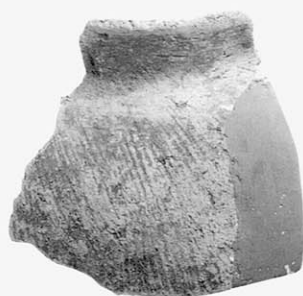


Fig.20-106

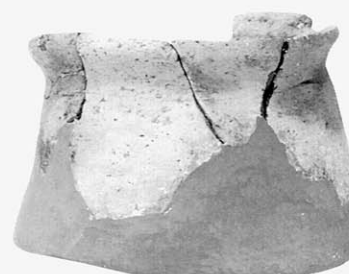


Fig.22-118



Fig.22-117

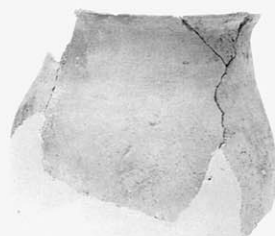


Fig.22-119



Fig.22-121



Fig.22-123



Fig.22-124



Fig.22-126



Fig.22-130



Fig.22-127



Fig.22-131



Fig.22-129



Fig.23-132

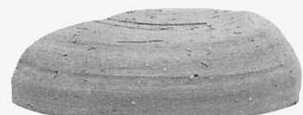


Fig.23-133



Fig.23-135



Fig.25-143



Fig.25-146



Fig.25-147



Fig.25-148



Fig.25-149



Fig.25-155



Fig.23-137



Fig.23-141



Fig.25-154



Fig.25-145



Fig.25-153



Fig.25-163



Fig.25-164

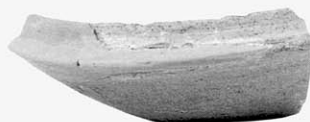


Fig.25-158



Fig.25-159



Fig.23-138



Fig.23-134



Fig.23-140



Fig.25-161



Fig.25-160



Fig.25-150



Fig.25-151



Fig.25-152



Fig.28-166



Fig.28-167



Fig.28-168



Fig.28-170



Fig.28-171

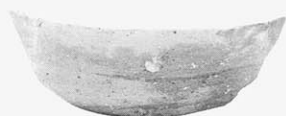


Fig.28-169



Fig.28-172



Fig.28-173



Fig.30-175



Fig.30-178



Fig.30-181



Fig.30-176



Fig.30-174



Fig.30-177



Fig.30-179



Fig.30-184



Fig.30-185



Fig.30-186



Fig.30-195



Fig.30-190



Fig.30-193



Fig.30-196



Fig.30-194



Fig.30-187



Fig.30-189

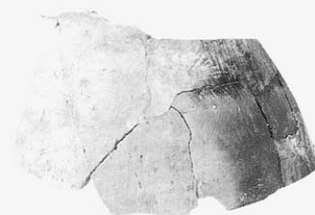


Fig.30-188



Fig.31-198

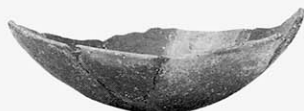


Fig.31-208



Fig.31-199



Fig.31-209



Fig.31-202



Fig.31-210



Fig.31-205



Fig.31-206



Fig.31-207



Fig.34-212



Fig.34-213



Fig.34-214



Fig.34-215



Fig.35-227



Fig.35-216



Fig.35-217



Fig.35-219



Fig.35-220



Fig.35-221



Fig.35-222



Fig.35-224



Fig.35-225



Fig.35-226



Fig.35-228



Fig.35-229



Fig.35-230



Fig.35-238



Fig.35-236

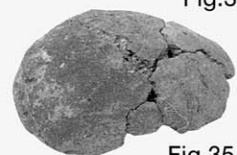


Fig.35-237

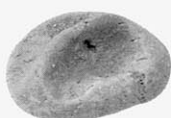


Fig.35-231



Fig.35-232



Fig.35-233



Fig.35-234



Fig.35-239

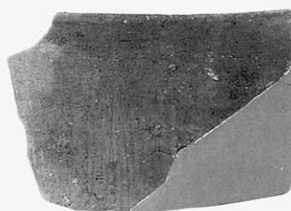


Fig.35-240



Fig.35-235



Fig.35-241



Fig.35-242



Fig.35-243



Fig.37-251



Fig.37-255



Fig.37-249



Fig.37-252



Fig.37-253



Fig.37-258



Fig.37-256



Fig.37-257



Fig.37-259



Fig.37-260



Fig.37-244



Fig.37-245



Fig.37-247



Fig.37-248



Fig.39-272



Fig.39-261



Fig.37-246



Fig.39-262



Fig.39-268



Fig.39-265



Fig.39-267

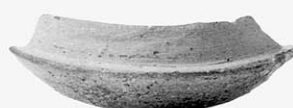


Fig.39-263



Fig.39-264



Fig.39-266



Fig.39-273



Fig.41-274



Fig.41-277



Fig.41-275



Fig.41-280



Fig.41-283

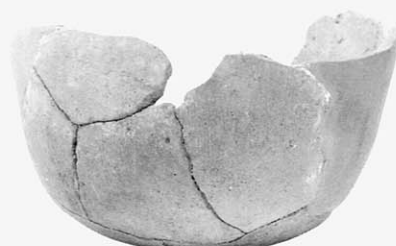


Fig.41-276



Fig.41-281



Fig.42-288



Fig.42-289



Fig.42-293



Fig.43-301



Fig.43-308



Fig.43-303



Fig.43-305



Fig.43-302



Fig.43-296



Fig.43-297



Fig.43-298



Fig.43-304



Fig.43-307



Fig.43-294



Fig.43-295



Fig.43-299



Fig.44-309



Fig.44-311



Fig.44-310



Fig.44-312



Fig.45-323



Fig.45-324



Fig.45-316



Fig.45-317



Fig.45-318



Fig.45-319



Fig.45-322



Fig.45-325



Fig.45-321



Fig.45-326



Fig.45-327



Fig.46-328



Fig.46-330

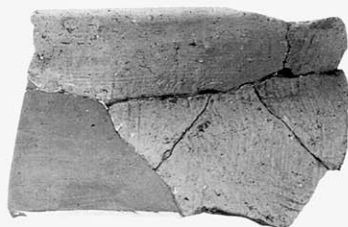


Fig.46-329



Fig.46-331



Fig.46-334



Fig.46-333



Fig.54-363



Fig.51-359



Fig.51-360



Fig.52-361



Fig.57-369



Fig.56-366



Fig.56-368



Fig.59-376



Fig.58-373



Fig.61-380



Fig.61-382



Fig.59-377

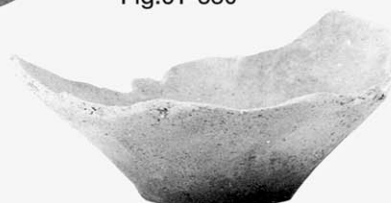


Fig.61-378



Fig.61-381



Fig.61-383



Fig.62-384



Fig.47-337



Fig.47-338



Fig.47-339

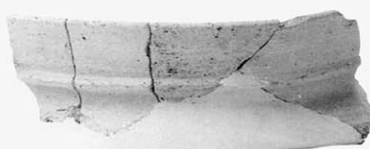


Fig.47-341



Fig.47-342



Fig.47-340



Fig.48-345



Fig.48-349



Fig.48-350



Fig.48-346



Fig.49-356



Fig.48-355



Fig.48-347



Fig.48-351

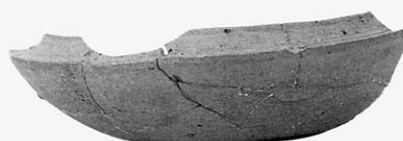


Fig.49-357



Fig.48-348



Fig.63-385

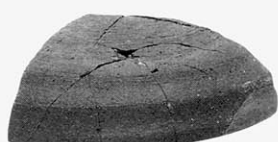


Fig.63-387



Fig.63-390

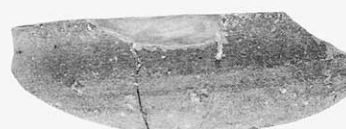


Fig.63-391

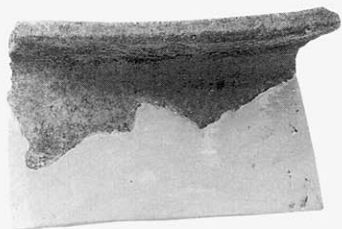


Fig.63-392



Fig.63-393



Fig.63-394



Fig.63-397



Fig.63-395



Fig.63-396



Fig.63-402



Fig.63-404



Fig.63-403



Fig.63-405



Fig.63-406



Fig.63-414



Fig.63-413



Fig.63-415



Fig.63-407



Fig.67-447



Fig.67-448



Fig.67-450



Fig.63-417

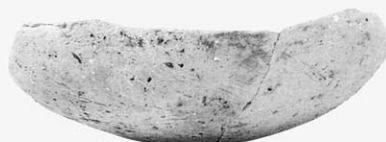


Fig.67-452



Fig.67-460



Fig.67-466



Fig.67-457



Fig.67-470



Fig.67-472



Fig.67-474



Fig.67-473



Fig.64-419



Fig.64-427

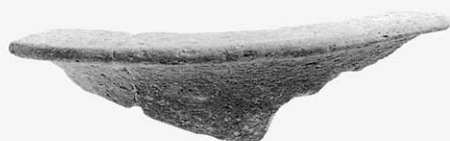


Fig.64-421



Fig.64-420



Fig.64-422

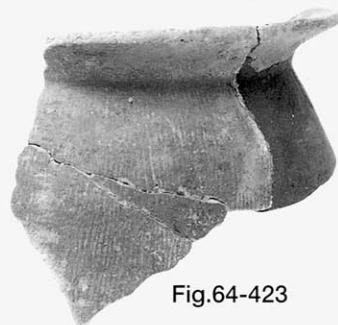


Fig.64-423



Fig.64-424



Fig.64-425



Fig.64-426



Fig.65-428



Fig.65-429



Fig.65-430



Fig.65-431



Fig.65-433



Fig.65-432



Fig.66-435



Fig.66-436



Fig.66-437

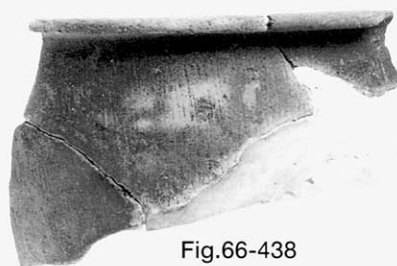


Fig.66-438

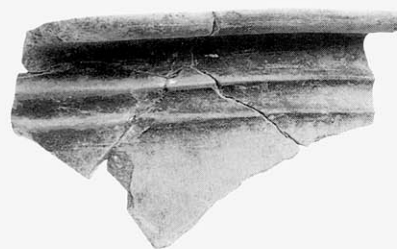


Fig.66-440



Fig.66-441



Fig.66-442



Fig.69-488

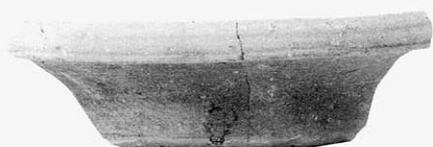


Fig.69-489



Fig.69-490



Fig.69-491



Fig.69-498



Fig.69-492



Fig.69-495



Fig.68-475



Fig.68-476



Fig.68-477



Fig.68-481

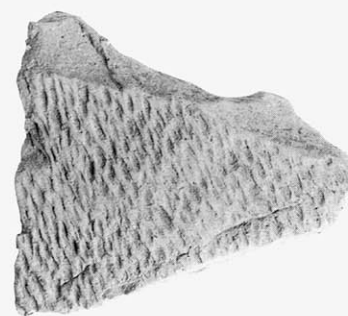




Fig.68-482



Fig.68-483



Fig.68-487

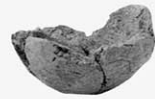


Fig.68-486



Fig.68-484



Fig.71-499



Fig.71-500



Fig.71-502



Fig.71-503



Fig.71-504



Fig.71-505



Fig.71-506



Fig.71-507



Fig.71-508

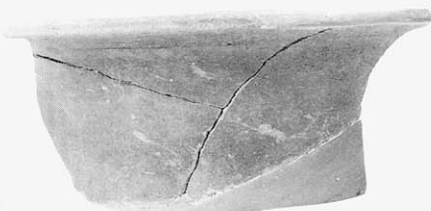


Fig.71-509

報告書抄録

フリガナ	カイモトイセキ1							
書名	貝元遺跡1							
副書名	九州自動車道筑紫野I・C建設に伴う発掘調査報告							
巻次	第60集							
シリーズ名	貝元遺跡							
シリーズ番号	1							
編著者名	渡邊 和子							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市753-1 TEL 092-923-1111 (代)							
発行年月日	西暦 1999年9月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいもと いせき 貝元遺跡	ふくおかけんちくしのし 福岡県筑紫野市 おおあざこが 大字古賀	402176	170362	33° 28' 13"	130° 31' 28"	951201 } 970331	3,000㎡	九州自動車道 筑紫野I・C 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
貝元遺跡	集落	弥生時代 } 古墳時代	溝・土坑・住居跡・ 石棺墓・甕棺墓		弥生土器 鉄器・石器 土師器 須恵器			

九州自動車道筑紫野I・C建設に伴う
発掘調査報告

貝元遺跡1

筑紫野市文化財調査報告書

第60集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡県中央区天神5丁目4番16号城戸ビル3F



付図 貝元遺跡遺構配置図一1(S 1/200)